

2023年度千年村研究ゼミ

徳島県那賀川流域調査報告書

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科

建築史系中谷礼仁建築史研究室

千年村研究ゼミ

目次

第1章 調査概要	5
1-1. 調査の目的.....	2
1-2. 調査手法.....	4
1-3. 調査対象の選定.....	5
1-4. 調査地域の概要.....	6
1-5. 調査工程の記録.....	9
第2章 各調査集落概要	10
2-1. はじめに.....	11
2-2. 坂州.....	12
2-3. 小浜.....	15
2-4. 水崎.....	18
2-5. 蔭谷.....	21
2-6. 朴野.....	23
2-7. 横石.....	25
2-8. 鎌瀬.....	27
2-9. 大久保.....	28
2-10. 延野・入野.....	30
2-11. 牛輪・鮎川.....	33
2-12. 各集落の微地形.....	37
第3章 本論・各集落について	40
3-1. はじめに.....	41
3-2. 坂州.....	42
3-3. 小浜.....	47
3-4. 水崎.....	49
3-5. 蔭谷.....	53
3-6. 朴野.....	55
3-7. 横石.....	59
3-8. 鎌瀬.....	63
3-9. 大久保.....	67
3-10. 延野・入野.....	71
3-11. 牛輪・鮎川.....	77
3-12. その他の集落調査事項.....	79
第4章 ヒアリング・実測	88
4-1 那賀川における自伐型林業.....	89
4-2 かつて筏師の宿泊した山間宿「木具屋旅館」.....	96
第5章 調査まとめ	99
5-1. 那賀川調査まとめ.....	100
図版出典・参考文献	105

本報告書の執筆分担は以下のようになっている。

第 1 章 調査概要：

- 1-1. 調査の目的：塚原
- 1-2. 調査手法：塚原
- 1-3. 調査対象地選定：塚原
- 1-4. 調査地域概要・既往研究：塚原
- 1-5. 調査工程の記録(GPS ログとスケジュール)：張
- 1-6. 本報告書の執筆分担：口石

第 2 章 各調査集落概要：

- 2-1. はじめに
- 2-2. 坂州：口石
- 2-3. 小浜：塚原
- 2-4. 水崎：二上
- 2-5. 蔭谷：若佐
- 2-6. 朴野：呉
- 2-7. 横石：碓井
- 2-8. 鎌瀬：戸田
- 2-9. 大久保：筏
- 2-10. 延野・入野：張
- 2-11. 牛輪・鮎川：塚原

第 3 章 本論・各集落について：M1※

第 4 章 ヒアリング・実測：

- 4-1-1/2. 塚原
- 4-1-3. 戸田
- 4-2.

文章：塚原

部屋割り図（作図：碓井、実測：M1）

第 5 章 調査まとめ：塚原

※第 3 章に関しては下記の項目ごとの担当者が執筆を行った。

生業(林業、農業)：呉

民家(実測した筏宿は後半のトピックとして扱う)：碓井

農村舞台：口石

信仰(神社、地神)：戸田

行事(伝統行事、町興し)：張

第 1 章 調査概要

1-1. 調査の目的

・流域スケールでの人々の「住みこなし」とその連続性・変遷に関する比較研究手法

〈千年村〉とは千年という時間単位の下に、環境的・社会的変化や災害を乗り越えて、人々住まい続けてきた土地をさす¹。直近の活動(2021～2022 年度)では、高地ゼミとの合同流域調査において河川流域という「同一の環境的特性を共有した地域」を調査対象として研究を行い²、〈千年村〉候補地³プロットの落ちていない集落を含めた広域に渡る〈千年村〉比較研究の可能性を見出した。調査を通して、上流から下流にかけての建築の外観(降雪関係)・用水の確保(本流との接続)・生業の在り方(マタギ)などの変遷が確認でき、その連続性が確認できた。

一方で、それらは大きなスケールでの環境変化に対応するものであり、河川環境の細やかな変化(河道環境など)と集落の関係にまで踏み込んだ分析は行われていない。そのため、流域内に存在する〈千年村〉候補地と他集落の比較段階には至っておらず、この手法にはさらなる改良が求められている。

そこで、本年度は林業という直接河川環境から影響を受け流域スケールで産業が展開される生業の視点から、流域内集落の分析及び比較を行うことで、より詳細な流域内環境の変化と集落の関係の在り方について明らかにし、この手法をさらに深化させることを目的としている。

¹ 「〈千年村〉とは、千年の単位を基準として、長期にわたって社会集団の生存を維持しえた場所である。なお社会集団は単一で連綿と継続している状態のみならず、各時代に異なる集団が生存していた場合でも、生存可能な条件は地域として維持されているとみなす。(中谷/庄子/鈴木、2022、p221)」

² 早稲田大学理工学術院創造理工学部建築学科建築史系中谷礼仁研究室千年村研究ゼミ「2021 年度千年村研究ゼミ阿仁川流域調査報告書」(同、2022)・早稲田大学理工学術院創造理工学部建築学科建築史系中谷礼仁研究室「2021 年度高地・流域研究四国山地那賀川流域調査報告書」(同、2022)・「2022 年度高地・流域研究中国山地高梁川・日野川流域調査報告書」(同、2022)

³ 「千年の単位を基準として、長期にわたって社会集団の生存を維持しえた地域を〈千年村〉、〈千年村〉である可能性を持つ地域を〈千年村〉候補地と呼ぶ。両者は〈千年村〉候補地のさらなる実地研究によって〈千年村〉を導き出するという作業仮説でつながっている。(中谷/庄子/鈴木、2022、p221)」

2023 年度千年村研究ゼミ那賀川疾走調査報告書

第 1 章 調査概要

調査実施日	報告書発行日	報告書の題名	調査の目的	参加人数 (学生)	参加者 (先生)	その他の情報
1)2021年6月2-6日 2)2020年9月23-25日	2022年11月	2022年度高地・流域研究 中国地方調査報告書(高地ゼミ・千年村ゼミ)	1) 流域を通じた高地と低地の比較から高地地域における居住の在り方を明らかにする 2) 中国山地を横断するつながりから集落を捉えてみる	1)13 2)4	1)中谷 2)中谷・菊池・前川・酒井	
1)2021年10月16-17日 2)2020年12月10-12日	2022年4月	2021年度高地・流域研究 那賀川調査報告書(高地ゼミ・千年村ゼミ)	1) 日本における標高が高い集落の見学 2) 河川との関係性から集落調査を行い、従来の大字よりも大きなスケールで集落を捉えてみる	1)1 2)4	1)菊池、恵谷、前川 2)菊池	
1)2021年9月1-4日 2)2020年11月6-9日	2022年4月21日	2021年度千年村研究ゼミ 阿仁川調査報告書	1) 東北において長期持続集落は存在するのか確認 2) 河川との関係性から集落調査を行い、従来の大字よりも大きなスケールで集落を捉えてみる	1)? 2)5	1)中谷	
1)2020年8月7-8日 2)2020年11月1-2日	2020年1月28日	2020年度千年村研究ゼミ 近江湖北地方荘園調査報告書	1)古代中世村々の開発過程で選ばれた地形の特徴・バリエーションを明らかにすること。中世荘園比定地の立地条件とそれに対する現在の集落構造を明らかにすること。 2)集落景観の形態的な分析。大字・居住域レベルでの土地利用の状況・用水の流路や利用実態。景観・構造と集落の立地条件の関係。	1)3 2)6	1,2)中谷	
2019年12月22-23日	2019年12月	千年村プロジェクト 2019年度 伊豆半島周辺疾走調査報告書	より多くの千年村候補地を網羅的に調査する必要があるから、伊豆半島疾走調査もその一つに位置づけられる	?	中谷、木下、福島、石川、土屋、林、元永、高橋、松木、辻	
2018年11月8日-14日	2019年4月23日	千年村プロジェクト 2018年度 中国雲南少数民族村落調査報告書	(1) 雲南省の稲作由来以前から持続する集落の実見及び持続要因の把握。特に集落同士の関係性を見る。(2) 雲南大学との共同研究における調査手法の開発・準備	19	王、李、撒、王、林、中谷、木下、松田、菊池	
2018年10月6-7日	2019年4月一日	千年村プロジェクト 2018年度 鬼怒川及び渡良瀬川周辺疾走調査報告書	(1) 環境的特徴の把握 (2) 地域経営の特徴の把握 (3) 交通的特徴の把握 (4) 集落構造の特徴の把握 (5) その他の特徴の把握 (6) 千年村候補地のタイプ抽出、命名 (7) 低地における千年村候補地の水リスク回避の要因 (8) 治水工事などの道路変更に依存しない戦略的土地利用と持続要因の把握	?	中谷、木下、福島、佐々木、石川、土屋、林、本永、高橋、松木、辻	
2017年8月31日-9月2日	2018年3月31日	千年村プロジェクト 2017年度 大阪南部疾走調査報告書	日本において最も早くから村の出現が確認され、その持続を確認できる関西において、生活環境の形成、持続、実存のメカニズムを理解する。	21	菊池、石川、木下、中谷	
1)2016年7月16-17日(霞ヶ浦周辺) 2)2017年5月27-28日(筑波山周辺)	2018年3月31日	千年村プロジェクト 2016-2017年度 霞ヶ浦・筑波山周辺地域疾走調査報告書	1) これまでの調査で未確認であった、湖湖化や干拓等の人為的な変化を経ている(千年村)候補地を調査。環境・地域経営・交通・集落構造に加えて、それ以外の視点も獲得する。特に、湖畔や臨海部の(千年村)候補地の特異な密集形態の要因を考察するとともに、それら集落の構造の変化を把握し持続要因を考察する。 2) これまでの調査で未確認であった、山の湧水を利用した産業や、石材産業など山に関連した産業が行われた(千年村)候補地を調査。環境・地域経営・交通・集落構造に加えて、それ以外の視点も獲得する。特に、山沿いの(千年村)候補地の特異な密集形態の要因を考察するとともに、河川・湖畔沿いの(千年村)候補地とは異なる持続要因を考察する。	1)26 2)30	1)石川、霜田、高橋真治、高橋大樹、土屋、中谷、福島、元永、Noemi Basso 2)石川、菊池、木下、高橋真治、高橋大樹、土屋、中谷、福島、元永	
2016年7月18-20日	2017年2月	千年村プロジェクト 利根川流域千年村 茨城県行方市麻生詳細調査報告書	(千年村)候補地である古代郷を1つ取り上げ、環境・集落構造・共同体・交通の4つの観点から評価する。 2014年8月2-6日に49郷を対象として実施した疾走調査を踏まえて詳細調査地を決定。さらに2016年の千年村プロジェクトでは利根川流域の(千年村)の全体像を把握するために"山"と"海"の(千年村)候補地でそれぞれ詳細調査を行うという方針が示された。本調査は"海"の(千年村)から代表1郷を選定して実施。	6	中谷、福島	調査対象郷を決めるにあたって、2016年5月28日に「表」にまつわる(千年村)候補地詳細調査活動した(調査報告書は存在しない)。
2014年12月11-13日	2016年6月26日	千年村プロジェクト 利根川流域千年村 群馬県高崎市吉井町神保地区 詳細調査報告書	(千年村)候補地である古代郷を1つ取り上げ、環境・集落構造・共同体の3つの観点から評価する。 2014年8月2-6日に49郷を対象として実施した疾走調査を踏まえて詳細調査地を決定。	14	木下、石川、元永、高橋	
2015年5月30-31日	2015年9月	千年村プロジェクト2015年度相模川流域周辺疾走調査報告書	今まで調査が行われていなかった相模川下流部の千年村プロット密度が高い地域において、千年村を環境・集落構造・共同体の3つの観点から評価する。また、この地には交通の充実によって市街地化している千年村が確認でき、かつての土地に根付いた生産システムから転換し、新たなシステムを獲得していないか確認する。	?	中谷礼仁・木下剛・福島加津也・佐々木葉・石川初・元永二郎・高橋大樹	科研費「国土基盤としての千年村の研究」としての活動報告書は2013年伊豆大島調査のフェルダ内。
2014年8月2-6日	2015年2月	持続的環境・建造物群継承地区(千年村)運動 体2014年度利根川流域疾走調査報告書	利根川流域の千年村の調査を通して①関東地方の千年村の特徴を明らかにし、②そこで得た成果を整理し、さらなる詳細調査への展開に寄与するようにする。 流域単位で調査を行う目的は、近しい環境・文化的背景を持つ千年村同士は比較しやすいため。	?	中谷礼仁・木下剛・福島加津也・石川初・土居浩・元永二郎・高橋大樹	科研費「国土基盤としての千年村の研究」としての活動報告書は2013年伊豆大島調査のフェルダ内。
2013年11月22-24日	2013年12月21日	持続的環境・建造物群継承地区千年村研究ゼミ 2013年10月16日未明土石流災害に伴う伊豆大島元町地区緊急調査報告書	2013年10月16日に伊豆大島を通過した台風26号は山岳部から土石流を引き起こし、大島元町地区南部に大きな被害をもたらした。本調査はその中でも元町地区南部大島沢川に調査対象を絞り、「災害・環境・家屋配置の関係性の分析」・「ヒアリングによる被災状況の確認」・「それらをふまえた災害復旧の提言」を行うことを目的としている。	?	中谷礼仁・木下剛・菊池暁	千年村運動体伊豆大島元町地区緊急調査として活動報告書は2013年伊豆大島調査のフェルダ内。
第一回：2012年5-7月 第二回：2012年11月17-18日	2012-2013年の間	持続的環境・建造物群継承地区(千年村)研究ゼミ2012年度千葉県市原市島野詳細調査報告書	第一回：千葉全体の千年村を3つの帯域に分け、悉皆調査を実施し、千葉県千年村の立地傾向を把握 第二回：前回調査を踏まえた上で、調査対象を市原市島野七つ町・金川原地区に絞り、集落構造の分析及び集落図面の作成	12	中谷礼仁(早稲田) 木下剛(千葉大) 大高隆(フリーカメラマン)	日本大学学会「文化財の確実な継承と地域活性化活用のための防災復興の作成と普及」による発託研究

図 1-1 これまでの中谷礼仁研究室千年村研究ゼミ報告書一覧

1-2. 調査手法

流域スケールでの産業構造を有していた林業を対象に、日本各地の河川流域内におけるその産業空間構造を書き出すと図 1-2 のようになる。これを基に流域内の各集落の立ち位置を大まかに把握し、文献・実地調査を通して「三者間のつながり方・林業以外の生業・各集落の生存環境」についてより詳細に読み解くことで、河川流域内の各集落の立ち位置をつながりの中から明らかにし、〈千年村〉候補地と他集落の比較につなげていく。

今回の調査では特に中流域を対象に、生存環境・生業・交通などの項目を立てて分析を行う。上流・下流地域については第 1・2 回調査による獲得資料・文献資料から読み取り、三者を比較することで分析を行った。

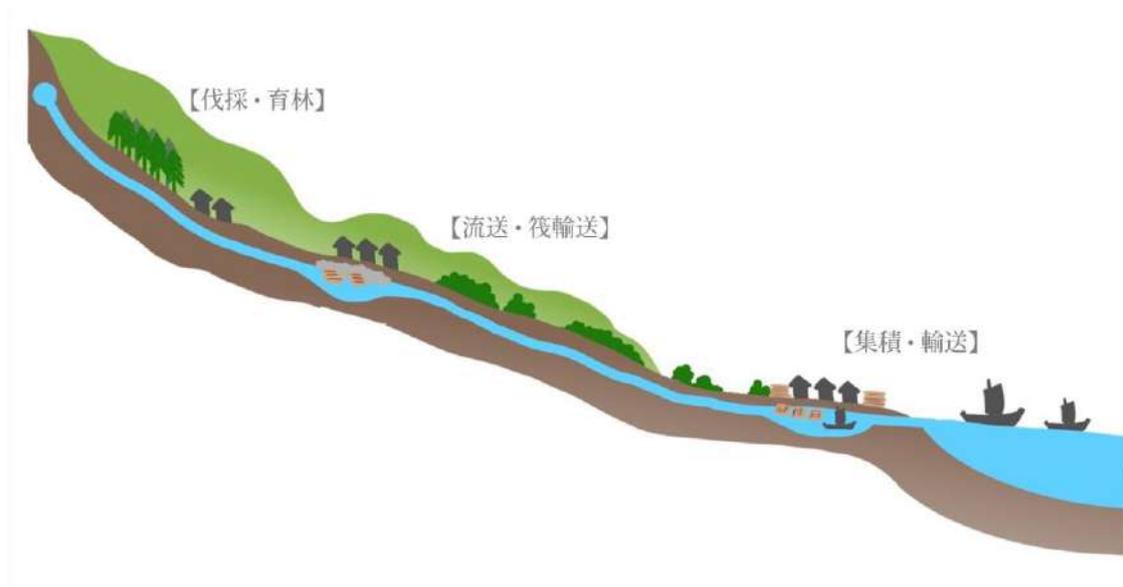


図 1-2 流域スケールで展開される林業地帯

1-3. 調査対象の選定

調査対象地としては那賀川流域を対象とする。選定理由としては以下の点が挙げられる。

- ・ 那賀川はかつて上流の林産地における木材生産と中流の流筏を、巨大資本の基にその配下につけた下流製材業者によって、流域スケールでの林産業構造が構築され、典型的な地主型林業地帯の形をとっていた（半田、1972）。そのため、林業地帯が持つ生業によるつながりを活用した、集落間の比較手法の開発を試みる本調査において最適な研究対象である。
- ・ 流域全体を通して数多くの遺跡群（縄文時代-）や複数の延喜式に記載された式内社が確認できる。そのため、千年村研究を行うのに適しているだけでなく、〈千年村〉候補地と他集落の比較するのにも適している。
- ・ 千年村研究ゼミでは過去に2度那賀川流域を対象とした調査が行われており（図 1-3）、調査を行う上でそれら調査によってまとめられた資料や獲得資料を活用することができる。
- ・ また、その中でも中流域を選定した理由として以下の点が挙げられる。
- ・ 那賀川流域における林業研究は下流と上流を対象としたものが多く見られる。そのため、中流域における林産業について調査することで、流域全体の林産業の分析につなげることができる。
- ・ 中流域の町誌（上那賀町誌、相生町誌）には、各大字の由緒から生業、信仰などに関する情報を記載した項目が存在し、大字スケールでの集落研究を行ってきた千年村研究の手法を活用しやすい。
- ・ 鷲敷（〈千年村〉候補地、那賀川中流域）から宇奈為神社（式内社、図 3 左下）までの範囲は、上・中流地域における〈千年村〉候補地の広がりを見るのに適している。



図 1-3 第 1-3 回那賀川調査軌跡統合図

1-4. 調査地域の概要

以下調査地域の概要に関する記述は(塚原、2024) の第三章3-1からの引用となっている。

(地形・地質)

那賀川は徳島県南部に位置し、四国山地剣山山系ジロウギユウ（標高 1930m）を水源とする幹川流路延長 125km、流域面積 874km の一級河川。流域内土地利用の約 92%が山地によって占められ、急峻な壮年期の山地を基盤とした河川は中・上流域で穿入蛇行を発達させながら流下している。河床勾配は全国の主要河川の中でも急であり、上流で雨が降れば短い時間で下流まで流れ出すため、堤防やダムが整備されるまで下流域では洪水と濁水に悩まされていた。

流域内の地質は、フィリピン海プレートの沈み込みによって形成された付加体の「秩父帯」と「四万十帯」で構成され、河川の流れに沿い・交錯しながら両者を分ける断層「仏像構造線」が存在する（図 1-4-2 のオレンジ線）。それぞれの付加体は全く異なった性質を持っており、秩父帯が主に古生代及び中生代の砂岩、粘板岩、チャート等が分布しているのに対して、四万十帯は中生代白亜紀の砂岩及び泥岩が分布している。（国土交通省河川局、2006）

固い岩石からなる秩父帯上の地域では、全体を通して急峻で平地がほとんど見られず、斜面に石垣を積んで造成した土地や川沿いの細長い河岸段丘上、地すべり跡の比較的平坦な土地に集落が見られる。一方で、四万十帯上の地域では河岸段丘に加え流域内でも特に穿入蛇行が発達しており、大きく湾曲した曲流付根部における浸食が新たな直線状流路を形成することで、かつての曲流部が平地として取り残される「還流丘陵」が延野・大久保・横石・蔭谷で見られる。これらの旧河道を前身に持つ平地と河岸段丘上では、比較的大きな水田集落が展開され、下流平野部と共に現在の流域内人口の多くを抱えている。



図 1-4-1 那賀川流域の集落

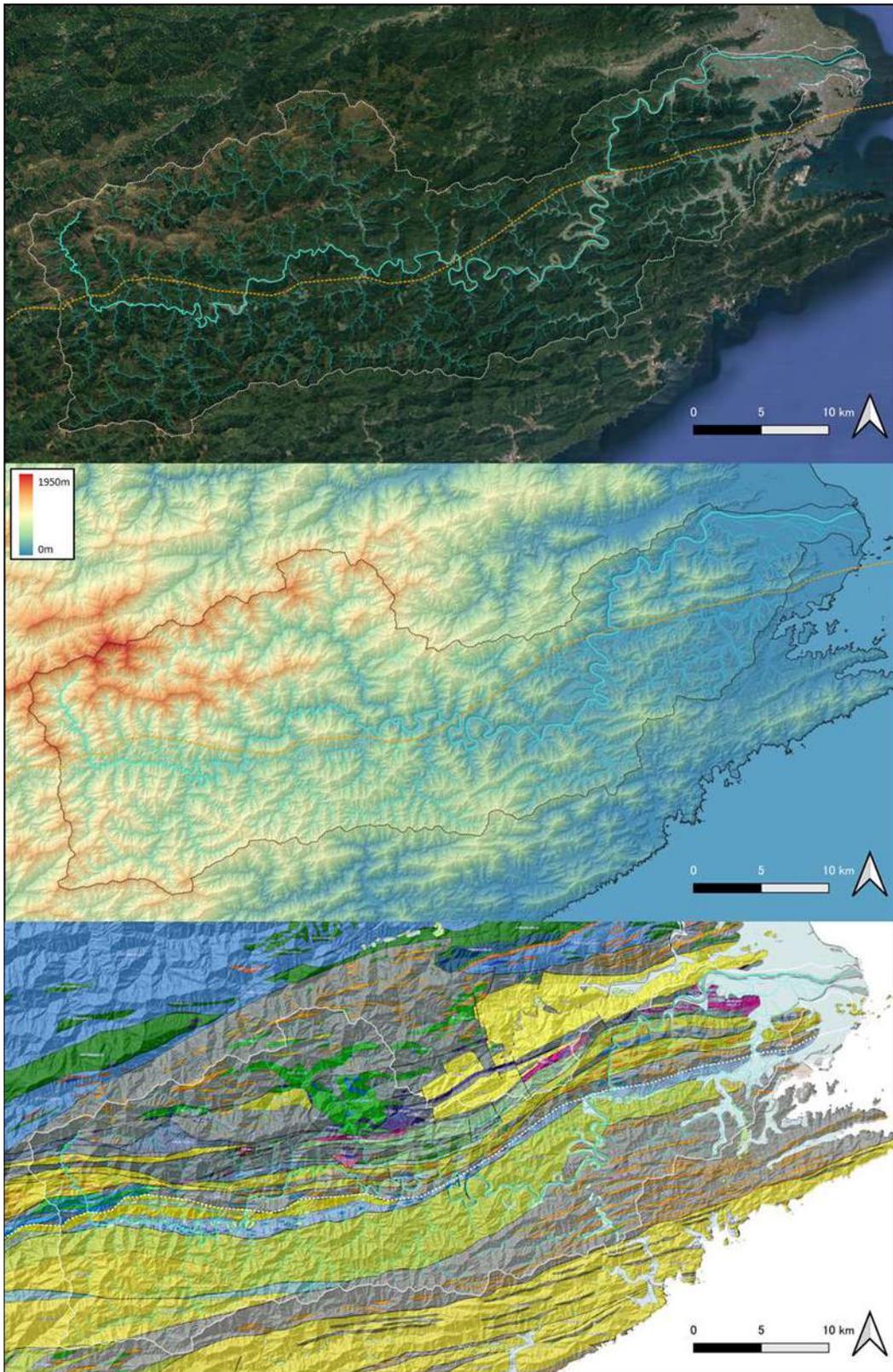


図 1-4-2 那賀川流域の範囲・地形・地質

(気候)

徳島県南部に位置する那賀川流域は（関口、1959）の気候区分において、南海型気候に分類される温暖多雨な地域。特に上流部の年平均降水量は 3391.3mm（図 1-4-4 参照）という全国屈指の多雨地域であり、那賀町海川は日最大降水量の日本記録を持つ。このような気象が生じる要因としては、当地域が台風の進路上に位置していることと、剣山との立地関係を挙げることができる。当地域は剣山南東斜面に位置しており、台風接近時それが生み出す反時計回りの風を、山体が正面から受け止め強制的に上昇気流に変え、多量の雨を降らせるのである（十津川村史編さん委員会、2021）（湯城、2015）。

また平均年間日照時間に関して、全国的に見て上流部（代表点：木頭）では平均的な 1972.7h、下流部（代表点：蒲生田）ではかなり長い 2247.7h となっている。両者差の日照時間において、差が出るのは台風シーズン（7-10 月）であり、上述した上流部における気候的特徴が影響している。平均年間気温に関しては、上流部（代表点：木頭）で 13.6℃、下流部（代表点：蒲生田）で 16.7℃となっており、このような約 3℃の差は標高差によって生じている。

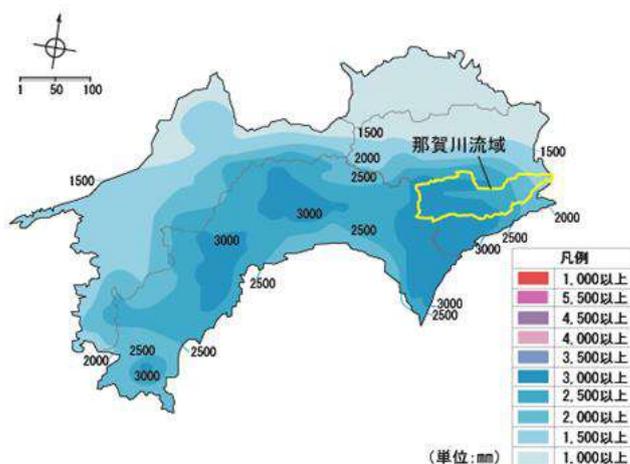


図 1-4-3 四国の年間降雨量分布

	降水量(mm)	平均気温(°C)	日照時間(h)
統計期間	1991~2020	1991~2020	1991~2020
資料年数	30	30	30
1月	77	2.6	171.8
2月	108.2	3.9	165
3月	176.2	7.4	188.8
4月	204.9	12.5	196.1
5月	277.4	16.9	194.6
6月	398.7	20.3	128.3
7月	479.6	24	147.2
8月	546.8	24.5	171.9
9月	611.2	21.1	130.4
10月	283.5	15.6	156.8
11月	131.4	9.8	157.5
12月	96.4	4.5	164.3
年平均	3391.3	13.6	1972.7

図 1-4-4 木頭の気候データ



図 1-4-5 木頭の気候データ（年ごと）

1-5. 調査工程の記録

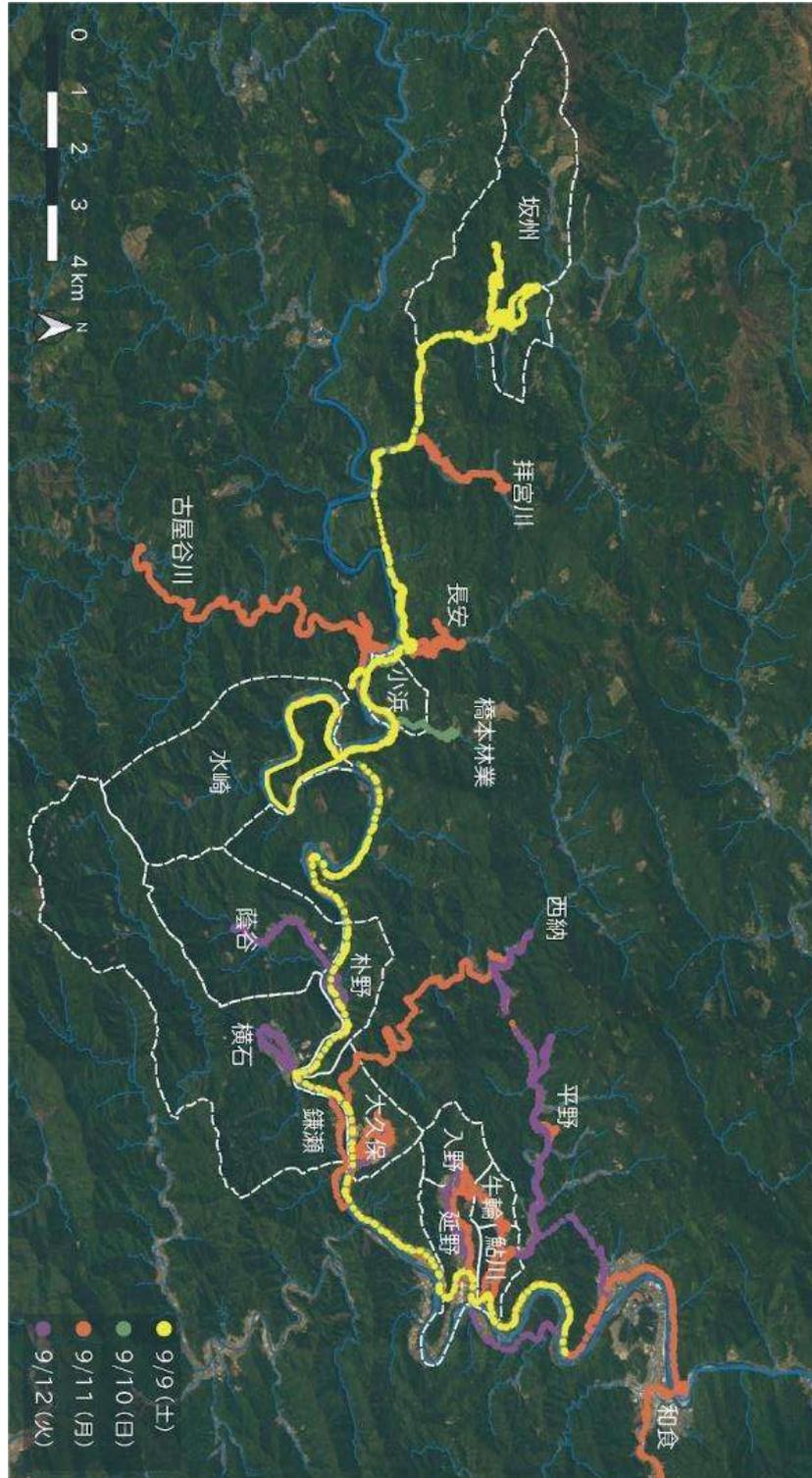


図 1-4-6 調査日程と調査行路

第 2 章 各調査集落概要

2-1. はじめに

本章では既往研究などの史資料を基に、調査対象集落である「坂州・小浜・水崎・蔭谷・朴野・横石・鎌瀬・大久保・延野・入野・牛輪・鮎川」の10集落における集落構造の在り方について確認を行っていく。調査項目は「集落概要・水利・寺社信仰・生業・商工業」の5項目とする。特記がない限り、これら情報は(上那賀町、1982)からの引用となっている。



図 2-1-1 各村大字配置図

2-2. 坂州

・集落概要

室町期から見える地名。阿波国那西郡のうち。応永 3 年 3 月 5 日の惣境定書に「さか志うよりそうさかいの事」とあり、境界については不明(湯浅文書/徴古雑抄 3)。那賀川支流坂州木頭(さかしゆうぎとう)川下流山間の平地部に位置し、右岸の大用地・追立・広瀬・寒谷(さぶだに)・高山平、左岸の向江・日の出などの集落から成る。地名については、周辺の村々から当地に来るには坂を下らなければならない、坂の集まる所すなわち坂集が坂州になったとする説もある(木沢村誌)。また当地で川が逆巻き、州ができたことから坂州になったとする説もある。(角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986)

・水利

水田は山の比較的緩い斜面に、不整形に細長く棚田として形成され、用水は谷水を利用していった。飲料水施設は戦後まで原始的な姿のままだった。水源が至る所に存在し、簡単な竹どいや地表に粘土で固めた用水路を備えることで、清冽な水がふんだんに利用できたからである。

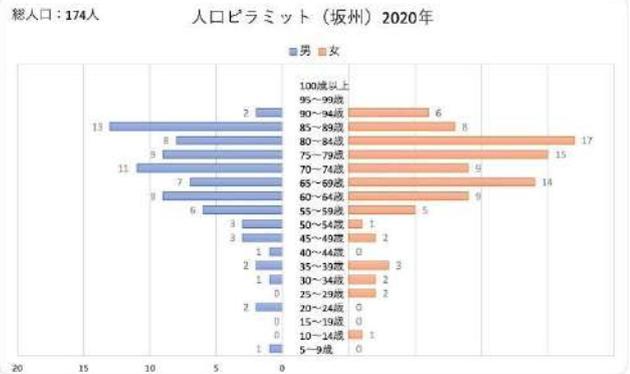


図 2-2-1 坂州の人口ピラミッド



図 2-2-2 坂州集落における農業集落境界線



図 2-2-3 坂州集落 (1907 年)



図 2-2-4 坂州集落の地質

・ 寺社・信仰

・ 坂州八幡神社

建立年：弘化元年(1845)着工、同 3 年完成

祭神：菅田別名、足仲彦命、気足長姫命

境内に農村舞台が立地する。

河川に沿う旧道に面する形で鳥居が配置している。

・ 地藏庵

本尊：地藏尊立像

脇立：座像大師、立像静観音

湯浅建造の説によると、地藏尊仏堂は、元高山岡田甚平宅の西側にあったものを移設したという。移設の理由は、北向きのため寒いのと日照関係であると思われる。

・ 生業・商工業

山間の住民の購買力が乏しかった古い時代には、生活必需品といえども商家としてその営業が成り立たなかったのが、自然行商人に依存していたのではないか。

文政 10 年に湯浅岩蔵が開業した酒屋は 5 代続き、95 年間続いた。

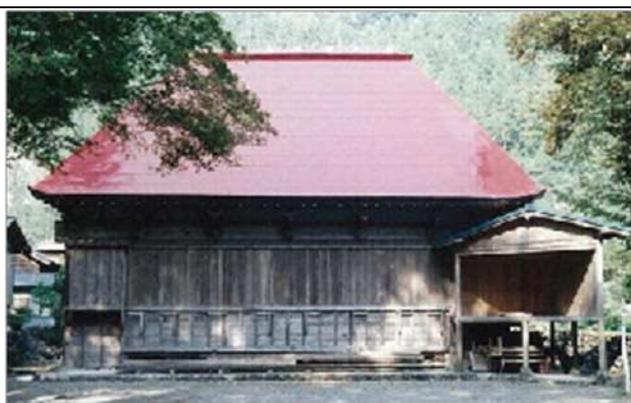


図 2-2-5 坂州農村舞台



図 2-2-6 坂州木頭川の蛇行部



図 2-2-7 現在の坂州に立地する住宅群



図 2-2-8 坂州集落主要部



図 2-2-9 坂州集落主要部



図 2-2-10 坂州集落主要部

2-3. 小浜

・集落概要

室町期から見える地名。阿波国那西郡のうち。文明 8 年 6 月 15 日の仁宇郷公事銭注文に「小浜一貫三百七十文」とある(蛭子神社文書/徴古雑抄 3)。仁宇郷是那賀山荘に所属していたと思われる。那賀川上流の河岸段丘上に位置し、地名の「ハマ」は河岸や崖地の意で、那賀川沿岸山間部の狭い河岸段丘の地形にちなむものと思われる。また寛政 10 年の旧家御調指出張控(元木家文書)によると、肝煎役元木周右衛門の 22 代前の先祖藤原助光が当村を開いたといい、「阿波志」にも同様の記事がある。(角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986)

・水利

従来はすべて各谷川の水を竹樋で導水したり、井戸を掘り地下水を利用していた。その後、簡易水道が小浜下所(1935)、小浜奥所(1937)に設けられ、前者に関してはダム建設(1955)による人口増加と上那賀病院の改築による水需要の増加(1966)によって二度に渡って水道設備が改修された。(上那賀町, 1982)

・寺社・信仰

〈聖神社〉

建立年：不明。最も古い棟札は 1659 年

祭神：大年命(元は聖牛王と称す)

小宮：八幡神社・蛇王神社・若宮神社(2)

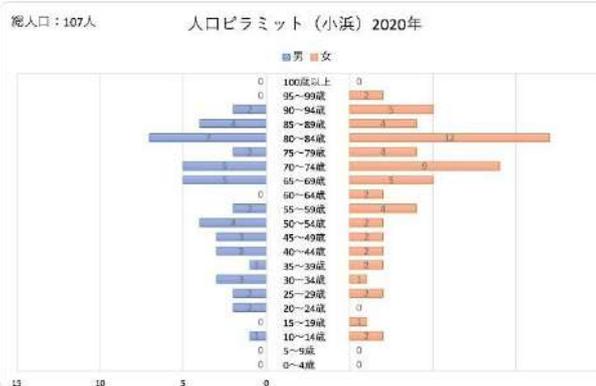


図 2-3-1 小浜の人口ピラミッド



図 2-3-2 小浜集落における農業集落境界線



図 2-3-3 小浜集落(1907年)



図 2-3-4 小浜集落の地質

〈医王山妙楽寺〉

建立年：不明。1775 年の石塔が存在。

本尊：薬師如来（+地蔵菩薩・聖観音・不動明王・弘法大師像）

（上那賀町, 1982）

・生業・商工業

小浜は長安ロダムの1km下流に位置し、かつては土場（筏を組む場所）やダム建設の拠点としてにぎわっていた。1941年に組織された那賀川木材運送を担う運材報国団に所属する、小浜支部は組合員数が7支部の内最大の225人であった。

商店(町誌に記載されたもの)

衣料品(4)・パチンコ(3)・旅館/飲食店(8)・理容店(4)・美容院・時計屋・自転車店・鍛冶屋(2)・パン屋・日用雑貨(2)・豆腐屋・風俗店(3)

（上那賀町, 1982）

・自然環境と集落

かつての居住域は一枚目の画像左側と渡し舟が立地していた二枚目の画像の場所に存在。現在、郵便局や病院が立地している場所は棚田であった。建築は等高線に沿った横に細長い形・配置となっており、かつて筏師達が宿泊していたという旅館きぐ屋・つる屋もそのような形態をとっている。



図 2-3-5 かつて筏師が宿泊していた木具屋（宿屋）



図 2-3-6 谷口土場における筏師



図 2-3-7 小浜集落主要部



図 2-3-8 小浜集落渡し場付近

2-4. 水崎

・集落概要

阿波国・徳島県の郡名。古くは長郡とも書き、郡名は古代の長国(ながのくに)の中心地であったことにちなむものと思われる。県南西部、海部山地北方の山間部の那賀川流域に位置し、東は紀伊水道に面する。

(中略)「和名抄」には当郡所属の郷として、山代・大野・島根・和泉・坂野・幡羅・和射・海部の 8 郷を記載する。このうち、山代・坂野・原(幡羅)・和射の地名については前記の平城宮跡出土の木簡銘にも見える。

那賀川上流湾曲部の山間に位置し、6 つの小集落かが那賀川兩岸の山麓に点在する。地名の「サキ」は突出部を意味し、那賀川の最も著しい蛇行部に位置し、山地が突出している地形から生じたものと考えられる。なお筏流しの難所で知られ、不動明王や金比羅権現を祀り水路の安全を願った。入江伊賀守の子孫の一族が当地を開発したといい(入江家文書)、「阿波志」にもほぼ同様の記事がある。(角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986)

水利

飲料水の確保に昔より苦勞した。終戦後しばらくの間は、湧水を桶で導水したり井戸水に頼っていたが、渇水期にはその水も枯れ、近くの水源地(現在も 3 ヶ所の溜池が残る)からバケツで飲料水を運搬した。風呂水用の積雪やバケツの飲料水用の運搬は子供たちの役目だった。

寺社・信仰

髪神子神社

奥の院的な存在として知られる。

祭神:山神社・山王大神・髪神子神社

祭り:毎年 4 月 7 日に開催。家内安全・五穀豊穡・山仕事の安全を祈願

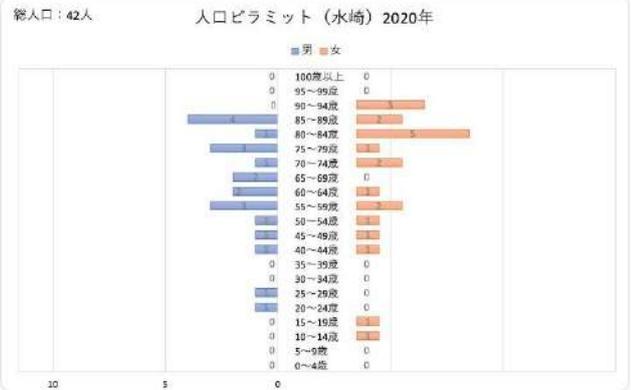


図 2-4-1 水崎の人口ピラミッド



図 2-4-2 水崎集落における農業集落境界線

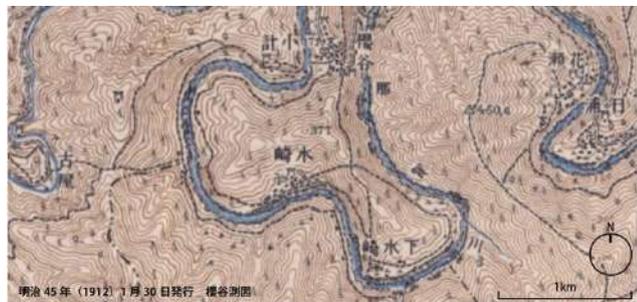


図 2-4-3 水崎集落 (1907 年)



図 2-4-4 水崎集落の地質

新四国八十八ヶ所水崎廻り…

昭和 5 年、高木勘五郎・光永武利の両氏が「病弱な人でも手軽に八十八ヶ所を巡拝できるように」と、1ヶ月を費やして四国八十八ヶ寺を巡拝し、砂を持ち帰り、各寺院の本尊を刻んだ石仏を立てた。

生業・商工業

部落の入り口にある旧桜谷トンネルの工期・工事費等については不明だが、大正 3 年に開通以来この地域

(桜谷・水原崎)の発展に大きく貢献してきた。桜谷発電所関係者や、当時華やかだった木材関係者等々の会合や宴会、更には旅人の宿として多くの人々が集まり、芸者姿や三味の音が絶えることなく、活気に満ちた頃もあった。

・自然環境と集落

大字内の主な居住域は局所的に二ヶ所、那賀川沿いに存在。さらにシームレス地質図より居住域の立地傾向として、全体的に付加体砂岩泥岩互層の地質が多い中、堆積岩段丘堆積物性の地質を背後に持った平坦部に集中していることがわかる。基本的に斜面地に対して石垣を積み、山を背にして一列に居を構える。

「阿波志」によると、水崎原・下水崎・婦留多・西端・中村・逆巻の 6 つの里があり、那賀川両岸に集落が点在していた。そのため、その往来は吊舟が架設された大正年間頃まですべて渡舟に頼っていた。

集落の特徴

- ・高木林業(有)・泉林産など現在も林業を営んでいる会社が複数存在する。
- ・地理院地図の農地マップより、水崎大字内の南部の山間に一部荒地があることがわかる。
- ・現在は集落内に神社の存在は確認できない。大字南部の山間部と髪神子神社と居住域の配置関係について。

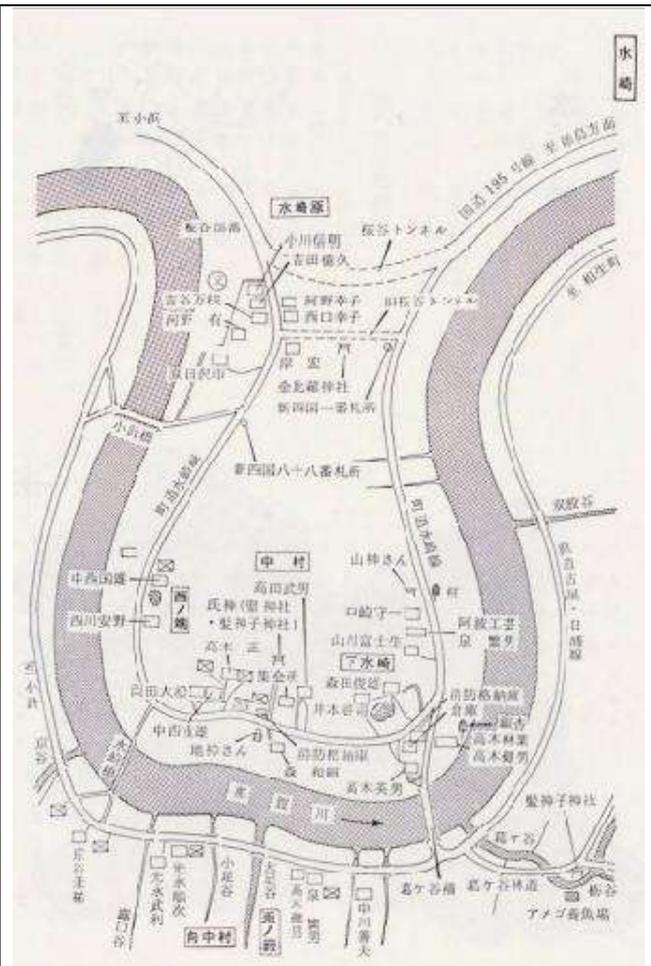


図 2-4-5 1982 年時点での水崎集落



図 2-4-6 新四国八十八ヶ所水崎廻り石仏パンフレット



図 2-4-7 水崎集落主要部



図 2-4-8 水崎集落主要部詳細

2-5. 蔭谷

・集落概要

江戸末期～明治 22 年の村名。
 「旧高旧領」で村名が見え、村高 45 石余ですべて蔵入地。また「阿波志」では高 46 石、戸数 25・人数 116、耕作地は水陸田 5 町 8 反余とある。土佐田・戸屋敷谷・本在所の 3 集落からなるが、同書は里名として土佐田・第・蔭谷口を記す。天正年間土佐からの移住者によって開発されたという。氏神は杉尾神社。古くは杉尾大明神と称し、元龜 3 年・天正 2 年などの棟札を有す。同社のほかに山神社・天地神社・八幡神社・金毘羅神社がある。各社の祭礼には直会が行われ、今も伝わる。また西光庵がある。本尊は鎌倉期の作の阿弥陀如来像、「文明十一年卯月吉日 阿州那賀山深瀬河原宮」の銘をもつ鰐口を有す。なお明治初年に和歌山県田川からの来住者が瓦を焼き、その跡が残る。(角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986)

・水利

【飲料水】

部落の各所に清涼な湧水があり、谷水も豊富であって古来水に不自由したことを聞かない。戦後昭和三十年頃から簡易水道を敷く。

【田畑】

高さ 6m に及ぶ石垣でいたる所に水田を築いた。畑は野菜や植林用苗木の育成が行われ、又自家用果樹が点々とみられる。最近(1973 年当時)では花木の栽培に転換したところも見受けられるようになった。

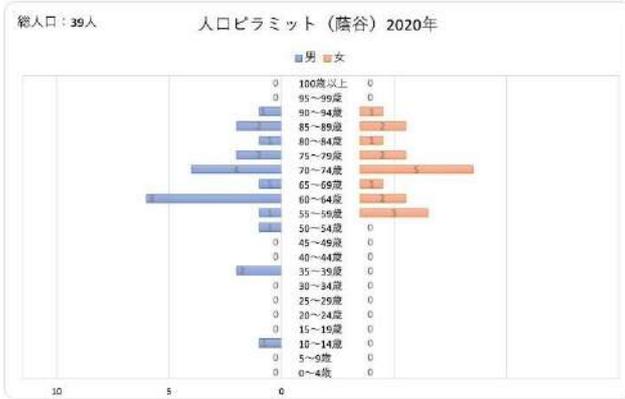


図 2-5-1 蔭谷の人口ピラミッド



2-5-2 蔭谷集落における農業集落境界線



図 2-5-3 蔭谷集落の明治 40 年における測図

・寺社・信仰

杉尾神社

建立年：天正 2 年(1574 年)再建の棟札

祭神：大己貴命

旧社格：旧村社

祭日：旧六月十五日御祭まつり

稚児ノ宮 (境内社)

伝説によると、蔭谷本流をさかのぼること約六kmの地点に奉齋してある「お鶴大明神」の乳児だという。杉尾神社の境内社である。

・生業・商工業

当部落の主な生業は食糧生産でなく林業であり、杉・桧の生産を行っていた。那賀川に面する北部には材木置き場が見られる。

・交通

かつては那賀川対岸の朴野（ほおの）などへは、無料渡船を利用していた。この渡船の渡守は、雇賃のかわりに、渡小屋の提供を受け、同小屋での菓子・酒・魚などの商売がまかされていた。昭和 17 年から翌 18 年に工費 5 万円をかけて鉄線釣橋の木橋を完成。同 38 年に永久橋の架設に着手、翌 39 年幅員 4 m の鉄筋コンクリート製の橋が完成。この蔭谷橋の完成に伴い、集落内の道路も改良され、対岸の国道 195 号と車での通行が可能となった。

・自然環境と集落

蔭谷部落の主な世帯は杉尾神社周辺の三つの尾根に囲まれる場所に位置する。一方蔭谷橋付近に住む世帯は、これらの世帯からやや離れた場所に位置しており、距離的には朴野に近い。蔭谷橋の完成前後で、彼らの関わる集団が変化したのかという点は興味深い。



図 2-5-4 蔭谷周辺の地質図



図 2-5-5 蔭谷北部詳細航空写真



図 2-5-6 蔭谷南部詳細航空写真

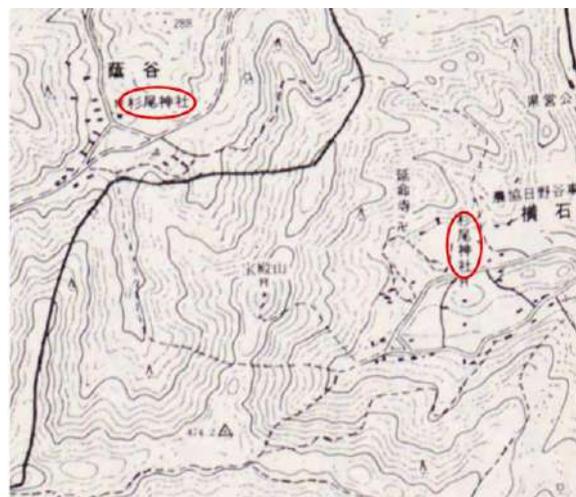


図 2-5-7 蔭谷と横石をつなぐ道

2-6. 朴野

下記の情報は、特記のない限り、相生町誌編纂委員会『相生町誌』（相生町,1973）P603~636 をもとにまとめ、野帳に載せた情報によるものである。

・集落概要

江戸期～明治 22 年まで朴野村と、明治 22 年からは朴野と呼ばれる地名。鮎川村の枝村で江戸期の天保郷帳などでは、鮎川村に高（農産物の収穫量）などが含まれ記載されている。明治期の「旧高旧領」では、別で記載され、村高 104 石余りですべて蔵入地（おそらく徳島藩直轄地）氏神は龍王神社、天の竜王社とも称される。ほかに山神社・祇園神社などがあった。なお氏神などの祭礼は、奉灯句という催しがいまもつづく。（角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986）

・水利

（飲み水）

上朴野は古くから飲料水に乏しかったが昭和 27 年に川浦の屋形石の谷を水源とし、給水施設を感性、長年の不便を解消した。中朴野はほとんど東谷を水源とした。下原一帯は、昭和 40 年に西納野・下原簡易水道施工により、長年にわたる不便を解消した。

（大用水）「朴野用水路」

相名口から朴野字大西に至る全長三里十八丁。年代は判然としないものの寛文年間(1661～)に起工したとされる。請の谷を流れる紅葉川を水源とする。

寺社・信仰

*旧道と神社の関係：ない

旧道は現在の国道より北側を通っており、後述のように慶光庵沿いを通っていた。

竜王神社

建立年：不明

祭神：豊玉彦命、豊玉姫命

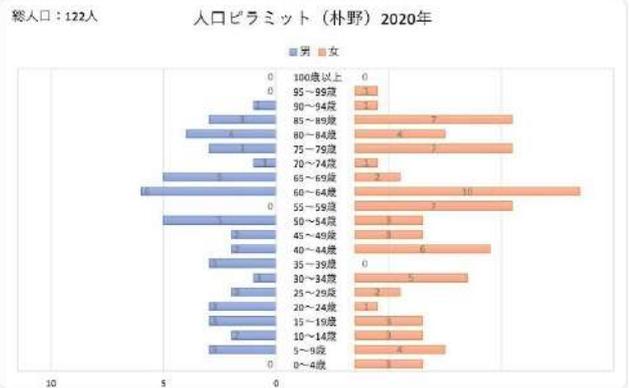


図 2-6-1 朴野の人口ピラミット



図 2-6-2 朴野全域航空写真



図 2-6-3 朴野周辺の明治 40 年における測図



図 2-6-4 朴野周辺の地質図

藤本家が神官の系譜で代々その職を継ぐ。東曾根にお神酒田というものがあつた。この田での小作人の上納米三斗二升で氏子当屋が酒して、秋祭り祭典用に供していた。

慶光庵

建立年：不明

本尊：地蔵菩薩、観世音菩薩（いずれも平安時代の作とされる）

明治初年には記別村役所が置かれていた。当時は、往還沿いであり村の要所であつた。

・生業・商工業

・1973 年現在、4 人（岩島、西浦、岡崎、西田）が頭数株式制により経営している日野谷酪農組合がある。

・山川製作所が戦後から残っており、ほかにも製材系の生業が発達した。

・1986 年から山菱電機（電源メーカー）の向上が新設

***集落について**

主に 4 つの居住域が示されている。

Halal の東側に集合し、東曾根、慶光庵から東に山を背に家が並ぶ堂の東、龍王神社北側の溝落、国道 195 号が北側に通る大西である。いずれも、基本的に南向きで似たような家屋の配置をしている。



図 2-6-5 朴野主要部（朴野①）



図 2-6-6 朴野東部（朴野②）



図 2-6-7 各詳細図の範囲



図 2-6-8 龍王神社境内の奉灯句
（俳句が描きつけてある行灯が毎年秋祭りに奉納されている。）



図 2-6-9 朴野部落の様子

2-7. 横石

・集落概要

・那賀川の右岸に位置し、北に那賀川、東は鎌瀬・鉢・赤松に、南は日和佐町、西は陰谷、上那賀町に接する。総面積は 1363ha にも及ぶ大字である。

・横石の名前は、高さ 10m 幅 100m ほどの大きな岩があり、縁起が良いことが由来である。

・横石は 300 年前以上に土佐から来たという家系が多い。

杉山と呼ばれる藩の「御林」があり、広さは公称 548 町、実測 1,000 町におよぶ杉の自然林であった。明治初年頃村の共有林にしたいと徳島藩の実力者井上高格と交渉したが、当村のような小村で広大な山林の維持はむつかしいと説諭され、かわりに既設道路の権利を譲渡された。(角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986)

・水利

北側平野部を北浦谷川、南側平野部を大張谷川の 2 本の川が走っており、この 2 本を中心として水利体系となっている。『相生町誌』によればこの大きな用水路の開発は元禄時代と考えられ、部落の灌漑用水は近くの谷水を引水している。昭和 30 年には延長 6km のコンクリート工事が完了した。

かつては扇形蛇行の地質的に深井戸を掘らないと飲み水が得られなかったため、集落の東側では深井戸が掘られ、土砂の沖積の激しい西側は本流まで桶と水瓶を持って水を汲みに出かけていた。

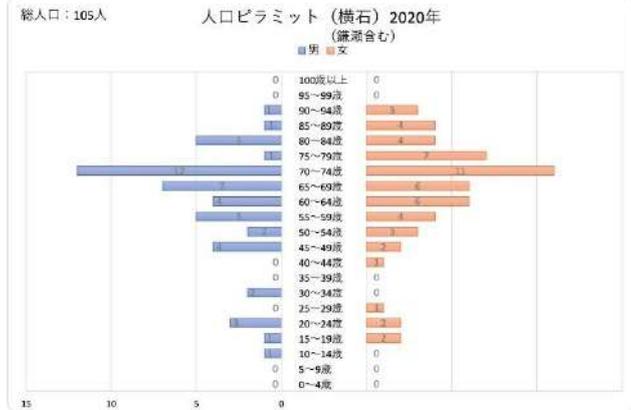


図 2-7-1 横石の人口ピラミッド



図 2-7-2 横石集落周辺図



図 2-7-3 横石における農地品目

・ 寺社・信仰

中央部の丘陵地南麓にある杉尾神社が横石の氏神である。『相生町誌』によれば杉尾神社は元亀三年の棟札があったというが、虫損のため不明で、正確な建立時期は不明である。祭神も不明だが、大己貴命であると伝えられている。社殿は明治 43 年旧九月九日秋季大会の夜、御神燈の提灯の不始末により拝殿もとも燃えてしまったので、何一つ記録は残っていない。再建にあたり、周辺の大小七十二社を一社に併合することが県から要求され、合併された。

・ 生業・商工業

特産物は特にないとされているが、林業を生業とした土地の性格上、戦後まで薪炭業が盛んだった。林業以外では『相生町誌』を確認すると 1973 年時点では茶が 200 俵、米が 375 石とれていたようである。



図 2-7-4 迅速測図で確認する横石集落



図 2-7-5 地質図



図 2-7-6 杉尾神社の本殿(2023/9/11 二上撮影)

2-8. 鎌瀬

・集落概要

『角川地名大辞典』に記載がないため『相生町誌』を参照した。

元々は横石の土地であったが、雄が居住地開発を行い、鎌瀬部落として雄に属する飛地となった。しかし山林は引き続き横石のものとして扱われた。明治 15 年の山林原野名簿では、居住地は雄であるが山林は横石村として記述されている。明治 22 年の町村制実施の際に居住域も横石村に組み込まれた。

名称の由来は、鎌のように直角に曲がる那珂川の形状による。この場所は河川交通の難所とされていた。

・水利

飲料水は、南北に流れる「井の谷」「森の谷」「大阪釜の谷」の水を利用していた。明治期に井戸が掘られ、現代(1973)では揚水ポンプで井戸水を汲み上げて利用している。

灌漑水は、「花才谷」から 2km の長さを引いている。この用水の水源は横石、上地野と共通しており、早魃時には水争いが起こった記録がある。

・寺社・信仰

山神社(氏神)が、部落中央の小高い丘に存在する。旧道とも接続していた。慶長 5 年(1600)建立との棟札がある。参道には地神塔と地藏堂、庚申碑も存在する。

・生業・商工業

農業面では、1973 年時点で葉たばこ、みかん等の商品作物が栽培されているほか、種卵養鶏が開始されている。商店は存在せず、下流の集落に生活必需物資を求めていた。

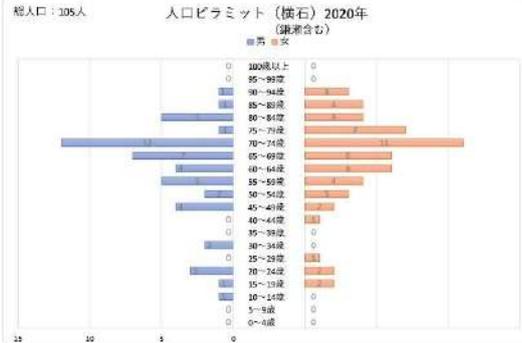


図 2-8-1 横石 (鎌瀬含む) の人口ピラミッド



図 2-8-2 鎌瀬の地図(1933年)

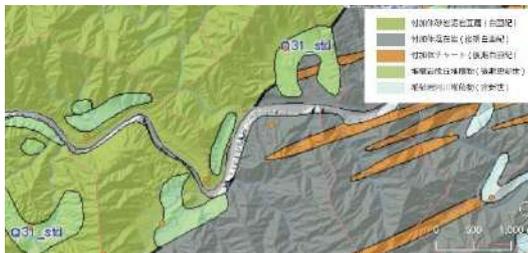


図 2-8-3 鎌瀬の地質図



図 2-8-4 鎌瀬の農業集落境界図



図 2-8-5 鎌瀬の農地地目

2-9. 大久保

・集落概要

江戸期～明治 22 年の村名。はじめ阿波国那西郡、寛文 4 年からは那賀郡のうち。徳島藩領。鮎川村の枝村（那賀郡村誌/相生町誌）。神社は「寛保神社帳」に蛭子大明神・八幡宮・山神が見える（続徴古雑抄 1）。文政 2 年生活に苦しむ仁宇谷諸村は藩主領内巡検費用賦課を契機に一揆を起こしたが、その際当村の農民も参加した。

・水利

戦後まで部落内の谷水を汲取り飲料水としたが、ビニールパイプの普及によりそれぞれの集団で小規模の水道を作っている。南側の水道、藤ヶ平間の水道、向原の水道、松原の水道、上組の水道などがある。大字請ノ谷字上平間から大字大久保字八丁に至る大久保大用水が元禄年間に完成。毎年 4 月に赤土を運びパイで締め付ける工事を行う。

・寺社・信仰

蛭子神社

建立年:永徳三年九月

祭神:事代主命

小宮:八幡神社・山神社・龍神社

舞台は明治 35 年の改築といわれ、間口 5m、奥行 10m、木造平屋瓦葺で屋根裏両端に二階部屋がある。芝居時には臨時に花道をつけた。

・生業・商工業

米麦と番茶が主要生産物。松原や向原には良質な粘土が産出し瓦焼きが行われていた。現在は工場は残っていない。相生町誌に記載の商店は宿屋・雑貨店・染物屋(2)・散髪屋・菓子屋。

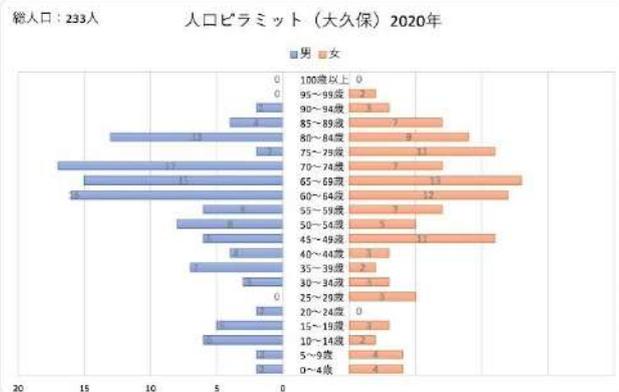


図 2-9-1 大久保の人口ピラミット



図 2-9-2 大久保の農業集落境界



図 2-9-3 大久保の地図 (1912)

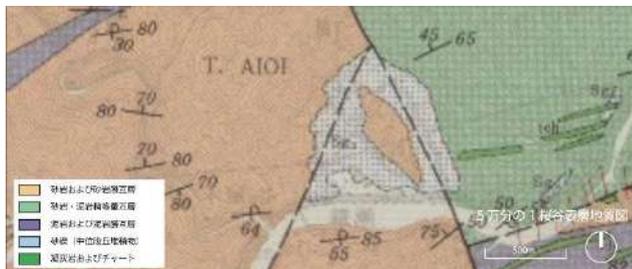


図 2-9-4 大久保の地質図

・自然との向き合い方

川口ダム建設以前は、紅葉川的那賀川合流地点付近の川辺に「あば」という木材を溜める場所があり、筏組が占用しそこから筏で中島へ運搬した。この付近は大洪水時には薪の拾い場になり、住民は一年分の薪を拾えた。鎌瀬の渡場付近の草地は大久保部落の占有地だった。白保の瀬は筏乗りの難所として知られたが、対岸の白保礮は住民の築石や砂利の採取場だった。(相生町誌より抜粋)部落を囲む山地や中山周辺の民家は山村型の直線配置をとるが、切断蛇行上の土地は南向き緩傾斜となり母屋と付属屋が前後する家屋配置が見られる。

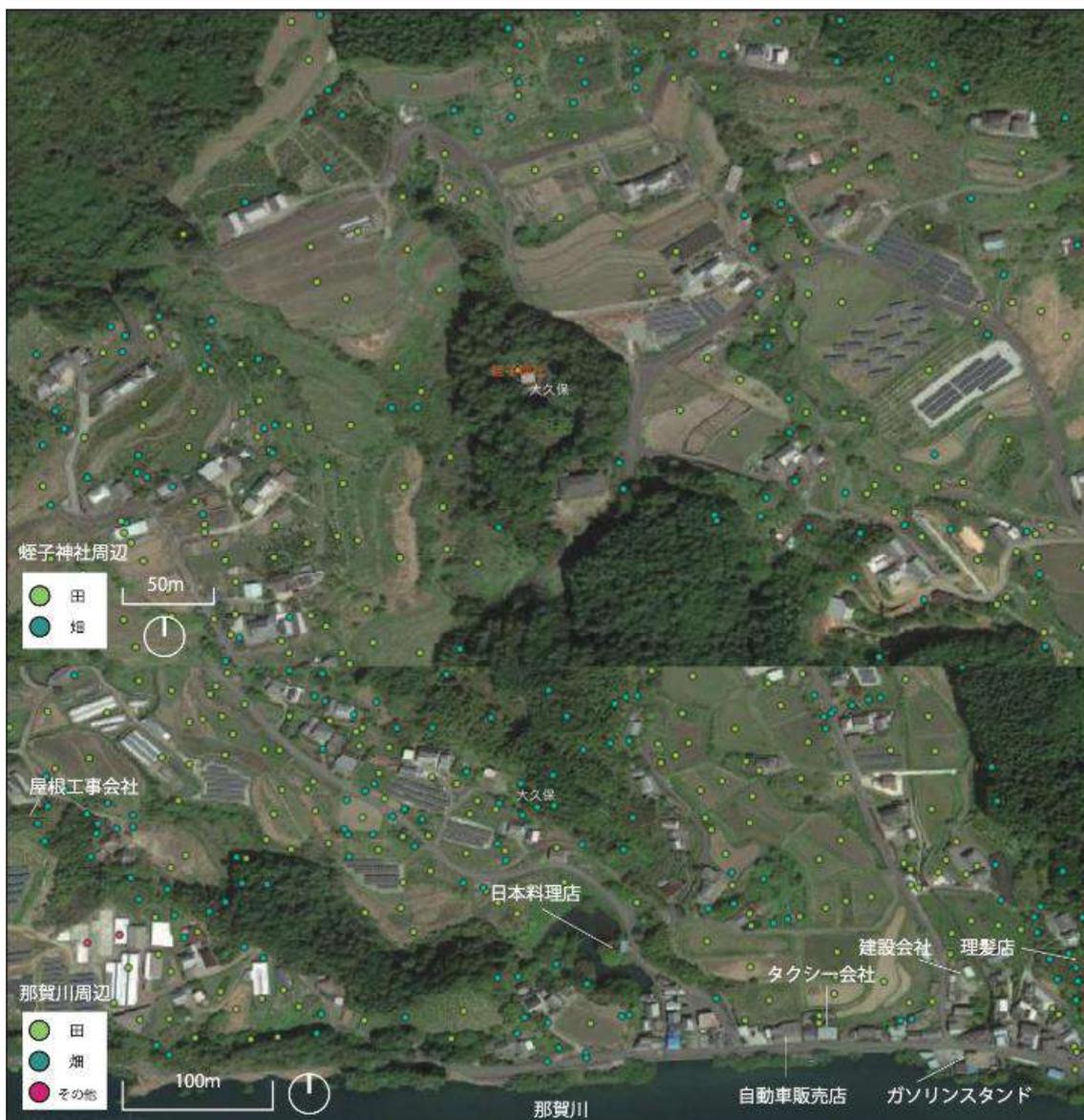


図 2-9-5 大久保の農地地目

2-10. 延野・入野

・ 集落概要

(角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986)より

〈延野〉

那賀川中流北岸に位置する。小字に駅（うまつぎ）という地名があり、古くから交通上要衝の地であった。また地内には段所という小字もあり、那賀川北岸の段丘状の地形をなしている。「延野郷」は南北朝に見える郷名。江戸期の「阿波志」には延野 32 里のうちとして荘司石の地名が見える。現在の那賀郡那賀町延野を中心として、同町相生（あいおい）地区東半部を含む地域に比定される。

〈入野〉

那賀川支流の延野川流域に位置する。同川は地内字暮谷を源とし、延野字王子で那賀川に注ぐ延長 2 km 余りの川で、平常は水流はなく底無し川と呼ばれるほど川床の岩盤が低く深い。このため洪水時には鉄砲水となり、毎年のように川沿いでは被害を受けた。

飲料水には苦勞していたが、昭和 32 年に山林の湧水利用の簡易水道が完成。

・ 水利

2 里 18 丁（約 10000m）の「入延用水」は「26 町歩」の田圃に灌漑された、その水路は寛文 4 年

（1664）3 月通水。昔「溝番」交代で毎日用水の水漏れを見て廻る、水源の水が少なくなったら井堰をする。

昭和 40 年代（1960 年ぐらい）以降、水路はコンクリート製となり、調節作業も大変しやすくなった。昔灌漑用水、井水と共に飲用水としていた、**水道水路**は水利組合で昭和 30 年代（1950 年ぐらい）に建設さ

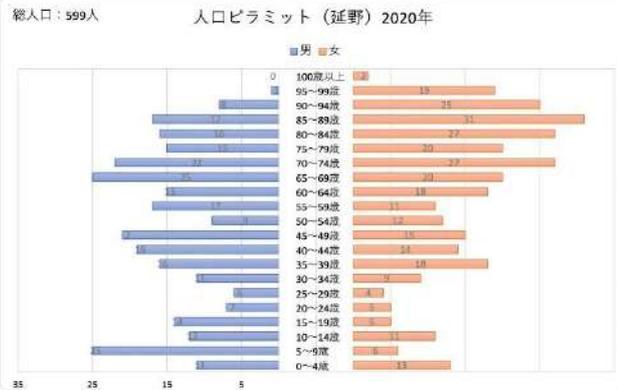


図 2-10-1 延野の人口ピラミッド

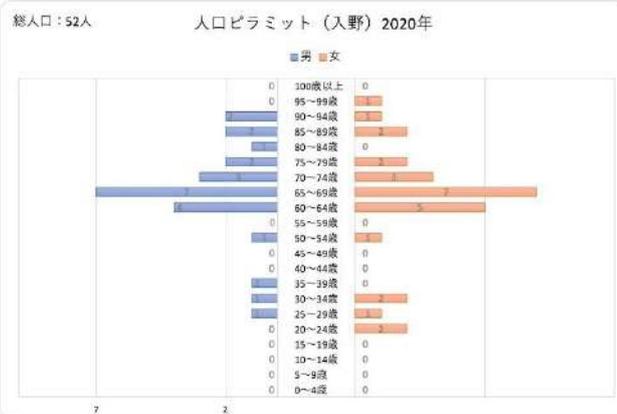


図 2-10-2 入野の人口ピラミッド



図 2-10-3 延野、入野主要部分の標準地図

れた。



図 2-10-4 延野川（入野谷川）

・ 寺社・信仰

八坂神社【延野農村舞台あり】

建立年：不明。寛政年間(1789-

1801)の本殿屋根葺替の棟札あり。

祭神：須佐之男神（スサノオ）。

例祭日：七月七日。

旧道と神社の関係：繋がっている。



図 2-10-6 延野農村舞台と八坂神社

円明山万福寺（高野山真言宗）

【国登録有形文化財】

建立年：文治 2 年（1186）とも伝えられた。

永禄 4 年（1561）現在地に移る。

地蔵堂は平成年間、鐘楼は宝暦 11 年（1761）。（一代梵鐘は戦争で供出、二代は昭和 28 年再鑄。）
本尊：薬師如来（廃寺玉祥寺を合併）



図 2-10-7 万福寺本堂



図 2-10-5 入野から延野へのドローン写真



図 2-10-8 延野・入野の明治 45 年(1912)測図

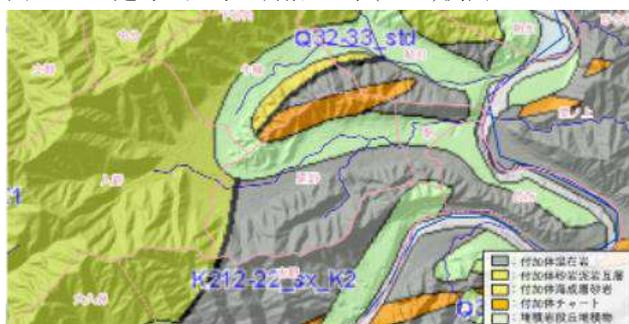


図 2-10-9 延野・入野の地質図

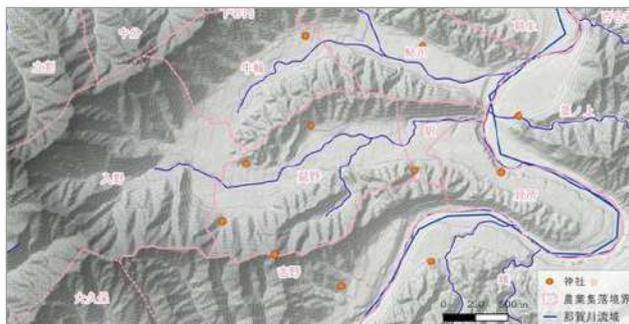


図 2-10-10 延野・入野の農業集落境界線

2-11. 牛輪・鮎川

・集落概要

(角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986)より

〈牛輪〉

阿波国那賀郡のうち。徳島藩領。

「阿波志」では高 120 石, 戸数 15・人数 30, 耕作地は水陸田 16 町 9 反余, 里は櫛尾窪・巫神宅・宮首・東宅の 4 とある。古くから阿波番茶の主産地として知られ、近代以降は徳島・香川・淡路方面へ販売して来たが、のちに緑茶に転換している。とくに昭和 34 年からは、新農村振興事業として取り組み, 緑茶生産が盛んになった。当村は水利には恵まれず, 用水路開削が計画されたこともあったが難工事のため中止してしまった。明治期までは飲料水にも不足することさえあったという。「寛保神社帳」に松尾大明神・八幡宮・山神が見える(続徴古雑抄 1)。明治期には馬場があり, 競馬も行われた。

〈鮎川〉

はじめ阿波国那西郡, 寛文 4 年からは那賀郡のうち。徳島藩領。(中略)「阿波志」では高 185 石, 戸数 30・人数 167, 耕作地は三等雑水陸田 19 町 5 反余とある。近隣に比べると水利に恵まれるため, 古くから「鮎川水どこ」と称され, 水田の開拓も奈良期からかと推定されている(相生町誌)。氏神は大宮八幡神社。同社は養老年間の勧請と伝え, 大般若経 600 巻を蔵す。寺院には真言宗滝寺があり, 徳島藩の家老であった山田織部の木像がある。

・水利

(鮎川) 上述の通り水利に恵まれていた。

(牛輪) 明治時代まで, 飲料水は小谷または泉から水を肩でためて確保

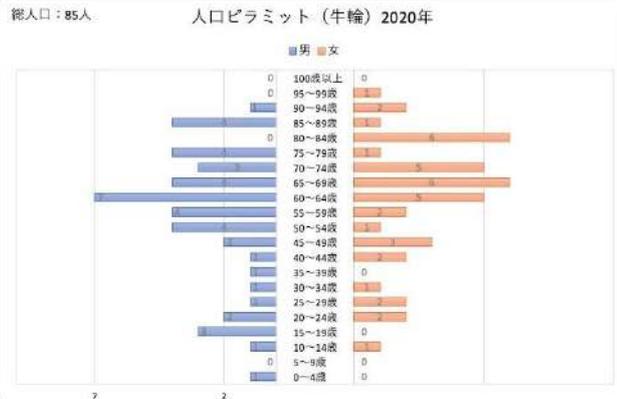


図 2-11-1 牛輪の人口ピラミッド

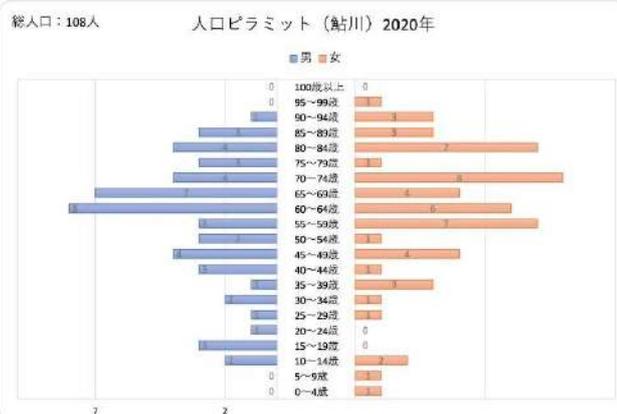


図 2-11-2 鮎川の人口ピラミッド



図 2-11-3 鮎川・牛輪集落における農業集落境界線



図 2-11-4 鮎川・牛輪集落(1907年)

してきた。大正時代、各戸に井戸が設けられたが干ばつ時は井戸水がなくなることもあった。昭和 35 年（1960）頃、上部落が福ヶ谷を水源として水道の敷設が行われた。

・寺社・信仰

〈大宮神社〉

建立年：養老年間（717-24）

祭神：不明

詳細：氏子は鮎川・牛輪・入野の三部落。かつては仁宇村-水崎村まで、20 カ村の総鎮主であったといひ伝えられている。旧神饌幣帛料供進神社。和同 4 年（711）、鮎川・牛輪両村の氏神として宇佐八幡宮より勧請した。当社が所蔵する大般若経 600 卷は、応永 31 年（1424）藤原平則が納めたもので、昭和 49 年 8 月 30 日、県の有形文化財の指定を受けた。大正 9 年（1920）、入野の八幡神社を合社した。

〈滝寺〉

建立年：不明。天正検地帳にその名が出ている。

本尊：地蔵菩薩

詳細：かつて山田家の菩提寺で山田織部の木造が現存。かつては草葺の建物であったが、現在の建物に改築された。規模は縮小。また、庵を含めるとこの地域にはかつて 6 個の寺建築が存在していたとされている。

・生業・商工業

（鮎川）

現在、津川製材が立地する場所は「水の端」と呼ばれ、かつては高瀬舟や筏の津であった。牛輪・鮎川・入野からの農林産物の多くはここから運び出されていた。県道・国道が開通してからは那賀川上流の産物のほとんどがこの場を通るようになり、企業家がたびたび製材業をこの場で営んでいた。津川製材は昭和 29 年（1954）に創業し、はじめの経営者は和食の山本多喜であった。

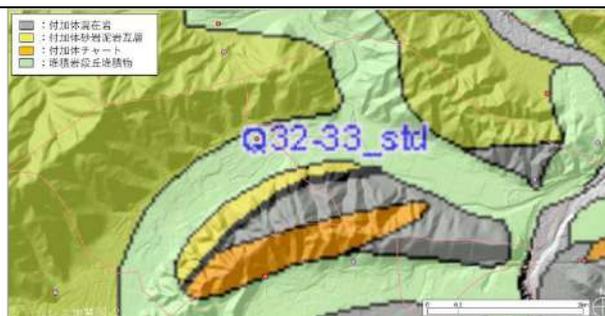


図 2-11-5 鮎川・牛輪集落の地質



図 2-11-6 茶畑に囲まれる民家



図 2-11-7 牛輪集落における茶の生産と景観



図 2-11-8 万年青の生産風景

平井製材は昭和46年(1971)に創業し、主に外材を中心に扱っていた。

(牛輪)

木材は板に加工し、茶俵を含めた農林産物は肩に担がれて「水の端」まで運ばれ、そこからは高瀬舟によって下流の岩脇まで運ばれた。塩や反物の購入は那賀川を渡り、現在の阿南市新野町で行われていた。道路開通後は大八車や自動車によって行われるようになった。

土地が平坦で乾燥している場所は茶畑に使われ、川沿いの場所は水田として使われていた。しかし、川沿いの地域は粘土質で湿気が強い土地であるため米麦作には向かず、昭和14年(1939)以降はたばこの栽培が普及していった。しかし、昭和45年(1970)には人手不足により衰退していた。

(住民の職業(牛輪、1973、記載世帯28戸)) 農業(23)、左官(2)、石屋、船員

・自然環境と集落

上述の通りであるが民家の配置に関して、鮎川では山の南斜面の裾野に寄り添う形で線状分布しているのに対し、牛輪では流路跡の平地に面として分布していることが分かる。ここからも両集落間に存在する水利に関する貧富の差が読み取れる。

・集落の特徴

- ・流路跡の平地に対して線・面という異なった形で向き合う2つの集落構造
- ・支流の農林産物を運搬する中流港と製材所の存在
- ・製茶の盛んな牛輪の集落景観

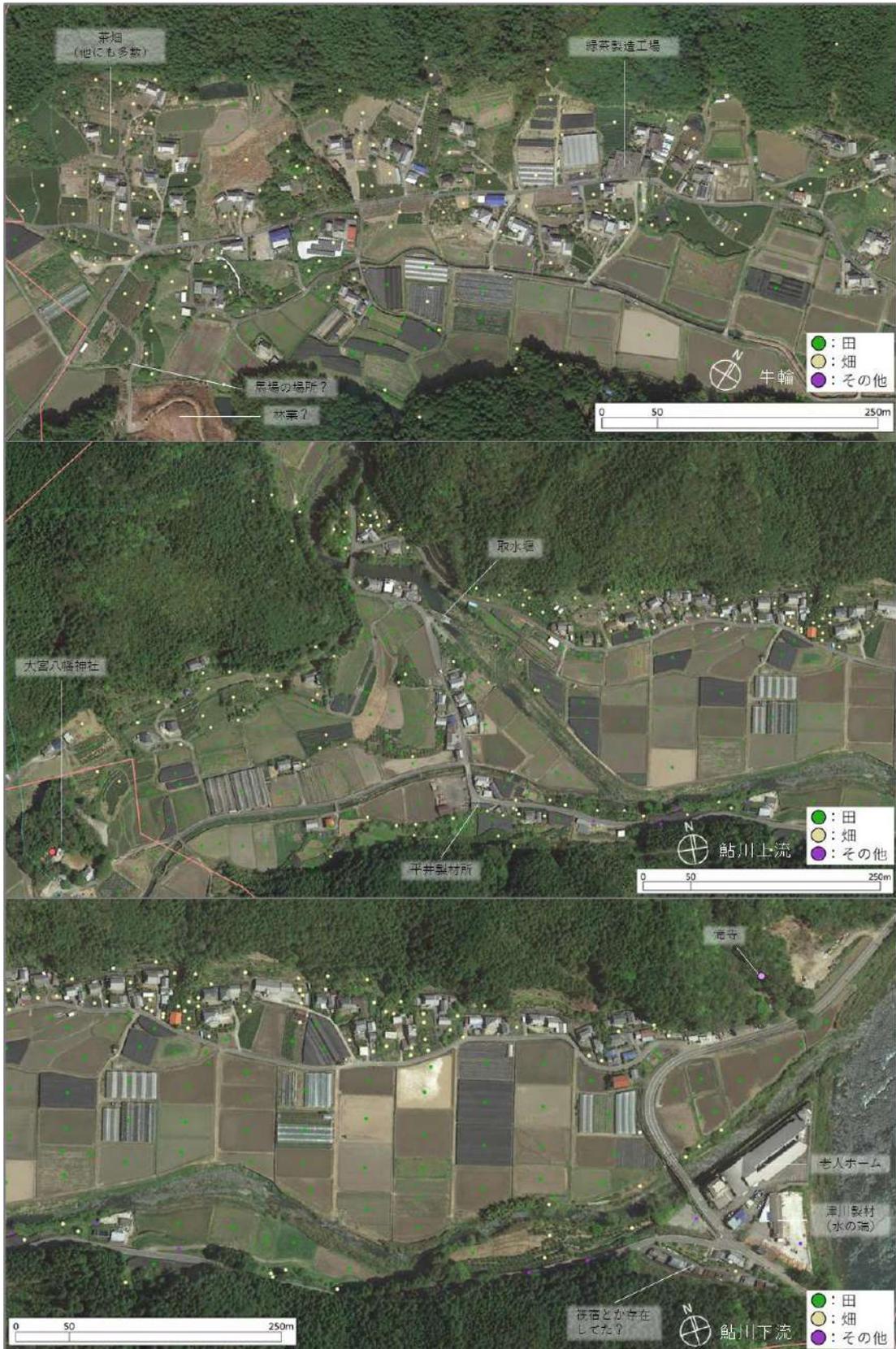


図 2-11-9 鮎川・牛輪集落

2-12. 各集落の微地形

第三章以降の土地利用や水利などの分析材料として、各集落における微地形の在り方について提示する。国土地理院「基盤地図情報 数値標高モデル」標高データを朝日航洋株式会社「陰陽図メーカー」で編集することで作成した。



図 2-12-1 調査対象集落微地形図①

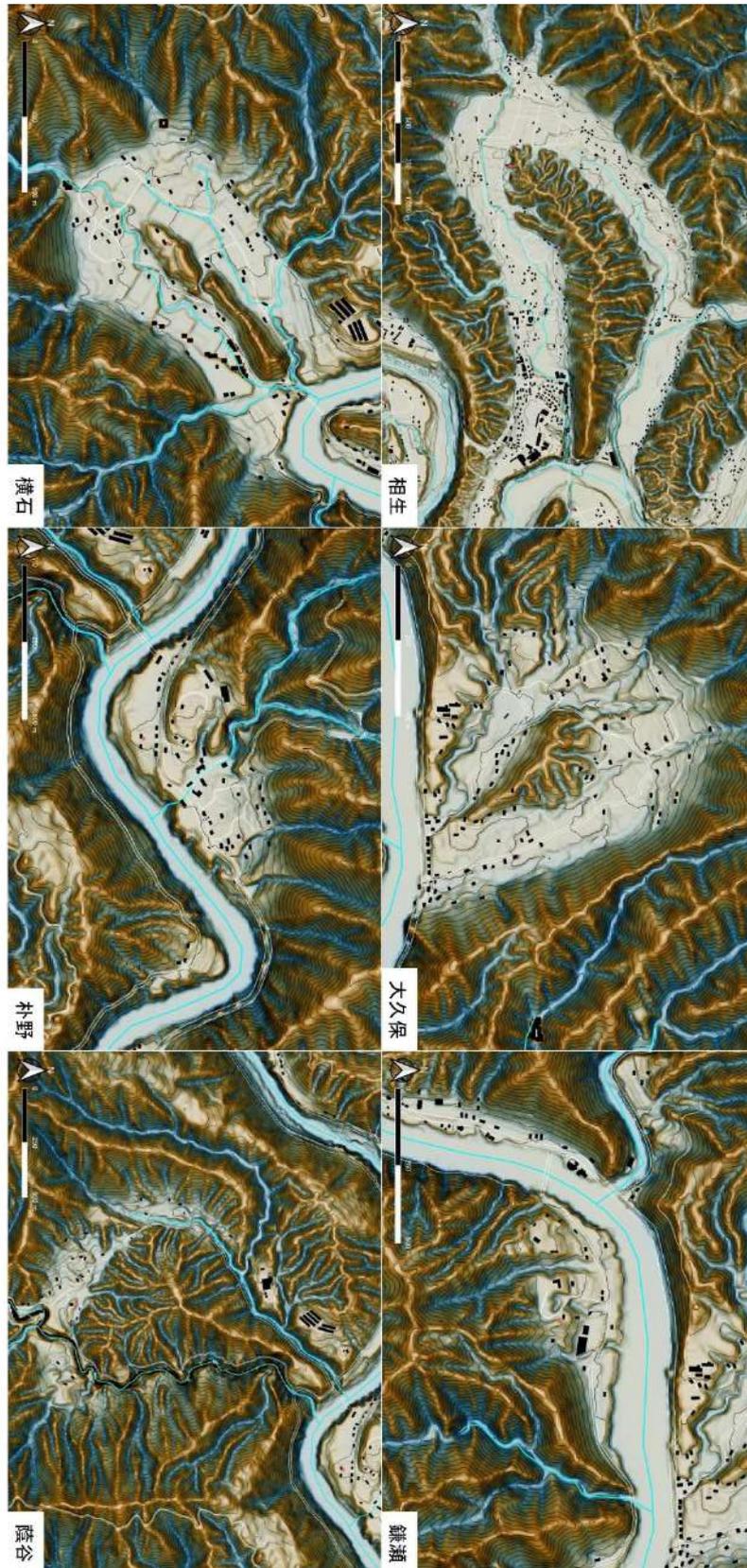


図 2-12-2 調査対象集落微地形図①

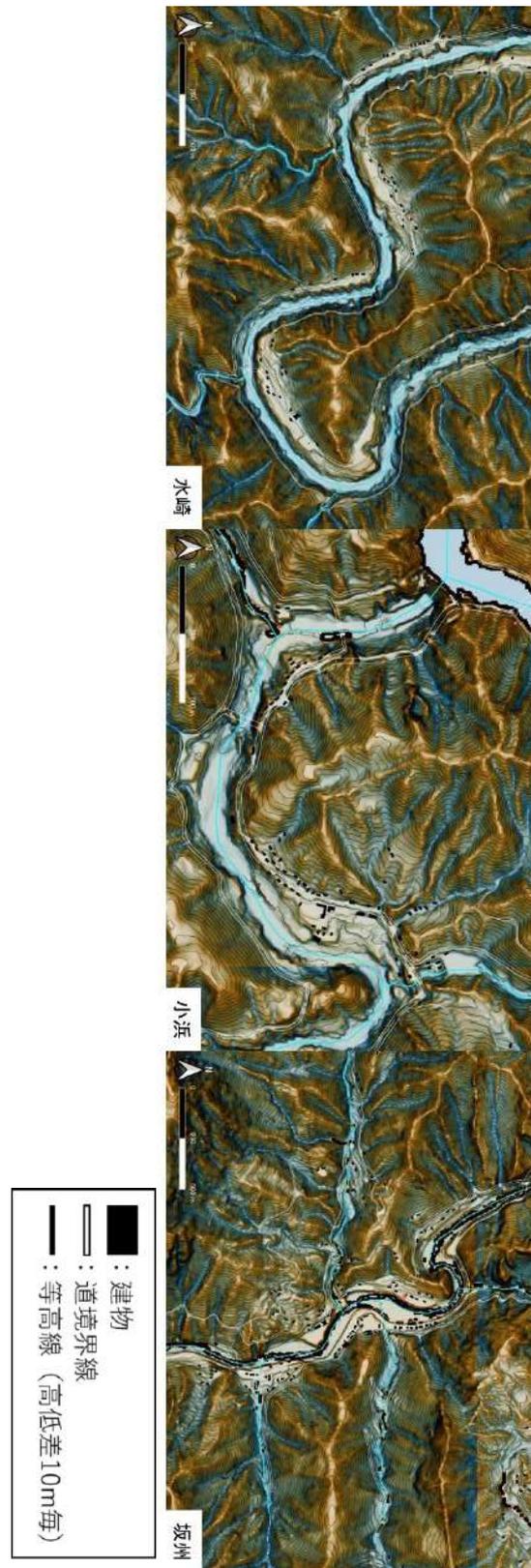


図 2-12-3 調査対象集落微地形図②

第 3 章 本論・各集落について

3-1. はじめに

本章は実地調査を通して確認された各集落が持つ空間・生業に関する特徴について記述していく。記述は調査を通して獲得できた情報や資料より、以下の5項目から行われ、第五章における那賀川中流域における人々の住みこなし方に関する考察につなげる。

【生業 (M1 呉)】

林業を中心に、農業、商業、インフラ、養殖、宿泊、狩猟、工業、観光の9項目に関して、それぞれの集落に存在が確認できた生業を記載した。

【民家 (M1 碓氷)】

民家形式についての基本的な情報と、地域的な形態である超題材に関する事項と祖谷が畳家についての記述を行った。また現地で牛小屋の転用事例が多くみられたのでそちらに関しても記述している。

- ・集落内における家屋配置・建築形式の傾向
- ・母屋/付属屋/耕地の関係
- ・建築的特徴(屋根形式・階数)、基礎・構造的特徴、外壁・意匠的特徴
- ・長大材の利用
- ・木板張りの張り方
- ・祖谷型民家の分類
- ・牛小屋の転用事例

【農村舞台 (M1 口石)】

那珂川流域の農村舞台は浄瑠璃、歌舞伎の舞台から始まり、人々の集会所としても用いられていた。農村舞台はなくなっているが、境内に集会所がある神社もあり、それも合わせて報告を行う。農村舞台について以下の項目に基づき報告を行う。

- ①農村舞台名②神社名③集落内における立地場所④農村舞台の配置⑤農村舞台の形式
- ⑥現在の利用状態⑦その他備考

【信仰 (M1 戸田)】

各集落において実見した神社、地神塔および、信仰に係るその他の施設等について報告する。(※地神塔に関しては、2021年の調査による「四国山地那賀川流域調査報告書」を参照のこと。)神社に関しては、境内、建築、その他の特徴について、それぞれ記述する。地神塔およびその他の施設に関しては、位置、概要、その他の特徴について、それぞれ記述する。

【行事 (M1 張)】

各集落における現在の行事を中心に記述を行い、その文化と共同体の活動状況に関する情報を提供する。

3-2. 坂州

3-2-1. 生業

【林業】

・下流から坂州の農村舞台までの道筋までに大字内で薪が敷き詰められた作業場のようなものを発見した。商業用であるかは定かではないが、坂州の住民が森林を整備していく中で手に入れたものであると推測できる。



図 3-2-1-1 道路沿いに薪が並べられている様子@那賀町坂州 (2023/9/9 塚原撮影)

【農業】

・当地域を管轄している阿南農業協同組合は、阿波市農業協同組合など8組合と合併を行うという事前開示がデイリーヤマザキ（坂州唯一のコンビニエンスストア）に掲示してあった。

・坂州の農村舞台周辺地域では、家庭菜園など小規模な畑作などを行っている。

・坂州木頭川から寒谷の方の支流をさらに上ると段々畑でのゆずの栽培を行っている。トロッコのレールが畑から民家の脇まで到達しており、作物の運搬などに使っていたことが考えられる。



図 3-2-1-2 民家の脇から裏につながっているトロッコ@那賀町坂州 (左)

図 3-2-1-3 共栄モノレール@那賀町坂州 (右)

【商業】

・坂州の農村舞台から坂州木頭川を挟んで対岸にデイリーヤマザキ、木沢診療所、郵便局と生活に必要不可欠な機関が集中していた。

3-2-2. 民家（大字坂州小字広瀬について）

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

当集落は南北に走る木頭川に沿うように配置されており、浸食の少なく、切り立った東側崖にある。崖の中をつづら折りに曲がる道沿いに配置された家屋はどれも東側(詳しくは南東東)に正面を設けている。集落全体を通してしころ屋根が多いが、川に近い土地の方が広いスペースがあるためか方形屋根も数戸見える。配置としては、急崖の狭い耕地を生かすためか平入りが多く、階は二階建ての棟が殆どである。付属屋に関しては妻入りの切妻屋根が多い。屋根材は母家に関しては瓦が多く、付属屋に関してはトタンなどもみられる。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

縦横板張りや、縦張りなど多くの構法を混じえている。一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

上にも記したように、崖の中をつづら折りに曲がる道沿いに配置された家屋はどれも東側(詳しくは南東東)に正面を設けている形式は、『剣山周辺の民家』(酒巻芳保,1955)によれば、“此の細長い狭い敷地には「母家」を中心として、両側に「納屋」や「牛小屋」が横に細長く配置され、平地民家の配置と異なった配置も山間民家配置の特長で、所謂「祖谷型」配置とも云うべきものである。”とされており、その配置が今もなお継続していると考えられる。

・牛小屋の転用事例

牛小屋に関してはあまり見受けられなかった。『剣山周辺の民家』(酒巻芳保,1955)を参考に「祖谷型」配置を確認すると、民家の隣に牛小屋が設けられており、付属屋として設けられていることから解体されやすかったのではないかと考えられる。



図 3-2-2-1 坂州内で一番低い場所に位置する木造民家(2023/9/9 呉撮影)(左)

図 3-2-2-2 比較的新しく建てられた木造民家(2023/9/9 呉撮影)(中)

図 3-2-2-3 図 3-2-2-1 を正面からみる(2023/9/9 塚原撮影)(右)

3-2-3. 農村舞台



図 3-2-3-1 農村舞台の外観(2023/9/9 口石撮影)(左)

図 3-2-3-2 農村舞台の配置(口石作成)(右)

①坂州農村舞台

②坂州八幡神社

③川から少し上がり、民家に並んで配置。

④農村舞台の配置(図 3-2-3-2 参照)

⑤平舞台形式

⑥利用を確認できないが、管理されていることがうかがえる。

⑦鳥居から拝殿までの距離より農村舞台の正面の距離の方が長く、神社境内における農村舞台の空間による影響力が大きいことがわかる。

農村舞台が腐朽していないのは重要文化財に登録され管理されているためだと思われる。

資材(木材)置き場は農村舞台の側面と背面に確認できる。

3-2-4. 信仰

坂州農村舞台を有する坂州八幡神社を訪問した。また坂州の集落中心部よりも下流に位置する宇奈為神社(那賀町木頭内ノ瀬)も訪れた。同神社は『延喜式』にも記載がある。

・坂州八幡神社

(境内)

本殿、拝殿、神輿庫、当家詰所、農村舞台、9つの境内社が存在した。地神塔は拝殿の向かって右隣に位置していた。昭和27年及び昭和55年の参道補修工事の石碑も存在した。境内は雑草の繁茂が見られず、綺麗に管理されていた。

(建築)

由緒書によると創立年代は不詳であり、本殿の最古の棟札は1677年の物である。現本殿は1846年に建立された。本殿は流造で、精巧な組物と彫刻がなされていた(図3-2-4-1)。

・宇奈為神社

(境内)

本殿、拝殿、多数の境内社、狛犬、地神塔が存在した。

地神塔は鳥居の隣に配置されており、周囲に注連縄が張られていた。境内は砂利敷で雑草もほとんど生えておらず、丁寧に管理されている様子が伺えた。

(建築)

流造の本殿には精巧な組物と彫刻が施されており、形状は坂州八幡神社と類似していた(図3-2-4-2)。鳥居、本殿拝殿やその他の社、石垣は新しい様子であったが、狛犬と地神塔は古かった。

(その他)

境内内には昭和61年の改修記念碑が存在した。同工事は国道193号線の改良に伴う必要から実施された。境内の嵩上げ、鳥居の移動と石像化、舞台・地神碑の移動、玉垣建立、神殿改修その他の工事が記載されており、神社全体を大幅に改修する工事であったことが分かる。資金は徳島県による補償金により大部分が賄われていた。この大規模工事により過去の痕跡の多くは失われた様子であった。



図3-2-4-1 坂州八幡神社の本殿組物@那賀町坂州 (2023/9/10 塚原撮影) (左)

図3-2-4-2 宇奈為神社の本殿組物@那賀町坂州 (2023/9/10 塚原撮影) (右)

3-2-5. 行事

(時間)

毎年 11 月 22 日の「秋祭り」を中心に、坂州の農村ステージでは民俗行事の一連の活動が行われている。

(背景)

このような祭りは、近年、坂州の集落を中心とした地域から拡大し、那賀町全体や徳島の代表的な意義を持つまで広がっていた。これは、戦後、徳島的那賀地域から多くの人々が転出し、かつての祭りが減少したため、1990 年代には徳島県内多くの農村舞台が廃棄となっていました。しかし、坂州農村舞台はより良い状態に、続いて使用していました。文化庁の記録によれば、昭和 49 年（1974 年）に坂州の農村舞台は徳島県指定有形民俗文化財として指定されたから、八幡神社は坂州農村舞台を「宵宮」の人形芝居に使用してきました。

(内容)

近年では、神事や祭りに加えて、阿波の農村舞台の保存会や那賀地域の NPO、青年団など団体の努力により、人形浄琉璃、阿波舞、吹筒花火などの伝統的な民俗と行事とが結びつき、伝統行事が続けられている。

(例)

2014 年坂州八幡神社秋祭り日程

【11/22(金)】

●16:00～

襖カラクリの舞台裏見学、夜店手伝い

●18:00～

坂州八幡神社秋季祭礼・宵宮

・襖カラクリ/千畳敷（若連中）

・恵比須舞（芸能振興会）

・八百屋お七火の見櫓の段（清流座）

・金管演奏（杉の子オールスターズ）

・若連劇場（創作時代劇）

・お楽しみ抽選会

・大花火大会

●21:30 ごろ終了予定

【11/23(土)】

●8:00～ 舞台片付け

●10:00～ だんじり引き回し

●12:00～ 神事

●13:00～ 御輿担ぎ

●15:00～ 慰労会参加

●18:00～ 終了予定

3-3. 小浜

3-3-1. 生業

【インフラ】

・長安ロダムは、現地でガイドをしていただいた高田さん曰く、近年増築されたダムである。日野谷発電所は、長安ロダムの貯水を発電利用するものである。

【商業】

・谷口商店という魚などの生鮮食品からパンなどが売られている街の商店がある。高齢の男性が店を切り盛りしていた。

【宿泊】

・筏師が川下りの際に途中で滞在する筏宿が現在も残っている。ただし、現在は営業していない。（詳細はトピックを参照）



図 3-3-1-1 筏宿東側 2 棟（東側が最も古い）@那賀町小浜（2023/9/10 呉撮影）

3-3-2. 民家

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

当集落は北東方向へ進む那賀川と、その横に沿う国道 195 号線を軸とした街村である。戸数も多くまた北部には公民館や病院といった公共施設群があり、集落の真ん中には 195 号線の端に家屋が立ち並んでいる。集落の南端部には北部にある山へつづら折りに登る道があり、その道に 10 数戸の民家が張り巡らされている。この報告では主に真ん中の街村部分と、南端部の塊村部分を中心に扱う。

まず街村部分はタバコや衣料品など、地域商店のようなものが立ち並んでいる。民家は道路に対して敷地ぎりぎりから民家が建っている。ほとんどが二階建てであるが、三階建も数戸見受けられる。また JA アグリあなんがそうであるが、新しく建てられた商業施設などもあるため、この地域が生活の中心であることが見てとれる。古い民家は特になく、坂

州で見られたような木質を表しとする板張り壁はあまり見られない。建物自体の築年数は古いものの、外壁はサイディングに変更している民家なども見られる。(図3-3-2-1) 塊村部分について言えば、南東向きの急崖にサーキット状の道路が斜面上に一周している。民家は基本的に南東方向を正面とするが、道路が非線形なのでそれぞれ若干のずれがある。屋根形式も耕作地の広さがバラバラであることからか、切妻屋根をはじめとして L 字の寄棟屋根やしころ屋根も見受けられる。築年数はバラバラである。南端部には近代に作られ増築を重ねた筏宿があるが、それは第4章にて詳述したい。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

坂州と同様に、縦棧横板張りや、縦張りなど多くの構法を混じえている。一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

坂州において「祖谷型」配置はそれが確認できたが数は多くなかった。街村部に関しては近代以降の開発が進んでいるため、南端部に関して詳細に調査を行えばそれらしき構成は見てとれるかもしれない。

・牛小屋の転用事例

牛小屋に関してはあまり見受けられなかったが、195 号線に面する民家に関しては玄関の横に大きな入り口があり、恐らく牛小屋があったであろうものも見受けられる。



図 3-3-2-1 筏宿のような構造をした白塗りの平入り木造民家(2023/9/10 塚原撮影)(左)

図 3-3-2-2 街道沿いの木造二階建て民家(2023/9/10 塚原撮影)(右)

3-3-3. 農村舞台・信仰・行事

当集落においては調査を行っていない。

3-4. 水崎

3-4-1. 生業

【農業】

・段々畑でのゆずの栽培がおこなわれている。

【養殖】

・小さいいけすがあり、品種は特定できなかつたが養殖が行われていた。

【狩猟】

・休猟区に指定されている区域があり、狩猟を行い過ぎたなどの理由で動物が減少していたことが考えられる。（ニホンシカ・イノシシを除く）



図 3-4-1-1 段々畑の上から見下ろした様子@那賀町水崎 (2023/9/10 張撮影) (左)

図 3-4-1-2 水路沿いのいけす (2023/9/10 口石撮影) (右)



図 3-4-1-3 休猟区指定の看板@那賀町水崎 (2023/9/10 口石撮影)

3-4-2. 民家

本報告は大字水崎小字柳ノ久保・中村・大佐古南端部にある、水崎集会所を中心とした民家群一帯を中心として報告を行う。

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

水崎集会所近辺の民家群は北東方向へ流れる那賀川に沿って配置されており、十数戸の規模である。民家は切妻屋根平入りがほとんどで、他には入母屋屋根、入口は南東方向、道に対して開かれている。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

坂州と同様に、築年数の経っている民家に関しては縦張りが綺麗に残っている。これも他集落と同様、一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

確認できた母家のみの家に関しては、付属屋がないことから祖谷型の配置とは言えない。一方で付属屋のある民家においては小屋の用途が不明であるため祖谷型であるかどうかまでは確認できなかったが、西端の民家は狭い敷地に対して横長の配置であること、母家と納屋のような付属屋が直列に並ぶこと、付属屋が90度回転し、妻入りになっていることを踏まえれば祖谷型である可能性がある。しかしながら牛小屋のような小屋が母家と並列に配置されている点は祖谷型の配置とは多少異なる点である。

・牛小屋の転用事例

確認した民家が少ないが、西端の付属屋の多い民家に関しては一階部分が石積みの付属屋が道路沿いから見受けられ、牛小屋のようなものであったと考えられるが、現在は特に利用されていない。



図 3-4-2-1 人気のない平家建て木造民家(2023/9/10 戸田撮影)(左)

図 3-4-2-2 図 3-4-2-1 の数 m 離れたところにある木造民家(2023/9/10 戸田撮影)(中)

図 3-4-2-1 一階が駐車場になっているトタン補修の木造民家(2023/9/10 張撮影)(右)



図 3-4-2-1 一階部が組積になっている小屋 google map より引用(2023 年 8 月)

3-4-3. 農村舞台

当集落においては調査を行っていない。

3-4-4. 信仰

髪神子神社を訪問した。同神社は水崎大橋の南側の交差点を南方に 1km 程度登った山中の道路沿いに存在した。

また河道周囲にある「新四国八十八ヶ所水崎廻り」を確認した。

・髪神子神社

(境内)

本殿、覆屋、境内社、狛犬、物置小屋が存在した。

境内は落ち葉が積もっていたが、雑草の繁茂は見られなかった。鳥居には榊が結ばれていたことから、定期的に管理されている様子が伺えた(図 3-4-4-1)。

(建築)

本殿は小規模な春日造で、小祠といえるスケールであった。本殿の裏には石垣が存在し、過去の本殿跡ではないかと推測された(図 3-4-4-2)。

(その他)

境内内には、次の文言が書かれた石碑が存在することから、奈良県の工務店が本殿を造営したことがわかる。「平成三年四月 神殿寄贈 並に造営 奈良県御所市 岡川工務店 (代表者の氏名)殿 (上那賀町菖蒲 出○)」



図 3-4-4-1 髪神子神社境内@那賀町水崎 (2023/9/10 二上撮影)(左)

図 3-4-4-2 現本殿裏の石壇@那賀町水崎 (2023/9/10 二上撮影)(右)

・新四国八十八ヶ所水崎廻り

(位置)

国道 195 号線の擁壁沿いに石仏が点在していた。

(概要)

石仏には次の 3 通りのものが存在した。

- ①台座に設置されたもの(図 3-4-4-1)
- ②木造の小祠内に設置されたもの(図 3-4-4-2)
- ③擁壁がくり抜かれた穴の中に設置されたもの(図 3-4-4-3)。

各石仏は綺麗に管理されており、供物等も置かれていた。



図 3-4-4-1 台座上に設置された石仏@那賀町水崎 (2023/9/10 張撮影) (左)

図 3-4-4-2 木造の小祠に設置された石仏@那賀町水崎 (2023/9/10 張撮影) (中)

図 3-4-4-3 擁壁の穴に設置された石仏@那賀町水崎 (2023/9/10 張撮影) (右)

3-4-5. 行事

毎年「旧暦」の 3 月 21 日に、町道沿いにある八十八体の石仏を巡拝することを、水崎廻りと呼んでいる。その日は真言宗の宗祖弘法大師・空海の命日で、その日に修練することを正御影供と呼んだ。昭和 5 年 (1930 年)、地元の人が「病弱な人でも手軽に八十八ヶ所を巡拝できるように」、いわゆる今の「パワースポット」と建てました。一回りは 7 キロメートル、約 2 時間かかる。石仏は全部で八十八尊、本尊の種類は二十四、それぞれの札所に御真言があり。例年は、地元の方による湯茶の接待もあるが、多くの方々が巡拝しに来てくれました。(近年はコロナなどの影響で、地元のお接待は中止です。)

3-5. 蔭谷

3-5-1. 生業

【農業】

- ・整えられた段々畑の跡が広がる。農業は行われていないが、土地は荒廃していない。
- ・一部、稲作をしていたような形跡がある。

【養殖】

- ・徳島蔭谷養魚場が蔭谷川上流に向かうとあり、特産であるアメゴが養殖されている。



図 3-5-1-1 石垣によって作られた休耕地@那賀町蔭谷 (2023/9/11 戸田撮影) (左)
 図 3-5-1-2 車からみた徳島養魚場の入口@那賀町蔭谷 (2023/9/10 呉撮影) (右)

3-5-2. 民家

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

蔭谷は那賀川から南側に反時計回りの半円を描くように形成されている集落である。北部には那賀町クリーンセンターがある。民家は細長い開墾地の中である一定の間隔を保ちながら点在している。

北側斜面にある集落であり、民家の正面も道に対して開いておらず、南東方面を正面としている。そのため道路から民家に入るためには民家に入るための細い道を通ってからいく必要があり、その点でも各民家の独立性を強く感じる。一軒一軒が大きく付属屋も多い。母家は入母屋屋根二階建が多い。納屋は母家に直交する形で配置されている。全体的に築年数の経った民家が多い印象がある。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

坂州と同様に、築年数の経っている民家に関しては縦張りが綺麗に残っている。これも他集落と同様、一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

一軒一軒が石垣に囲まれて、付属屋もあることから祖谷型配置の可能性はあるが、山地に囲まれて敷地が少ない制約を受けて直列的に母家と付属屋が並ぶ構成とは異なり、敷地は侵食谷の中に比較的自由的な位置に配置されているため母家と付属屋が並列的な関係を持っている民家も数戸あった。

・牛小屋の転用事例

この地域では詳しく検討できなかった。



図 3-5-2-1 道に対して斜めに構える木造二階建て民家(2023/9/11 戸田撮影)

3-5-3. 農村舞台・信仰・行事

当集落においては調査を行っていない。

3-6. 朴野

3-6-1. 生業

【農業】

- ・ 調査地域内で唯一の牛舎が谷地にあり、その裏側には、ため池があった。
- ・ 山菱電機の工場周辺でカボスの栽培を行っていた。

【林業】

- ・ 木材加工所であるあじさい木工や若杉林材加工組合の製材工場が隣接している。若杉林材加工組合では、成人男性が 4,5 人ほど作業していた。端材や製材したものに關わらず、外に置かれている。(9月11日11時15分ごろ)

【インフラ】

- ・ 太陽光パネルが溝落（小字名）南部に新設されていた。

【工業】

- ・ 山菱電機の工場が進出している。9月11日に訪問したが、人影はなく、騒音などもなかった。公園のように周辺は整備されており、人工的な池などがあった。



図 3-6-1-1 微高地から見下ろした牛舎@那賀町朴野 (2023/9/11 戸田撮影)

図 3-6-1-2 若杉林材加工組合の木の保管の様子@那賀町朴野 (2023/9/11 戸田撮影)



図 3-6-1-3 歩道からみえる新設太陽光パネル@那賀町朴野 (2023/9/11 戸田撮影)

3-6-2. 民家

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

朴野は東方向へ流れる那賀川に沿うように走る国道 195 号線の脇に配置されてる集落群で、南側斜面に形成される二十数戸の民家群である。民家は小浜の中心部のような街道脇に並ぶ形態ではなく、195 号線から直交するように山斜面を登る小道が伸び、その小道の脇に配置されている。玄関は南東方向に設けられている。民家形式は入母屋屋根二階建平入りがほとんどである。他には切妻屋根の平屋平入りや二階建てもあった。方形屋根の民家もあった。築年数はまちまちであった。集落の中心には民間の木材加工センターがある。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

外壁がサイディングのような新素材に代わっている民家が多い印象があるが、木質のファサードを持つ民家に関しては、坂州と同様に、縦張りが綺麗に残っている。これも他集落と同様、一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

全体的に母家と付属屋(納屋)が L 字になるような配置が多かった。母家と牛小屋、納屋の直列的な配置はあまり見られなかったことから、祖谷型配置とは言えるような条件を満たした家はほとんどない。

・牛小屋の転用事例

この地域では詳しく検討できなかった。



図 3-6-2-1 付属屋の大きくせり出た木造民家(2023/9/11 戸田撮影)(左)

図 3-6-2-2 2 階建付属屋の付いた木造民家(2023/9/11 呉撮影)(右)

3-6-3. 農村舞台



図 3-6-3-1 農村舞台の外観(2023/9/11 口石撮影)(左)

図 3-6-3-2 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①農村舞台名不明
- ②龍王神社
- ③集落内で一番標高が低く、河川沿いに立地。
- ④農村舞台の配置(図 3-6-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥集会所と農村舞台があり、集会所は使われている様子がうかがえるが農村舞台は使われていないように見える。
- ⑦鳥居からの参道が神社境内を周回している。鳥居が複数あり、ひとつ目のすぐ横に集会所が参道に面して立地している。横に資材(木材)が立てかけてあった。

3-6-4. 信仰

2021 年の調査時にも訪問した龍王神社を訪れた。

・龍王神社

(境内)

同神社は農地、住居、道路よりも標高が低い、集落の最下部に位置していた。参道は拝殿の裏手に伸びており、180 度方向転換して拝殿前広場にアクセスする特徴的な動線を持っていた。複数の境内社、農村舞台、公民館、備品倉庫、百度石や多くの奉納記念碑が付属していた。境内は芝生が綺麗に管理されていた。

(建築)

本殿は流造、拝殿は唐破風の付いた入母屋造であった。彫刻は他集落と比べて比較的少なかった。

(その他)

参道入口の鳥居付近に石像の台座(図 3-6-4-1)が存在したが、台座上には何も存在せず、側面に「揚水施設竣工記念 朴野上用水 昭和三十六年」と記載があった。形状と位置から、この台座は地神塔が置かれる台座ではないかと推測された。

2021 年の報告書記載の通り、地神塔は神社から離れた集落上方の農地の中に存在していた(図 3-6-4-2)。地神等の横には手水鉢が置かれ、独立した礼拝場所として成立していることが推測された。



図 3-6-4-1 龍王神社の石造の台座@那賀町朴野 (2023/9/11 戸田撮影) (右)

図 3-6-4-2 農地内の地神塔@那賀町朴野 (2023/9/11 戸田撮影) (左)

3-6-5. 行事

相生町誌（平成十七年）より：

「龍王神社（ほうの）では平成 10 年（1998 年）から毎年 1 月 10 日に各自が持ち寄った正月の門松や注連飾り、神仏用のお札などを燃やして無病息災を祈願する「どんど焼き」を行なっている。

参加者は宮司によって用意された祈禱木に願いことを書き、読み上げてもらって火の中に入れる。最近の野焼き禁止にも対応した行事で人も集まるようになった。」

3-7. 横石

3-7-1. 生業

【農業】

- ・稲作が行われている様子が確認できた。他の集落に比べ、圃場整備が進んでおり、いくつかのかたまりとなって中心の山を囲むように田んぼが整然と並んでいる。
- ・集落に対して少し高い位置に石井養鶏農業協同組合横石直営場がある。

【林業】

- ・周辺より微高地に横石木材センターがあるが、木頭森林組合管轄の木材市を開く場所である。

【インフラ】

- ・養鶏場のさらに上部に太陽光パネルが並んでいる。



図 3-7-1-1 南側から那賀川方向へ見下ろした様子（圃場整備された田んぼや養鶏場（左上部）が確認できる）@那賀町横石（2023/9/10 張ドローン撮影）（左）

図 3-7-1-2 横石木材センターと周囲の関係性@那賀町横石（2023/9/10 張ドローン撮影）（右）

3-7-2. 民家

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

横石は那賀川の扇形蛇行の跡地で、円を描くように広がる細い平地にある集落である。南側の塊村部と西側の散村部に分かれる。散村部は陰谷と同じく南北に主要道路が平地を貫いており、従って民家形式も非常に似ている。南東方向に正面を向ける切妻二階建て平入りである。塊村部は横石公民館がある。この民家群はどの家にも付属屋が複数存在する。横石集落の付属屋は母屋に対して90度回転している二階建て切妻及び方形屋根の建築が多く、用途は不明であるが規模的に納屋ではなく住居として使われている可能性がある。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

築年数の経っている建物のみならず、新築もサイディングなどのメンテナンスのしやすい素材を利用するのではなく、縦張りが綺麗に残っている。これも他集落と同様、一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

朴野と似ているが、一軒一軒が石垣に囲まれて付属屋もあることから祖谷型配置の可能性はあるが、山地に囲まれて敷地が少ない制約を受けて直列的に母家と付属屋が並ぶ構成とは異なり、敷地は侵食谷の中に比較的自由的な位置に配置されているため母家と付属屋が並列的な関係を持っている民家も数戸あった。

・牛小屋の転用事例

この地域では詳しく検討できなかった。



図 3-7-2-1 付属屋と庭の広い比較的新しく建てられた木造民家(2023/9/11 呉撮影)(左)
 図 3-7-2-2 付属屋と庭の広い比較的新しく建てられた木造民家(2023/9/11 呉撮影)(中)
 図 3-7-2-3 比較的古い木造二階建て平入民家(2023/9/11 呉撮影)(右)

3-7-3. 農村舞台

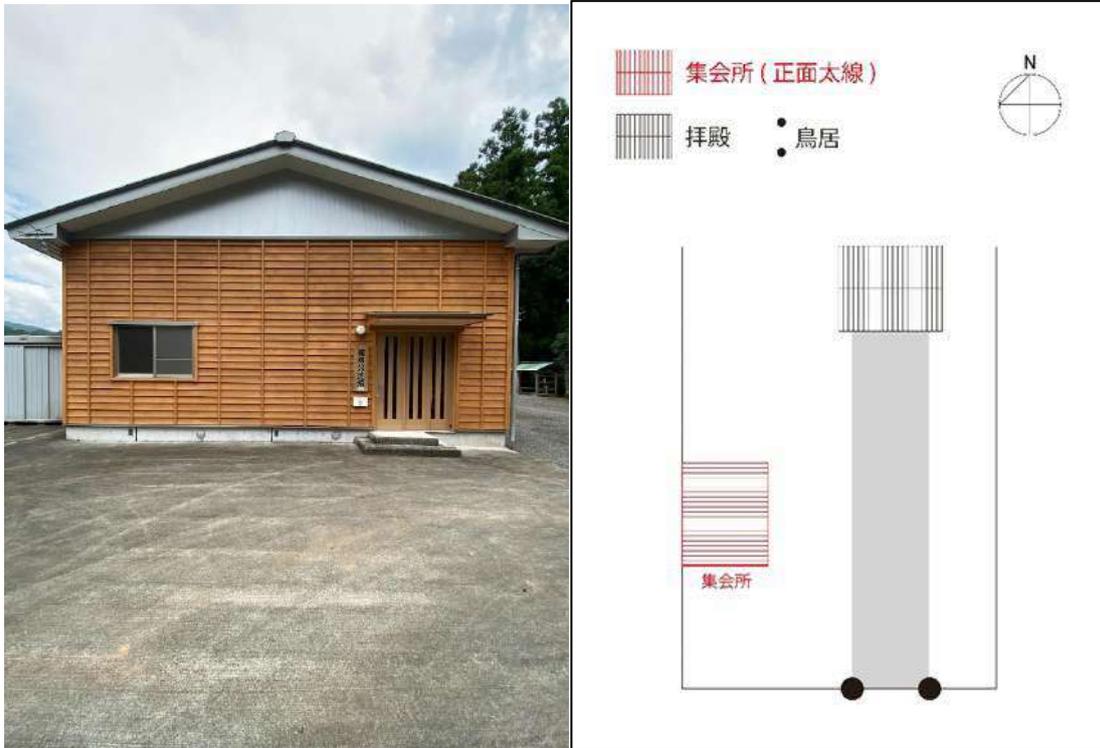


図 3-7-3-1 集会所の外観(2023/9/10 口石撮影)(左)

図 3-7-3-2 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①横石公民館
- ②杉尾神社
- ③穿断蛇行の中心、集落内で最も標高が高いところと思われる
- ④農村舞台の配置(図 3-7-3-2 参照)
- ⑤公民館のためなし。
- ⑥建築物自体が新しく、現在も利用が推測される。
- ⑦参道に対して背面に倉庫がある。

3-7-4. 信仰

切断蛇行の中央の丘陵部に存在する杉尾神社を訪れた。

・杉尾神社

(境内)

本殿、拝殿、太師堂、公民館、地神塔、石碑が存在した。公民館と大師堂は木の色が新しかった。公民館は拝殿前の広場に接しており、かつては農村舞台が存在した位置に建設されたものと推測された。境内は舗装されており、綺麗に管理されていた。

(建築)

本殿は流造で、精巧な彫刻が彫られていた(図 3-7-4-1)。

(その他)

大師堂横には昭和 58 年の「初老祈念 御大師堂建設」の石碑(4 名の氏名が明記)と、令和 2 年の「初老祈念 御大師堂建設」の石碑(12 名の氏名が明記)が存在した。工事施工者は両方とも(有)竜田建設であった。地神塔は拝殿の正面向かって斜め左方向に存在した。地神塔には 2 つの灯籠が付属していた(図 3-7-4-2)。



図 3-7-4-1 杉尾神社本殿@那賀町横石 (2023/9/10 口石撮影) (左)

図 3-7-4-2 杉尾神社地神塔@那賀町横石 (2023/9/10 口石撮影) (右)

3-7-5. 行事

当集落においては調査を行っていない。

3-8. 鎌瀬

3-8-1. 生業

【観光】

・那賀町の森林の魅力を知ってもらう「木育」のために整備された那賀町山のおもちゃ美術館がある。内装や什器の多くを地場産の木材で制作している。

・平成5年（1993年）地元産の杉材を材料に建てられた相生森林美術館もある。林業が盛んな特性を生かし、木彫・木版画の作品を収集している。

3-8-2. 民家

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

鎌瀬は那賀川調査の調査対象地の中で唯一北側斜面に立地する集落である。那賀川に沿うように東西に走る道を軸に民家群が点在する。戸数は数軒と少ないものの、中心部には那賀町山のおもちゃ美術館や相生森林美術館といった民間施設もあり活気のある集落である。民家の正面は他集落と同じく南東を向いているので、主要道路より南にある民家は道路を背に正面があることになり、他集落と比べても珍しい景観を獲得している。

切妻屋根二階建て平入と入母屋屋根二階建て平入が多いが、吉野川の流域で見られるとされる四方蓋造り平入も確認される。付属屋に関しては母屋から90°回転した切妻及び入母屋屋根二階建て妻入が見られた。妻入の倉も付属屋としてみられた。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

横石と同様に、築年数の経っている建物のみならず、新築もサイディングなどのメンテナンスのしやすい素材を利用するのではなく、縦張りが綺麗に残っている。これも他集落と同様、一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

これも横石と同様に一軒一軒が石垣に囲まれて、付属屋もあることから祖谷型配置の可能性はあるが、山地に囲まれて敷地が少ない制約を受けて直列的に母家と付属屋が並ぶ構成とは異なり、敷地は侵食谷の中に比較的自由的な位置に配置されているため母家と付属屋が並列的な関係を持っている民家も数戸あった。

・牛小屋の転用事例

この地域では詳しく検討できなかった。



図 3-8-2-1 主要道路に正面を向けた木造民家,Google map より引用(2023 年 3 月) 図 3-8-2-2 焼杉板を使用した木造民家(2023/9/11 張撮影)(左) 図 3-8-2-3 比較的古い木造二階建て平入民家(2023/9/11 呉撮影)(右) 図 3-8-2-4 石垣上に配置された四方蓋の木造民家(2023/9/11 塚原撮影)(左) 図 3-8-2-5 コンクリート陸屋根民家と並列する木造民家(2023/9/11 張撮影)(右)



図 3-8-2-2 焼杉板を使用した木造民家(2023/9/11 張撮影)(左)
図 3-8-2-3 比較的古い木造二階建て平入民家(2023/9/11 呉撮影)(右)



図 3-8-2-4 石垣上に配置された四方蓋の木造民家(2023/9/11 塚原撮影)(左)
図 3-8-2-5 コンクリート陸屋根民家と並列する木造民家(2023/9/11 張撮影)(右)

3-8-3. 農村舞台

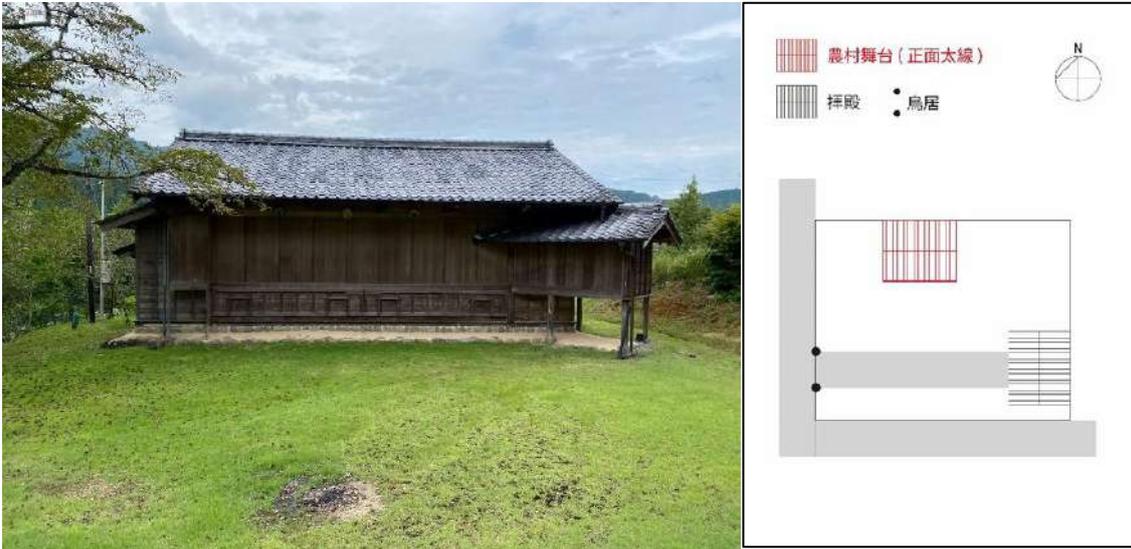


図 3-8-3-1 農村舞台の外観(2023/9/10 口石撮影)(左)

図 3-8-3-2 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①鎌瀬農村舞台(鎌瀬集会所)
 - ②山神社
 - ③集落内で標高が高いところ、山の上方に立地。
 - ④農村舞台の配置(図 3-8-3-2 参照)
 - ⑤平舞台形式
 - ⑥平成9年度より、毎年10月下旬に、愛生森林美術館の主催で人形浄瑠璃公演が開催されている。(https://www.awanavi.jp/archives/spot/2820)
- 礎石をモルタルで固めたのが最近であることがわかり、また保存状態も良いため現在も利用されていると推定する。
- ⑦葺張の構造
 - ⑧拝殿の正面を農村舞台正面が貫通していない。礎石をモルタルで固められているのが印象的だった。

3-8-4. 信仰

集落上方に位置する山神社を訪れた。

・山神社

(境内)

本堂、農村舞台、小祠が存在する小規模な神社であった。境内は雑草も繁茂しておらず、芝生が綺麗に管理されていた。

(建築)

本堂は他集落に多く見られた流造とは異なり、小規模な宝形造であった。

(その他)

農村舞台には「平成三年度 水力発電施設周辺地域交付金施設 鎌瀬集会所」と書かれた立札が掛けられていた。

3-8-5. 行事

鎌瀬農村舞台は、平成3年に再建された県内で最新の農村舞台の一つである。

平成9年から、相生森林美術館は人形浄瑠璃公演を鎌瀬農村舞台に開催されている。

3-9. 大久保

3-9-1. 生業

本項は、調査4日目（2023年9月12日）に行った前田やすお氏へのヒアリングをもとに記述したものを多く含む。

【農業】

・稲作を行っているところも少なからずあるが、集落の山際（外側）では、サルや鹿が野に降りてくるなど被害がひどいため、稲作より、非食用の植物の栽培などを行っている。例えば、前田氏は高く売れることや消毒などがいらず、作業が楽なことから黄金ヒバを育てている。

・動物対策として畑のまわりにしきびやあけびといった毒性のある植物を植えている。その他魔除けとしてか、鹿の角が欠けてある場所もあった。

・その他にお茶、ケイトウ、おもと、あわ、ヒマワリ、シャクヤク、フリージアが大字内で育てられている。

【狩猟】

動物をとらえて役場に報告すると、お金がもらえる。山際には、動物用のわなのかごがあった。

【インフラ】

・太陽光パネルが幾つかの休耕地に設置されている。

・関西に本社のある「エコスタイル」という会社の事業であると記された看板があったが、運転開始を過ぎているのにも関わらず、設置すらされていなかった。



図 3-9-1-1 黄金ヒバとそれを囲むネットと魔よけの鹿の角@那賀町大久保（2023/9/12 戸田撮影）

図 3-9-1-2 未着工の太陽光パネル設定予定地の看板@那賀町大久保（2023/9/12 呉撮影）

3-9-2. 民家

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

大久保は扇形蛇行によってできた O 型の平野部をすっぽり覆う集落である。南側に那賀川が流れ、那賀川に沿って通る国道 195 号線に面する土地には街路村があり、高密度に民家が立ち並ぶ。一方で山のある北側へ平野部を登ると、横石のような離散的な配置を持った民家群が現れる。基本的には民家は南東向きに正面を持つが、南西方向の斜面の集落や、街路の方向に正面を持つ民家などは、南東よりやや正面がずれる。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

横石と同様に、築年数の経っている建物のみならず、新築もサイディングなどのメンテナンスのしやすい素材を利用するのではなく、縦張りが綺麗に残っている。これも他集落と同様、一重張りの板壁は平地では神社以外に見られない構法だと考えられるので、この地域一帯を特徴づけるものだと考えられる。

・祖谷型民家の分類

これも横石と同様に一軒一軒が石垣に囲まれて、付属屋もあることから祖谷型配置の可能性はあるが、山地に囲まれて敷地が少ない制約を受けて直列的に母家と付属屋が並ぶ構成とは異なり、敷地は侵食谷の中に比較的自由的な位置に配置されているため母家と付属屋が並列的な関係を持っている民家も数戸あった。

・牛小屋の転用事例

この地域では詳しく検討できなかった。



図 3-9-2-4 主要道路から離散的な配置の二階建て木造民家(2023/9/12 戸田撮影) (左)

図 3-9-2-5 道に垂直に正面を持つ大きな生垣を持った木造民家(2023/9/12 戸田撮影) (右)

3-9-3. 農村舞台



図 3-9-3-1 集会所の外観(2023/9/11 口石撮影)(左)

図 3-9-3-2 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①大久保集会所
- ②蛭子神社
- ③集落内に立地、一部森に隣接している
- ④農村舞台の配置(図 3-9-3-2 参照)
- ⑤集会所のためなし
- ⑥建物が比較的新しく、現在でも利用が推定される。
- ⑦集会所が鳥居と参道に隣接しているが、集会所の入口は参道に向いているわけではなく、鳥居と同じ方角に向いている。

3-9-4. 信仰

集落中央部に位置する蛭子神社を訪れた。また、事前調査でも存在が判明していなかった新四国八十八ヶ所を発見した。

・蛭子神社

(境内)

参道は谷を下って再び登るように一直線に伸びていた。参道の右手には池が存在した。本殿、拝殿、八幡神社などの複数の境内社が存在した。

参道入口の鳥居の手前にある広場に、公民館、地神塔、宮司の名前を記録する石碑、百度石、安永期の石灯籠が存在した。境内は雑草も繁茂しておらず綺麗に管理されていた。

(建築)

本殿は流造で、精巧な彫刻が施されていた。本殿には鉄骨造の覆屋が架けられていた(図 3-9-4-1)。

・新四国八十八ヶ所

(位置)

蛭子神社よりも南方に位置する切断蛇行の丘に位置していた。

(概要)

丘の林の小道に一定間隔で石仏が置かれていた(図 3-9-4-2)。各石仏には制作者の氏名が彫刻されていたが、年代は不明であった。小道は草木に覆われてはおらず、比較的外観が新しい木造の小祠も存在した。現在でも信仰場所として機能していることが伺われた。



図 3-9-4-1 蛭子神社本殿の覆屋@那賀町大久保 (2023/9/11 戸田撮影)

図 3-9-4-2 新四国八十八ヶ所@那賀町大久保 (2023/9/11 戸田撮影)

3-9-5. 行事

当集落においては調査を行っていない。

3-10. 延野・入野

3-10-1. 生業

本項は、調査 3 日目（2023 年 9 月 11 日）に行った湯木氏（八坂神社近辺に居住の男性（年齢確認できず））と赤松氏（入野在住の 75 歳男性・文字起こしなし）へのヒアリングをもとに記述したものを多く含む。

【農業】

- ・関西方面の華道の名家の依頼でおもといわれる正月の生け花のかざりを 60 年前産業として作りはじめ、現在も一大産業として一体に黒いシートを被った畑が広がっている。（華道の名家との関係性に関して詳細は不明）
 - ・ゆずの木の足元や墓の前ぎりぎりにうえられているなど所せましとおもとが植えられている。
 - ・ほかに、ケイトウ（仏花の一種）、ハランという植物も栽培しているが、ずっと同じ作物を栽培していると土壌がアルカリ土壌となり、育ちが悪くなるので稲作をして、リセットするといった輪作を行っている。
 - ・棚田や段々畑の規模が比較的大きく、圃場整備も行き届いている。
 - ・水田の転作物として、すだちの栽培も少なくない。
- ほかに茶畑や相生ゆずの栽培もおこなわれている。
- ・赤松氏の家の裏にも田んぼがあったが今は使っていないという。周りの田んぼも業者に委託しているものが多く、使っていないものは業者にも見放された地であるという。



図 3-10-1-1 ゆずの木の足元におもとが栽培されている様子@那賀町延野
（2023/9/11 呉撮影）（右）

図 3-10-1-2 赤いケイトウの栽培の様子@那賀町延野（2023/9/11 呉撮影）（左）

【林業】

・赤松氏よりあいかわ（鮎川のものであると考えられたが場所の関係上、ちがうことが予想される。）に水源地があり、そこから水を獲得するため、木を刈りとった場所があったとの情報を得た。しかし、詳しい水の獲得方法はわからなかった。しかし、ため池があることから水をそこから引いていたことは推定できる。

・近年では行政が上述の場所を公園とするために桜の木を植樹し、車が通れる道を整備している。白い旗が植樹の目印。

・現在では、木材を刈ってもお金にならないため間伐などを行っても、番茶を炊き出すために使うくらいしか使い道はない。



図 3-10-1-3 公園整備前の森林伐採跡地@那賀町入野 (2023/9/11 戸田撮影)

【商業】

・まるい旅館や22時まで営業している前田フードがあるなど阿南驚敷日和佐線沿いは那賀町の中心部分であると考えられる。

3-10-2. 民家

・集落内における家屋配置・建築形式の傾向

横石同様那賀川の扇形蛇行の跡地で、楕円を描くように広がる細い平地にある集落である。この楕円の平地は東西に長く引き伸ばされるような形状をしており、他の扇形蛇行と比較しても規模が大きいことから世帯数がかなり多い。また大字によっても集落構成が異なるので、延野・入野と牛輪・鮎川の3つに分けて報告する。

延野に関しては4つの大字内で最大の規模を誇り、扇形蛇行の南側一帯に広がる。那賀町相生庁舎があり、JA アグリあなん相生支店や延野郵便局や相生小学校、薬局など、この地域の生活拠点となる施設が多く配置されており最も賑わいのある地域である。小字王子や大原には主要道路である国道195号線から派生した自動車一台分の幅の道が入り組み、その中に密集した比較的新しい民家群が立ち並んでいる。アパートや陸屋根二階建ての鉄筋家屋もよく見られ、現代に至るまで集落の更新が見られる地域である。一方で山の方に入った熊谷や北ノ谷には延野城址や延野農村舞台などがあり、延野のかつての集落の中心地点が今と異なることがわかる。延野と入野は網目状に道が張り巡らされ、民家がその中で点在している。切妻屋根二階建て平入が殆どで、正面は南東向きである。二階建ての付属屋がつく家が多いが、中には付属屋が陸屋根鉄筋二階建てのものもある。

うってかわって牛輪・鮎川は平地が狭く道も一本に絞られているため、民家もその道に沿って並んで展開されている。こちらも延野・入野と同様で切妻屋根二階建て平入が多いが、特殊なのは鮎川は建物の正面が南東ではなく南西である。これは絶対的な方位に基づいた配置ではなく、正面の道に沿うように作られた相対的な配置である。牛輪は他集落と同様に南東が正面である。

・長大材の利用

この地域では詳しく検討できなかった。

・木板張りの張り方

大字延野小字大原や大字延野小字王子にはサイディングなど現代的な資材を用いた家屋が多く、また集落のかつての中心地であった大字延野小字熊谷にも同様の家屋が点在するが、新築でもこの地域一帯でよくみられる縦張りをを用いた家屋が確認できるのであり、伝統的な景観が今もなお継続していると言える。

・祖谷型民家の分類

戸数が多い為より詳細な調査が必要だが、この地域一帯の扇形蛇行は平地の部分が多く、石垣で囲っていない民家も多いので、祖谷型の配置は見られないと考える。

・牛小屋の転用事例

この地域では詳しく検討できなかった。

3-10-3. 農村舞台



図 3-10-3-1 農村舞台の外観(2023/9/11 口石撮影)(左)

図 3-10-3-2 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①延野農村舞台
 - ②八坂神社
 - ③道路の小道から外れた人目のつかないところに立地
 - ④農村舞台の配置(図 3-10-3-2 参照)
 - ⑤平舞台形式
 - ⑥ヒアリングによると、年に 3 回お祭りが境内で行われているが、農村自体の利用はない。
 - ⑦鳥居の前に備える榊などの樹木を境内のすぐそばで栽培している。
- 農村舞台周辺に資材置き場は確認できなかった。

3-10-4. 信仰

延野では萬福寺及び延野農村舞台を有する八坂神社を訪れた。また豊後神社と檜王神社という小規模な神社を訪れた。

・萬福寺

(境内)

前面道路よりも 5m 程度情報の造成地に存在した。本堂、地藏堂、鐘楼、住職の住居、蔵、墓地、供養碑、その他付属建築物が存在した。

(建築)

本堂は安政元年(1854)建立の四方蓋造であった。境内内で最も古い建物は 250 年前の鐘楼であった。門は大正期に建てられたもので、コンクリート製の柱に鑄鉄製の洋風のアーチが掛けられていた。地藏堂は 30 年前に建てられたもので、バブル景気の恩恵で建てられたとの話であった。

(その他)

萬福寺は 2021 年の調査時にも訪れたが、今回も住職にヒアリングを行った。寺は 800 年前の創建と伝わり、450 年前の棟札が現存している。檀家数は 300 程度で、延野よりも上流部に居住している人々が多いとの話だった。

萬福寺は、後ろの林を持っていて、木の整備は住職や総代自身で行っている。

・八坂神社

(境内)

畑の裏に位置し、前面道路からは木に隠れていた。鳥居の手前の広場に農村舞台が存在した。石段を登った先に本殿と境内社が存在した。

境内は林に囲まれており、農村舞台は老朽化していたが、雑草等は繁茂しておらず、鳥居には榊が括られていた。

(建築)

本殿は流造で、拝殿が付属していなかった。敷地奥行き都合からと考えられる。

・豊後神社

(境内)

道路に面する小規模な境内であった。鳥居と本殿、石灯籠が存在した。境内内は落ち葉が散乱していたが、雑草の繁茂は見られなかった。

(建築)

本殿は拝殿を持たない切妻平入の小祠であった。

・**樫王神社**

(境内)

鳥居と本殿、拝殿、複数の境内社、石灯籠が存在した。境内内に雑草の繁茂は見られなかった。

(建築)

本殿拝殿は流造の小祠であった。

入野では神社と無関係の位置に地神塔を発見することができた。

・**地神塔**

(位置)

集落西方の溜池横の農地に存在した

(概要)

石灯籠と注連縄を張るための柱が付属していた(図 3-10-4-1)。地神塔の 100m ほど北方には金刀比羅神社が存在したが、特に連続性は見られなかった。



図 3-10-4-1 龍王神社の石造の台座@那賀町延野 (2023/9/12 戸田撮影)

3-10-5. 行事

かつて相生町、合併後の那賀町の行政中心であり、交通の便が良い要所として、現在、多くのイベントが延野周辺で開催されている。

その中でも比較的定期的なのは、町役所が主催し、県道に沿った新春マラソン大会や、町役場の南に那賀町林業ビジネスセンターで開催される夏祭りなどのイベントです。

相生町誌（平成十七年）より：

「延野地区では、王子神社や万福寺、白心大明神等は初詣客が多い。最近、林道が完成して便利になり、夜明け前に金比羅神社や大滝神社へ上りご来光を拝む者も多い。」

10 年前ぐらいに新聞報道より：

毎年春の際に相生緑茶生産組合は「一番茶摘み」の活動を開催するけど、近年はそんな報道または情報はネットで見つからなかった。

3-11. 牛輪・鮎川

3-11-1. 生業

【農業】

- ・緑茶生産組合があり、阿波番茶の生産をしている。そのため茶畑も多い。
- ・国費などを使い、6.77ha ほど圃場整備が平成五年に行われている。
- ・稲作やケイトウの栽培もおこなわれている。



図 3-11-1-1 牛輪圃場整備記念碑の記録@那賀町牛輪 (2023/9/12 戸田撮影) (右)

図 3-11-1-2 茶畑と阿波番茶の看板 (宮口園) @那賀町牛輪 (2023/9/12 戸田撮影) (左)

【林業】

- ・谷内川の分岐地点に平井製材所があり、そとに樹径がばらばらの丸太が集積されているのを確認した。
- ・谷内川の河口付近的那賀自動車の隣には、津川製材があり、外に丸太が置いてあり、施設内で製材し、そのものを集積していた。



図 3-11-1-3 平井製材所の丸太集積の様子 (2023/9/8 塚原撮影) (右)

図 3-11-1-4 津川製材の丸太集積の様子 (2023/9/8 塚原撮影) (左)

3-11-2. 民家

当集落においては調査を行っていない。

3-11-3. 農村舞台・行事

当集落においては調査を行っていない。

3-11-4. 信仰

牛輪では大宮八幡神社を訪れた。また独立した地神塔を発見した。

・大宮八幡神社

(境内)

境内の規模は大きく、本殿を囲むように円形の幅広の道が整備されていた。

本殿、拝殿、宝物殿、多数の境内社、公民館が存在した。本殿から離れた位置にも複数の境内社が存在した。境内は砂利敷で綺麗に管理されており、車の通行した跡があった。境内内には暗渠の水路が通っており、一部水が漏水していた。境内外には溜池が存在した。

(建築)

本殿は流造であった。

(その他)

本殿裏の道には何も載せられていない台座が存在した(図 3-11-4-1)。側面には「昭和五十年十月」の刻印と奉納者名の刻印がなされていた。

・地神塔

(位置)

地神塔は集落西部の、入野との大字境界付近の農地内に独立して存在した。

(概要)

灯籠と注連縄用の柱が付属しており、栄養ドリンクの供物が置かれていた(図 3-11-4-2)。

鮎川集落においても地神塔位置を調査した。現地居住者へのヒアリングによると、農地内に存在するとの話であったが、発見することができなかった。



図 3-11-4-1 大宮八幡神社の石造の台座@那賀町牛輪 (2023/9/11 戸田撮影) (左)

図 3-11-4-2 農地内の地神塔@那賀町牛輪 (2023/9/12 戸田撮影) (右)

3-12. その他の集落調査事項

3-12-1. 伝統林業に関する現代行事

かつて那賀川の上流で木材を運ぶ手段として行われていた伝統的な「一本乗り」の技術を後世に伝え、地域の活性化を促進するために、近年ではいろいろな行事が生み出した。

1. 木頭杉一本乗り

(時間)

1985 年から、毎年夏中（今年は第三十三回）

(地点)

那賀町木頭和無田(木頭診療所前の河川)

(内容)

大会や講習会が行われている。一本乗り大会は通常 8 月初めに行われ、講習会は夏季に隔週で開催された。技術認定は初級から上級まであり、方向転換、歩行、切り返し、漕ぎ、立ち上がり、荒瀬越えなどが練習される。

(道具) 丸太：長さ 4 メートルで、直径は 20cm から 30cm ほどの木頭杉の丸太、一本乗りの基本道具として使われ、その名の通り、一本の丸太に立って操作する。

鳶口（トビ付き竹竿）：約 3 メートルの竹竿の先に金属製の鉤（トビ）が付いている。この道具は丸太を制御し、引き寄せるために使用された。講習会に参加する際は、安全を考慮してトビのついていない竹竿を使用する。

2. 丸太走り

(時間)

2021 年から、毎年夏中（今年は第三回）

(地点) 朴野、大久保の境界線としての紅葉川橋付近水域

(内容)

地元木頭杉の「丸太」16 本ぐらいに繋がっていた（1 本は四メートルぐらい）、全長は約 65 メートルの狭い道で、丸太の上での走行距離と速さを競うこと。参加者は安全を確保するために、ライフジャケットとヘルメットを着用し、丸太の上でバランスを取りながら走行する。多くの参加者が途中で転倒して水中に落ちるが、中には最後まで競技を達成した人もいる。



図 3-12-1-1 木頭杉一本乗り（出典：木頭杉一本乗り大会公式 Facebook、2023 年）（左）

図 3-12-1-2 丸太走り@那賀町紅葉川（2023/9/11 張撮影）（右）

3-12-2. 平野小学校・拝宮和紙

1. 平野小学校

2001年に廃校となった。長らく使われていなかった校舎の教室が3年前から地域おこし協力隊事務所として再利用されて、たまにイベントを行う。今年の6月8日から、公民館らしい地元図書室として再利用。人々の休憩とか、話し合いとか、地域の交流を目指している。

開室日：毎週火・木曜 9～16 時/第二・四土曜日 9～12 時



図 3-12-2-1 旧平野小学校上空(2023/9/13 張撮影)(上左)
図 3-12-2-2 旧平野小学校木造校舎正面(2023/9/13 張撮影) (上右)
図 3-12-2-3 ひらの図書室外観(2023/9/13 張撮影)(下左)
図 3-12-2-4 ひらの図書室室内(2023/9/13 張撮影)(下右)

2. 拝宮和紙

拝宮手漉和紙工場の職人の中村功氏は1976年で廃校となった轟小学校を工房として開設し、現在も小学校より下流500mにある中村氏自身の敷地でその生業を続けている。



図3-12-2-5 拝宮和紙工場(2023/9/12 張撮影)(左)

図3-12-2-6 拝宮和紙展覧会チラシ(2023/9/11 現地にて獲得、張スキャン)(右)



以下は、調査3日目(2023年9月11日)に行った拝宮手漉和紙工場の職人である中村功氏へのヒアリングをもとにまとめたものである。

【拝宮和紙】

- ・昔から拝宮で作られる紙は拝宮紙と呼ばれ、昔から冬の間は主に障子紙を作っていた。夏は、山仕事や田んぼを耕していた。
- ・現代において障子専業では成り立たずかつての同業者が廃業していく中、中村氏は和紙を用いた芸術作品の制作によって現在もその生業を存続させている。
- ・漉いた紙は外で乾かすので。雨が多いと仕事にならないという。
- ・一枚の紙を作るのには仕込みにかかる時間は長いですが、漉き始めたら早い。
- ・紙を作るための道具は作る人がいないため、中村氏自身で作成している。

【工房について】

- ・1976年に廃校となった轟小学校を工房として開設した。その後の阪神淡路大震災前に中村氏らで建設。木造軸組の二階建てで、大工はひとりのみでその他は素人によるものだった。
- ・建設期間は、大工が入ったのが4、5月で完成が11月頃。朝の段階では建前(柱を立てること)であったが、夕方にはトタンまで葺き終わっていたこともあった。もうそのような時代は終わったが、皆が建設の段取りを知っていた。
- ・使われた木材は工房の前の山から切り出して、トラックで運んで製材所で挽いてもらった。
- ・柱などの構造材はしっかりしたものを使っている(5寸(15cm))。

3-12-3. 選定大字以外の農村舞台

1. 井ノ谷集会所、拝宮農村舞台

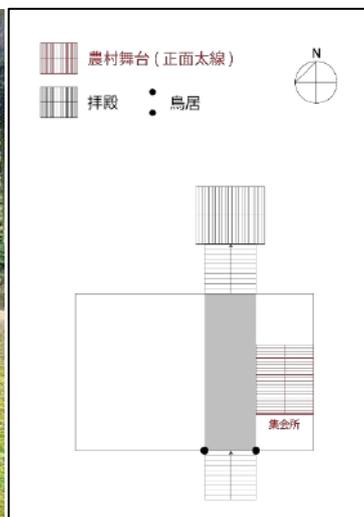


図 3-12-3-1 集会所の外観(2023/9/11 口石撮影)(左)

図 3-12-3-2 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①井ノ谷集会所、拝宮農村舞台
- ②白人神社
- ③標高高い、集落の一番奥に立地。
- ④農村舞台の配置(図 3-12-3-2 参照)
- ⑤集会所のためなし。
- ⑥建築物は比較的新しく、現在も利用が推定される。
- ⑦集会所であるが、農村舞台と同じように平入側に家紋が掲げてあった。

2. 八面農村舞台

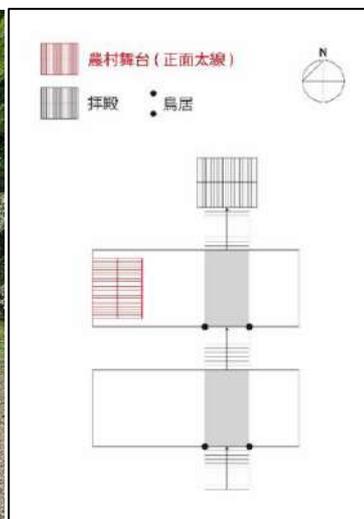


図 3-12-3-3 農村舞台の外観(2023/9/11 口石撮影)(左)

図 3-12-3-4 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①八面農村舞台
- ②八面神社
- ③周辺に集落を確認できず、位置関係不明、川沿いに立地。
- ④農村舞台の配置(図 3-13-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥農村舞台の保存状態が良く、また新しく増築している箇所を確認できた。現在も利用されていることを推測できる。
- ⑦境内が階段によって2か所に分かれており、上方側に農村舞台はその立地を確認できた。

3. 辺川農村舞台



図 3-12-3-5 農村舞台の外観(2023/9/11 口石撮影)(左)

図 3-12-3-6 農村舞台の配置(口石作成)(右)

- ①辺川農村舞台
- ②邊川神社
- ③川沿い、集落に隣接
- ④農村舞台の配置(図 3-14-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥腐朽が進んでおり、現在は利用されていないと推測される。
- ⑦鳥居から拜殿までの参道が直線ではなく、また農村舞台もそれらに斜めに面しているため、それぞれがお互いに規則的でない配置となっている。

農村舞台は現在利用されていないと推測するが、資材(瓦や木材)は他の農村舞台と比較して整理して残されている。それらは太夫座の下の空間に保管されていたり、また庇の下に渡してあったりと、農村舞台の外ではなく、農村舞台事自体に付加する形で残されているものが多い。

4. 谷内農村舞台



- ①谷内農村舞台
- ②蔭の宮神社
- ③川沿いに立地、神社境内に入るためだけに橋を渡る。
- ④農村舞台の配置(図 3-15-3-3 参照)
- ⑤大小2つの農村舞台があり、どちらも平舞台形式。
- ⑥どちらも腐朽が進んでおり、現在の利用はないと推測される。
- ⑦大小2つの舞台は互いに向かい合って立地し、それらは鳥居と拝殿を結ぶ参道に対して垂直に交わっていない。

大きい方の農村舞台は他の農村舞台と比較しても規模が大きく、対して右側側面の2階に付属小屋のようなものが見られた。また、資材は農村舞台周辺に置かれているものは確認できず、建物下部に入れられているのを確認した。

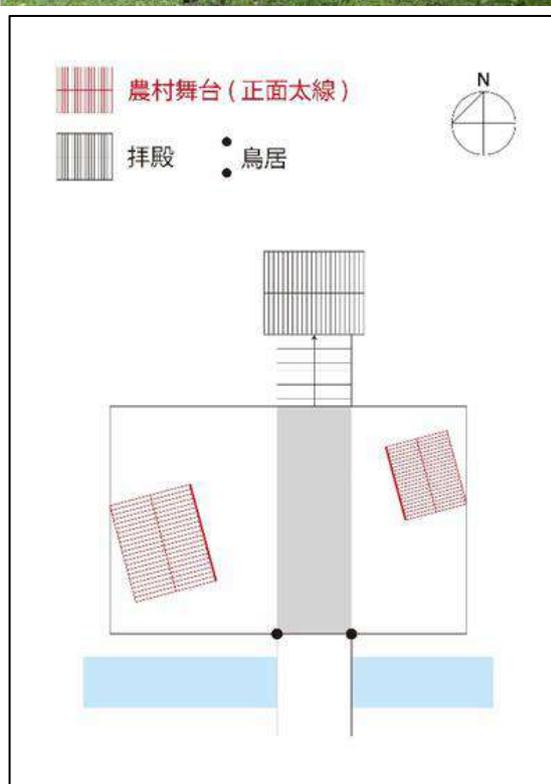


図 3-12-3-7 農村舞台の外観(2023/9/11 口石撮影)(左上)
 図 3-12-3-8 農村舞台の外観 2(2023/9/11 口石撮影)(右上)
 図 3-12-3-9 農村舞台の配置(口石作成)(左下)

5. 長安口農村舞台



図 3-12-3-10 農村舞台の外観(2023/9/11 二上撮影)(左上)

図 3-12-3-11 農村舞台の配置(口石作成)(左下)

- ①長安口農村舞台
- ②拝宮神社
- ③実地調査を行っていないため不明。
- ④農村舞台の配置(図 3-15-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥腐朽が進んでおり、現在の利用はないと推測される。
- ⑦資材(木材)が農村舞台前面に置いてある。

6. 轟農村舞台



図 3-12-3-12 農村舞台の外観(2023/9/11 二上撮影)(左上)

図 3-12-3-13 農村舞台の配置(口石作成)(左下)

- ①轟農村舞台
- ②轟神社
- ③実地調査を行っていないため不明。
- ④農村舞台の配置(図 3-16-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥腐朽が進んでおり、現在の利用はないと推測される。
- ⑦葎張の構造
- ⑧太夫座の上部に資材(木材)が置かれている。

7. 谷口農村舞台

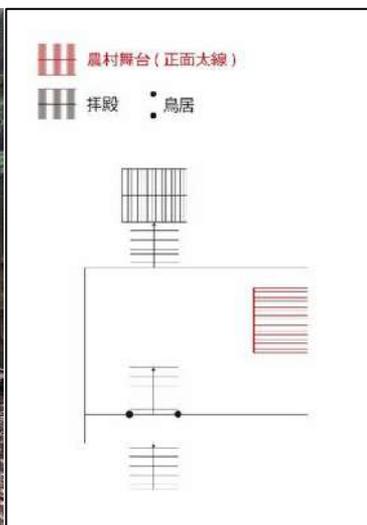


図 3-12-3-14 農村舞台の外観(2023/9/11 張撮影)(左上)

図 3-12-3-15 農村舞台の配置(口石作成)(左下)

- ①谷口農村舞台
- ②天満神社
- ③実地調査を行っていないため不明。
- ④農村舞台の配置(図 3-17-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥腐朽が進んでおり、現在の利用はないと推測される。
- ⑦太夫座を持ち合わせていない。農村舞台建物前面右側に資材置き場用の庇を持った空間がある。

8. 深森農村舞台

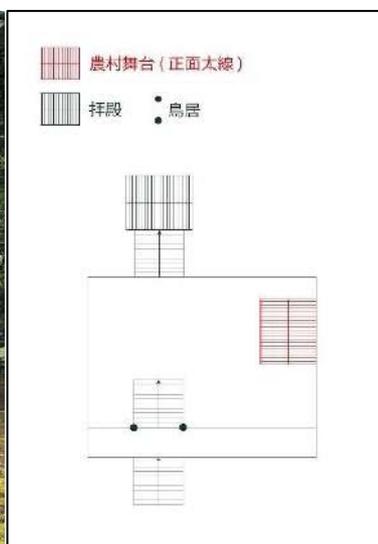


図 3-12-3-16 農村舞台の外観(2023/9/11 二上撮影)(左上)

図 3-12-3-17 農村舞台の配置(口石作成)(左下)

- ①深森農村舞台
- ②八幡神社
- ③実地調査を行っていないため不明。
- ④農村舞台の配置(図 3-18-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥腐朽が進んでおり、現在の利用はないと推測される。
- ⑦農村舞台前面右側に資材が置かれている。

9. 川俣農村舞台



図 3-12-3-18 農村舞台の外観(2023/9/11 張撮影)(左上)

図 3-12-3-19 農村舞台の配置(口石作成)(左下)

- ①川俣農村舞台
- ②礮神社
- ③実地調査を行っていないため不明。
- ④農村舞台の配置(図 3-19-3-2 参照)
- ⑤平舞台形式
- ⑥建物自体の腐朽は進んでいるが、建物を改築しつつ利用しているよううかがえる。
- ⑦農村舞台の建物側面に一部トタン等による増築、蛍光灯の付設、木材の継ぎ足し等が見られる。

第4章 ヒアリング・実測

4-1 那賀川における自伐型林業

4-1-1 はじめに

明治一戦後期における那賀川の林業は、その比較的高い資本蓄積の基に流域内木材生産構造及び流送過程（筏流・管流）を掌握していた下流製材工場主導で行われていた。しかし、戦後期から高度経済成長期にかけて、戦前期から進められていた上流域における道路敷設やガソリンの配給制の撤廃、長安ロダムの建設によって、木材輸送は流送から陸送へ転換して行き、それに伴い従来の流域内木材生産構造の在り方が変化することで、その主体は実際に木材生産を行う山元の林家側へ移り変わっていった⁴。

現在の那賀川における林業は主に森林組合主導で行われており、それに加え家族経営の林業が存在している。森林組合主導のものに関しては本機関が発行する資料などからその実態を読み取ることができる。その一方で、家族経営による林業の実態についてはあまり諸資料の発行及び研究が行われていない。

本調査ではそのような林業を行う橋本林業（徳島県那賀郡那賀町臼ヶ谷）の橋本忠久氏、橋本延子氏に聞き取りを行うことができた（2023年9月10日）。本聞き取りを通して得られた情報をまとめ以下に報告することで、その実態について記すと共に、令和における那賀川林業の一端を示すことで、歴史ある那賀川流域林業に関する今後の研究につなげていく。

4-1-2 橋本林業概要⁵

創設年：1979年（橋本光治氏らによる現在の橋本林業）

管理面積：110ha（人工林：88ha、自然林：22ha）

年間生産量：約150 m³

家族人数：6人

使用機材：3トンミニバックフォー、2トントラック、3トンフォワーダ、軽トラック

施業における特徴：多様な産出樹種、長大材産出が可能

⁴（四手井等、1969）より

⁵「橋本家「脱サラ・非皆伐が行き着いた自伐の道」（徳島県那賀町）」より

4-1-3 橋本林業の歴史

橋本家が林業を始めたのは明治時代から。明治初期における橋本家は農業や炭焼きの他に尾根道の入り口であった臼ヶ谷の立地を活かして商いを営んでいた。また、当時の橋本家当主であった宇太郎氏は手先が器用であり、「大工、鍛冶屋、鋳物師、時計修理など」の仕事もしていたという⁶。

そして、そのような仕事を通して蓄積された資本を元手に山を買い集め、明治30年頃から植林を始めたのが橋本林業の始まりである。購入した自然林は一度炭生産のために伐採し、その跡地にスギなどの植林がなされた。那賀川において一般的に植林が行われるようになるのは日露戦争後からであり、橋本家の人工林の成立は比較的早い時期になされ、木頭村の岡本家などと共に初期林地地主として認識されていた⁷。早い段階で林地取得が行われたため、飛び地の少ないまとまりの林地を確保することができ、現在もその形が継承されている。

そして、戦後期になり戦災復興のために国を挙げて木材生産の増強、スギ/ヒノキ造林地の拡大が進められる中、橋本林業は現在の自伐型林業に通じる山の環境を読み解き適材適所に造林を行う林業を推奨・実施していたという。このような施業体系は小学校農業科専科正教員の免許を持つ⁸橋本陰歳氏の下で行われ、混植による災害・虫害対策や、林地境界の周辺及び風当たりの強い場所（稜線・尾根）に天然林を残すことによる風害対策などが行われていた。

その後、光治氏の父の代においては一度林業を完全に業者委託の形で行うようになる。しかし、彼らの林業は択伐方式ではなく皆伐方式であり、それまでに積み重ねられてきた森林環境の存続を望んだ橋本光治氏は昭和53年(1978)に銀行員の仕事をやめ、現在の橋本林業を立ち上げることとなる。施業体系は橋本家の山作りを継承した自伐型の林業が展開されている。特に橋本林業の特徴として路網密度300m/haという高密林内路網が挙げられ、昭和58年から光治氏が教えを受けている大橋慶三郎氏の考え方の影響が大きいという。

また、現在橋本家は専業の林家ではなく、自伐型林業に関する講習や他の職種との兼業の中で林業を行っている。このような兼業体制について忠久氏曰く、橋本家におけるこのような体制は本家において林業が始まる明治初期から続くものであり、本来林業というものには兼業の中で存在しうる生業であるという。かつて林業だけで家計を回すことができる時代もあったが、そのような中で行う生きるための伐採は世情によって大きく影響され、山林環境の荒廃につながってしまう。かつて山林資源が貯金的であったことは、そのような林業という生業の根本的な特性を表しており、世情を見極め、最適な材を択伐方式によって産出・供給する現在の橋本家の林業はそのような思想の上で行われている。

⁶ (上那賀町、1982、p.2174)より

⁷ (四手井等、1969)より

⁸ (上那賀町、1982、p.2194)より

4-1-4 追加調査・橋本林業の林道

① 自伐型林業について

橋本氏が語るように、橋本林業が実践してきた経営方式は、林業における「自伐林業」に該当する。この「自伐林業」とはどのような林業経営の形態であろうか。

林野庁の発行する『林業白書』⁹では自伐林業に関して下記のように記述される。

「林業経営体数を組織形態別にみると、個人経営体は 82%（約 2.8 万経営体）と大半を占めるが、前回調査から大きく減少している。自伐林家については、明確な定義はないが、保有山林において素材生産を行う家族経営体に近い概念と考えると、2,954 経営体存在する。（林野庁、『令和 4 年度森林・林業白書』、2022 年 p. 83）」

上記引用文及び表 4-1-4-1 より、林野庁の定義による「自伐林業」とは、生産者自らが森林を所有して木材生産に従事する林業経営体であることが分かる。

その数は個人経営体(家族で経営を行っており、法人化していない林業経営体)の 1 割程度であり、林業従事者全体に占める割合は少ない。実際に『林業白書』内でも自伐林業に係る記述はごく少なく、一般的な経営形態では無いと言える。

表 4-1-4-1 林業経営体数の組織形態別内訳

	(単位：経営体)		
	林業経営体	素材生産を行った林業経営体	林業作業の受託を行った林業経営体
法人化していない経営体	29,080	3,745	1,326
個人経営体	27,776	3,582	1,236
法人化している経営体	4,093	1,861	2,000
民間事業体	1,994	1,182	1,211
森林組合	1,388	533	647
その他	711	146	142
地方公共団体・財産区	828	233	23
合計	34,001	5,839	3,349

注：法人化している経営体のうち、その他の中には、「農事組合法人」、「農協」、「その他の各種団体」、「その他の法人」を含む。
資料：農林水産省「2020年農林業センサス」

日本の森林所有者の多くは、育林や伐出を自ら行うことは少なく、多くは高度な技術や林業機械を有している森林組合(森林所有者の共同組合であり、販売のみでなく生産組織も担う)などの林業経営体に委託し、作業費を引いた分の利益を得るのが一般的である。自伐林業は森林所有者が自ら生産を行うことでこの委託を無くし、より利益率を高くした経営方式であるといえる。では実際、これによりどの程度高い利益が得られるのだろうか。

⁹ 林野庁、『令和 4 年度森林・林業白書』、2022 年

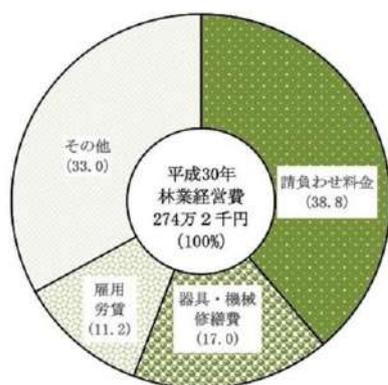


図4-1-4-1 家族経営体の林業経営費の構成割合

表4-1-4-2 家族経営体1経営体当たりの経常収支

区 分	単 位	平成30年	構成割合
保有山林面積	a	6,435	—
林業粗収益	千円	3,780	100.0
素材生産	〃	2,144	56.7
立木販売	〃	207	5.5
その他	〃	1,429	37.8
うち造林補助金	〃	648	17.1
林業経営費	千円	2,742	100.0
うち請負わせ料金	〃	1,065	38.8
器具・機械修繕費	〃	465	17.0
雇用労賃	〃	306	11.2
林業所得	千円	1,038	—

図 4-1-4-1 と表 4-1-4-2 は、平成 30 年の農林水産省の林業経営統計調査における、家族経営体(保有山林面積が 20ha 以上で、家族経営により一定程度以上の施業を行っている林業経営体であり、法人化されたものを含む)の経常収支の平均である。¹⁰

「林業粗収益」378 万円に対し、「林業所得」は約 104 万円である。経営費のうち最大の支出は「請負わせ料金」であり、約 107 万円である。

上記の収益のうち「造林補助金」が約 65 万円を占めており、これが差し引かれると、実際の林業所得は約 39 万円程度となる。

上記より、自伐ではない一般の家族経営による林業の利益率は、補助金を除くと 1 割程度であり、厳しい状況にあることが分かる。一方で、自伐として「請け負わせ料金」をなくしたとしても、補助金を除いた林業所得平均は約 146 万円であり、所得としては低い水準に留まる。このため自伐型林家の多くは兼業の体制を取らざるを得ない。

こうした林業の抱える厳しい経済的状況に対し、これまでは採算を合わせるための路網整備、機械化、列状間伐などのコストダウンが行われてきた。だが、より根本的な解決方法として、林家が販売する原木の価格を上昇させることが必要と語られることが一般的に多い。¹¹

木の価値を高めるためには、販売業者や工務店などの川下サイドによる商品価値の付与とともに、川上における質の高い木材生産が必要となる。質の高い木材生産には、念入りの選木、間伐、枝打ちといった、きめ細やかな森林管理が必要とされる。

こうした森林を作るためには、自らの所有する林地を、小規模経営で管理する自伐林家のあり方が適していると考えられる。

¹⁰ 農林水産省、『平成 30 年林業経営統計調査』、2019 年、(最終閲覧日 2023/12/6)

¹¹ 赤堀楠雄、『林ノ営ム: 木の価値を高める技術と経営』、農山漁村文化協会、2016 年、p.54-57

また一方で近年「自伐」という言葉に、アンチ大規模生産、環境保全型林業、地域振興、新たなライフスタイルという意味が込められ、自伐林業には上からの林業再編への対抗運動としての性質を帯びているとも指摘されている¹²自伐林業はこうした社会運動的な側面も持つと考えられる。

上記より、「自伐林業」の特徴を下記2項目にまとめることができる。

1. 現代の林業の収益率の低さの解決を目指した、高価値・高品質な木材生産を行うのに相応しい経営形態

2. 現代の林業の抱える構造的問題を解決するための社会運動的な側面を持っている

橋本林業はこの自伐林業に該当する林業経営を、どのように実践しているのだろうか。

② 大橋慶三郎の思想

橋本林業の経営方針は、忠久氏の父親である光治氏が教えを受けた大橋慶三郎氏の思想に基づくものである。

大橋慶三郎(1928-)は、大阪府の指導林家である。祖父の代に植林された千早赤阪村の山林を1949年に引き継ぎ、山林内に路網を自力建設した。その後独自の間伐法で森林を育成することにより、半世紀以上中間収穫を続けた。こうした経験を活かして多くの林家を指導した他、多数の著書を記している。¹³

大橋の森林づくりの基本となるインフラは、「高密林内路網」という密度の高い道路網である。大橋氏は247m/haの高い密度を持つ道路網を11年かけて自力建設した。こうした高密林内路網の役割については、次のようにまとめることができる。¹⁴([6]pp.50-53)

・道があることで森林へのアクセスと作業環境が良くなり、管理者が高頻度で森林を管理するようになる。

- ・間伐、択伐による中間収穫による高樹齢大径木施業の経営を容易にする
- ・平均集材距離を短くし、輸送工程の省力化、経費削減が可能となる
- ・森林火災発生時の初期消火に寄与する

こうした利点を持つ高密林内路網を整備することにより、1-2名の家族労働による簡易な作業を基本とした林業経営が可能になると大橋は語る。

大橋の著書に記される内容は、林業経営、ライフスタイルへの視点を含んだ広範なものであるが、その根幹となっているのは上述の「道づくり」の方法論である。橋本林業では大橋の方法論に基づいて建設された道路を実際に見ることができた。

¹² 佐藤宣子・興梠克久・家中茂、『林業新時代—「自伐」がひらく農林家の未来（シリーズ地域の再生/第18巻）』、農山漁村文化協会、2016年、p.1

¹³ 大橋慶三郎、『大橋慶三郎 道づくりのすべて』、全国林業改良普及協会、2001年

大橋慶三郎、『大橋慶三郎 道づくりと経営』、全国林業改良普及協会、2008年

¹⁴ 大橋慶三郎、『大橋慶三郎 道づくりと経営』、全国林業改良普及協会、2008年 p.50-53

③ 橋本林業の道づくり

ヒアリングを行った後、橋本林業の山林を実見した。

大橋の方法論に基づいて建設された橋本林業の高密度林内路網は、幹線と支線により葉脈のように構成される。今回は時間の都合上、幹線の一部のみを実見し、解説を伺った。

道路は斜面の一部を開削して造成することで作られていた。急な斜面の場合は丸太による造成が為されていた(図 4-1-4-3)。



図 4-1-4-2 ヒアリング風景。左奥から 2 人目が延子氏、3 人目が忠久氏。(2023/9/10 戸田撮影) (左)

図 4-1-4-3 丸太で造成された道路 (2023/9/10 戸田撮影) (右)

道路計画の基本的要点として、水の流路の計画が挙げられる。雨水が集中する箇所や、地下水の流路は容易に崩壊するため、地形や破碎線(断層で破壊された帯状または線状の土地)を分析しながら入念に計画がなされていた。実見した道路においては、極力道路を直行するように排水がなされていた(図 4-1-4-4)。やむを得ず道路と並行に流す場合も、道の端ではなく中央に水路が通され、緩やかなカーブや分散によって水勢を殺す工夫がなされていた(図 4-1-4-5)。



図 4-1-4-4 道路に直行した水路 (2023/9/10 戸田撮影) (左)

図 4-1-4-5 道路に平行の水路 (2023/9/10 戸田撮影) (右)

幹線で特に注意深く計画が為されていたのは、尾根に設けられたヘアピンカーブである。尾根部は集水面積が小さいため、大量の降雨により道路が崩壊する危険性が少ない。そのためこの箇所にヘアピンカーブを設け、道路の登坂高さを一気に上昇させることが合理的である。道路運用時にはこのヘアピンカーブを自動車で上り下りする必要があるため、曲率や勾配、道路のバンク角度(カーブの内側と外側の角度)の調整に試行錯誤しながら建設が行われた(図 4-1-4-6)。

また斜面の切取法面は、崩壊を防ぐため、植物の根系が土壌を掴む力とのバランスを見て建設されていた。植物の根の深さは 2m 程度のため、切取法面も 2m 以下に抑えられ崩壊のリスクを低減させていた。また法面に苔や草が生えていれば、土壌に水分が多く根がしっかり張って強固な状態であることを示しているとの話であった(図 4-1-2-7)。



図 4-1-4-6 尾根のヘアピンカーブ (2023/9/10 戸田撮影) (左)
図 4-1-4-7 斜面切取法面に生えた苔 (2023/9/10 戸田撮影) (右)

こうした道路網によって橋本林業の所有する山林はきめ細やかに管理されていた(図 4-1-4-8)。図中の大木の周囲に存在する細い木は樹齢 50 年程度であるが、大木を伐採すると日射が差し込みすぐに大きくなるという。樹木の密度の適切なコントロールによって、高品質な樹木を持続的に生産することが可能となっていた。



図 4-1-4-8 山林の様子 (2023/9/10 戸田撮影)

4-2 かつて筏師の宿泊した山間宿「木具屋旅館」

4-2-1 はじめに

かつて那賀川において流筏が盛んだった頃、各組の筏師達はその流送過程において、いくつかの決まった宿に宿泊していたという。本調査ではそのような宿の一つである木具屋旅館（徳島県那賀郡那賀町小浜）について、建物の一部実測及び現所有者で本旅館の経営者を母に持つ谷口幾美氏と元木頭森林組合長の藤田眞寛氏にヒアリングを行った（2023年9月11日）。これら獲得情報を基に、流筏終末期（戦後期） - 高度経済成長期における那賀川の木材輸送の中継地点であった山間宿の実態について以下に報告する。

4-2-2 木具屋旅館

○谷口家について

- ・木具屋の宿経営は主に谷口様の母が担っていた。
- ・父は持山で山仕事（育林・伐採など）を行い、林業を生業としていた。

○宿建築

- ・本宿は小浜の中で一番大きい宿であり、その建物は接続された三棟の平入民家（二階建て）と倉庫から構成され、急峻な当地域の等高線及び道に沿う形で細長い。
- ・主に二階を宿泊宿としていた。
- ・宿の規模としては雑魚寝で20人程度の宿泊者が泊まれる大きさであった。
- ・竣工年は東側のものほど古く、それぞれ昭和10年・昭和25年・昭和30年となっている。建物と道路の間にある庭の部分はかつて道であり、トラックが軒をかすめて通っていた。旧道の崖側は石垣が組まれていたが、道路拡幅に伴い建物と道の間に庭を設けた。
- ・本建築を構成する建材は周辺地域で産出されたものとなっている。周辺地域ではかつて建物を建てる際、設計・施工は大工に一任する一方で、材料に関しては大工から頼まれたものを施主自ら集めていた。土壁に使う土や柱・床板などに使う木材など。木材に関しては自家所有の山だけでなく、親戚の山から譲ってもらうこともあり、「是非、ウチの裏山にあるこの木を柱に使ってくれ」といったやり取りがあったという。

○宿泊者/利用者

- ・宿泊者は筏師以外にも製材会社の番頭や呉服商人、置き薬屋、白ケ谷の化石調査に訪れる学生などがいた。
- ・各筏師の組は決まった宿をいつも利用しており、木具屋は驚敷・百合の組が専属で宿泊していたという。また、番頭に関しては製材会社である「マルコ・イワキ・古庄¹⁵⁾」所属の人が宿泊していた。
- ・番頭の宿泊目的は当地域での木材の買い付けや雇用者（林業従事者）への賃金支払いであり、木具屋は下流製材業者と上流住民の経済活動を結び付ける役割があった。
- ・賃金の支払いは正月とお盆の年二回・一括払いで行われた。
- ・置き薬屋は遠隔地に拠点を置く人が複数存在し、岡山県総社市や奈良県などが挙げられる。
- ・また、宿泊の他に木具屋周辺の人達は、本宿を飲み屋として利用しており、各々が食材（山菜・鮎など）を持ち寄って炊事場に集まりお酒を飲んでた。常連客は農協・森林組合・役場の関係者で、各組合の役員会や役場議会終了時の慰労会に利用していた。
- ・特に各組合及び役場の職員らは毎晩来ており、その内の誰かが三日来なかったら心配したという。
- ・上述の賃金の支払い時期より、飲み代の支払いは正月とお盆に一括払いで行い、普段はツケだった。
- ・その他にも、農協・森林組合・役場では本宿に仕出しの依頼を行ったり、役員会などの開催場として利用したりしていたという。

¹⁵⁾ 古庄製材のこと



図 4-2-2-1 木具屋外観①・航空写真



図 4-2-2-2 木具屋外観②・内観



図 4-2-2-3 木具屋前面庭



図 4-2-2-4 木具屋旅館二階間取り図及びファサード

第 5 章 調査まとめ

5-1. 那賀川調査まとめ

本調査は林業という直接河川環境から影響を受け流域スケールで産業が展開される生業の視点から、流域内集落の分析及び比較を行うことで、より詳細な流域内環境の変化と集落の関係の在り方について明らかにすることを目的として掲げている。本章では1-4章までの調査結果・分析を基にそれらについて考察を行う。

○那賀川における流域林業と河川環境

本調査で獲得した資料を基に、那賀川流域における流域森林産業空間の在り方について研究を行った(塚原、2024)より、その流域スケールでの空間が「上流造林地帯・土場・中流造林地帯・下流製材工場地帯」から構成されていることが確認されている。また、それら空間は時間による変化の度合いに差が存在し、時代によってその場所が変化する上中流域の造林地と、比較的安定している土場・下流製材工場地帯から構成されていた。

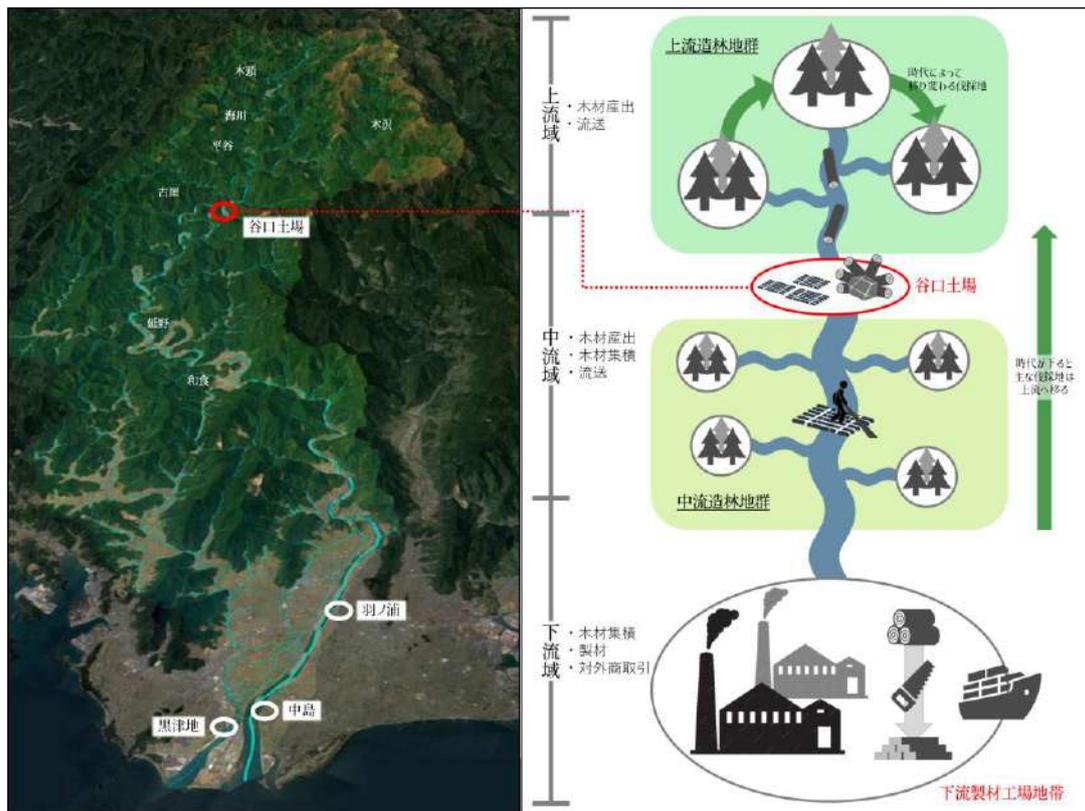


図 5-1-1 近代初期～戦後期の那賀川流域における流域森林産業空間

本調査における対象集落は上流造林地域に属する坂州、上流造林地域兼土場の小浜、中流造林地域に属するそれ以外の集落から構成されている。

結果として林業に関する各集落スケールでの空間的変遷は、上中流域と下流域での変化（山間部と平野部）では見られたものの、中流域－上流域の間では確認することができなかった。このような結果の要因としては、那賀川における森林産業が近世－戦後期まで下流製材業者・木材問屋を中心としたものであり、各集落と本産業が直接的に結びつきを持っていなかったことが挙げられる。また、林業を主な生業とする集落空間研究が盛んに行われる北山林業¹⁶では、高い付加価値を持つ小型の磨丸太を集約生産の下に行い、その育林－製材までの過程が一集落内で完結している。それに対して那賀川流域の林業は、用材生産に使われる一般的なサイズの立木から大径木を主な産出木とし、上－下流域のつながりの中でその産業が成立している。また、その造林地は集落の裏山だけでなく奥山まで広がりを持つため、その産業における空間的なスケールの在り方が異なっており、その点についても本結果の要因として挙げられるであろう。一方で、那賀川のような木材生産は北山林業の特殊な林業形態に比べ一般的なものであり、日本全国に存在する林業を主な生業とする地域を空間的に捉える上で、分析対象の空間スケールに対する示唆を含んでいる。

また、昭和 27 年における那賀川流域の木材生産¹⁷は、中流域において主に薪炭生産、上流域では主に用材の生産が行われていた。このような両者間の異なる森林利用は、各集落の裏山における林相及び森林景観に影響を及ぼしており、事前調査段階ではそのような空間の違いが考えられていた。しかし、結果としては確認することができず、その要因として戦後のエネルギー革命（1960 年代）や、木材価格高騰及び都市部への人口流出に伴う畑地の造林地化などの造林熱により、中流域の山林景観が杉造林の卓越したものに変わり、両者間におけるその差が急速になくなっていったことが挙げられる。

その一方で、那賀川流路中央部の大岩（ナカ石）を活用して木材集積を行っていた谷口土場とそれに隣接し宿町が発達していた小浜の空間では、河川環境との関わりの中から森林産業の空間が立ち現れている。また、谷口土場より上流の河道は筏の運航に適さない荒々しいものになっており、土場という産業空間が那賀川の河川環境と関係性を持って立ち現れ、また河川環境をそれ以前とそれ以後で二分する地点となっていることが確認された。今後他木材産出流域の分析を行う際もこの空間指標について検討を行っていきたい。



図5-1-2 網場として活用される谷口土場の中石
(木頭森林組合本所蔵)

¹⁶(独立行政法人国立文化財機構/奈良文化財研究所、2019)より

¹⁷(徳島県、1956)より

○現在の那賀川流域林業

また、現在の那賀川における林業は最盛期の戦後期からは衰退しているが、徳島県の林業プロジェクトによってその生産量は増加傾向にある。主な産業の担い手は森林組合であり、流域内の小規模林家の林地を対象に伐採を行い、産出した素材の販売まで行っている。その他に、橋本林業（臼ヶ谷）や岡田林業（旧木頭村）などの明治初期からの山元地主兼林業家による林業も確認することができる。特に本調査でヒアリングを行った橋本林業では自伐型林業が展開され、高密度林道網や適材適所に植えられたパッチワーク状の森林景観など、集落スケールでの林業空間が展開されていた。

このような現在の那賀川流域における林業の担い手において、かつて那賀川流域の木材生産の中心的立場であった下流製材業者の活動は見られない。彼らは木材輸入の完全自由化による木材価格の急激な下落や、戦前から戦後にかけての流域内陸路の発達に伴う山元林家主導の流域林業の展開などの諸要因によって、山元の所有林地を手放しながら規模を縮小し、現在は三枝などの数社にまで減少しているのがであった。



図 5-1-3 那賀町の林業労働力と素材生産量の推移

○山間部集落の住みこなしとその広がり

次に、第2-3章の各集落分析を基に那賀川流域内集落の特徴について考察を行っていく。まず集落内の民家・神社の配置に関して、民家は山裾に沿い、神社は尾根の先端などの高台に立地している集落が多く見られる（本論2章参照）。このような配置傾向は、今までの千年村研究ゼミで調査を行った数多くの集落においても確認することができ、水害などの要因から生まれる一般的な傾向である。

一方で、阿仁川調査などで見られた一集落全体を通して川辺から裏山へ「耕地-民家-神社」と並ぶ断面方向の各要素の配置傾向はあまり見られず、那賀川においては各集落がその基盤空間に合わせて各要素の配置がなされている。このような配置傾向の要因としては、下方向への浸食が激しく上中流域でV字谷が発達する那賀川流域において、集落と本流の接続が阿仁川などの他調査対象流域に比べ弱く、またそのような険しい環境に各集落が適応するように多様な形を取っていることが挙げられるであろう。

また、本流域の上中流集落はかつて焼畑を主な食糧生産方法として自給自足を行っていた。そのため、それら集落はかつて現在の航空写真などで見られる集落域より、裏山・奥山へ広がりを持っており、現在確認することができる集落域はそのような広がりの中におけるコア空間であった。本調査では扱うことができなかったが、このような広がりを持つ集落空間について分析を行うことができれば、より詳細な本流域における集落空間の特徴とその類型化を行うことができるであろう。本流域における造林業は焼畑農耕と強い関係性を持ち切畑地が造林地化しているため、GISを活用した集落と人工林分布の分析からそれに関する知見を得ることができるのではないかと。

○切断蛇行における集落空間

このように那賀川流域の集落には多様な形態が存在している。その一方で、本流域には蔭谷から延野にかけて複数の切断蛇行（延野・大久保・横石・蔭谷）による平地が見られ、これら地域・集落では共通の土地利用形態が見られた。

（耕地配置）

切断蛇行内集落において、ほとんどの耕地はかつて川底であった平地に位置している。一般的な平野はその後背地の山とそこから流れ出る水によって形成されているのに対して、本平地は山と水の流れによって形成されつつも、最終段階は地盤の隆起によって流路から離脱することで成立している。そのため、切断蛇行内の平地は後背地に山が存在しているにも関わらず水資源に乏しく、河川との接続部分から切断蛇行先端部分（切断蛇行平地部の中でも一番標高の高い場所。主にその形をΩで表した時の上端部）にかけてより乏しくなっている。そのため、先端部分の空間では畑作が卓越しており、茶や生け花に使われるオモト、仏花のケイトウの生産が行われ、オモトとケイトウに関しては共に全国有数の生産量を誇っている¹⁸。

¹⁸那賀町「イイ那賀暮らし 那賀の農業」

(神社配置)

次に神社の配置に関して、延野蛇行を除きそのすべての集落において切断蛇行先端部側の還流丘陵先端部に立地している。これらの神社には複数の境内社が祀られており、集落において主要な神社であったことが窺える。また、複数の集落を内包する延野蛇行においても還流丘陵先端部に豊後神社が立地しているが、蛇行内には他神社が複数存在しており、還流丘陵上にはその他に八坂神社が立地している。

(蛇行入口上流側の台地上の土地利用)

那賀川中流域における切断蛇行の成立とその地形的特徴について研究を行った(岡等、2001)より、その発達プロセスから切断蛇行地形においてその蛇行入口上流側には一部台地が発達する。このような台地は蔭谷・横石・大久保・延野すべての切断蛇行において確認することができる(2章微地形の項目参照)。そして、この台地空間は横石・蔭谷では養鶏場、大久保では太陽光発電、延野では小中学校や特別養護老人ホームなどの大規模な公共・福祉施設といったように、各地域・集落において水資源に乏しい平地適した利用がなされている。

上述した切断蛇行における土地利用を図としてまとめると図 5-1-4 のようになる。本空間是那賀川流域における一つの集落空間の在り方であると同時に、日本全国に存在する切断蛇行内集落の空間の在り方にまで展開できる可能性が考えられる。

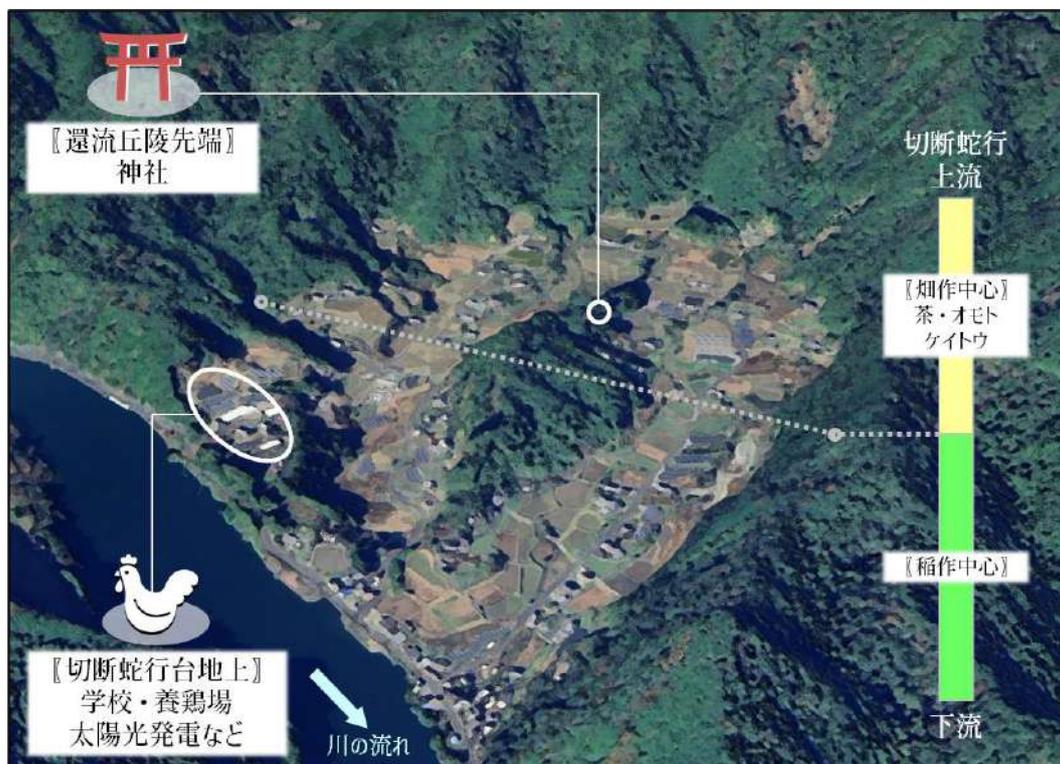


図 5-1-4 那賀川流域の切断蛇行における土地利用

図版出典・参考文献

〈図版出典〉

- 図 1-1：塚原作成
 図 1-2：塚原作成
 図 1-3：下図 (google map)、書き込み (塚原作成)
 図 1-4-1：(寒川) 戸田撮影、(長安口・鷺敷・大久保) 張撮影
 図 1-4-2：
 (上図) 背景 「google satellite」、河川ライン/流域枠 「国土交通省国土数値情報ダウンロードサイト」、仏像構造線ライン 「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2」を基に筆者作成
 (中図) 背景 「基盤地図 情報数値標高モデル」に筆者が着色、その他 上図に同じ
 (下図) 背景 「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2」、その他 上図に同じ
 図 1-4-3：「那賀川農地防災事務所 気候」より引用
 図 1-4-4：「木頭 (徳島県) 平年値 (年・月ごとの値) 主な要素」を基に筆者作成
 図 1-4-5：「木頭 (徳島県) 年ごとの値 主な要素」を基に筆者作成
 図 1-4-6：GPS ログをもとに張が作成
 図 2-1-1：
 下図：google satellite
 大字境界：「政府統計の総合窓口 (e-Stat)」の大字境界データ引用
 図 2-2-1：総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-2-2：下図 (google satellite)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、各市町村史を基に作成
 図 2-2-3：(大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-2-4：シームレス地質図 v2
 図 2-2-5：文化庁「坂州の舞台」、文化遺産オンライン、
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/160701> (最終閲覧 2023/11/25)
 図 2-2-6：Google Earth を基に作成
 図 2-2-7：図 2-3-6 と同じ
 図 2-2-8：農地利用 (農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、河川ライン (国土数値情報)
 図 2-2-9：図 2-3-8 と同じ
 図 2-2-10：図 2-3-9 と同じ
 図 2-3-1：総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-3-2：下図 (google satellite)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、神社プロット (塚原が google map・(四国地方整備局, 2009-18)、各市町村史を基に作成)、仏像構造線 (塚原がシームレス地質図 v2 を参考に作成)
 図 2-3-3：(大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-3-4：シームレス地質図 v2
 図 2-3-5：東京工業大学 真田純子 (撮影・所蔵)
 図 2-3-6：高田家 (那賀町水崎) 所蔵
 図 2-3-7：8：農地利用 (農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、河川ライン (国土数値情報)
 図 2-4-1：総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-4-2：航空写真 (google satellite)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、各市町村史をもとに作成
 図 2-4-3：(大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-4-4：シームレス地質図 v2
 図 2-4-5：『上那賀町誌』出版者 上那賀町, 1982.1 より引用
 図 2-4-6：「ニュース・ナカ パンフレット」 (最終閲覧日：2023/8/21)
<http://newsnaka.blog6.fc2.com/blog-entry-1389.html>
 図 2-4-7：農地利用 (農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、河川ライン (国土数値情報)
 図 2-4-8：google satellite をもとに二上が作成
 図 2-5-1：総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-5-2：下図 (google satellite)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、各市町村史を基に作成
 図 2-5-3：(大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-5-4：シームレス地質図 v2
 図 2-5-5, 6：google satellite をもとに農地利用 (農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020) を追記するなどして、若佐が作成
 図 2-5-7：相生町誌編纂委員会 編『相生町誌』(相生町, 1973), p637 を基に若佐作成
 図 2-6-1：総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-6-2：google satellite をもとに呉が作成
 図 2-6-3：(大日本帝国陸地測量部, 1907) をもとに呉が作成
 図 2-6-5, 6：google satellite をもとに農地利用 (農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020) を追記するなどして、呉が作成
 図 2-6-7：google satellite をもとに呉が作成
 図 2-6-8：「那賀町朴野・龍王神社祭礼 (2) 句づくりの里」 (最終閲覧日：2023/8/21)
<http://vinoshin.blog21.fc2.com/blog-entry-253.html> より
 図 2-6-9：相生町誌編纂委員会『相生町誌』(相生町, 1973) P604
 図 2-7-1：総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-7-2：航空写真 (google satellite)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、各市町村史をもとに作成
 図 2-7-3：農地利用 (農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線 (農林水産省, 2020)、河川ライン (国土数値情報)

- 図 2-7-4 : (大日本帝国陸地測量部, 1907) をもとに作成
 図 2-7-5 : シームレス地質図 v2 をもとに作成
 図 2-7-6 : 2023/9/11 二上撮影
 図 2-8-1 : 総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-8-2 : (大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-8-3 : シームレス地質図 v2
 図 2-8-4 : 下図(google satellite)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、神社プロット(塚原が google map・(四国地方整備局, 2009-18)、各市町村史を基に作成)、仏像構造線(塚原がシームレス地質図 v2 を参考に作成)
 図 2-8-5 : 農地利用(農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、河川ライン(国土数値情報)
 図 2-9-1 : 総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-9-2 : 下図(google satellite)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、農地利用(農林水産省 農地ピン)、河川ライン(国土数値情報)
 図 2-9-3 : 五万分一地形図剣山十号(共十二面)桜谷 明治四十年測図(大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-9-4 : シームレス地質図 v2
 図 2-9-5 : 下図(google satellite)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、農地利用(農林水産省 農地ピン)
 図 2-10-1 : 総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-10-2 : 総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-10-3 : 国土地理院より
 図 2-10-4 : Google MAP
 図 2-10-5 : 筆者撮影
 図 2-10-6 : 「阿波の農村舞台」(最終閲覧日: 2023/8/21)<https://nousonbutai.com/butai/d-4.html> より
 図 2-10-7 : Google MAP
 図 2-10-8 : 五万分一地形図剣山十号(共十二面)桜谷 明治四十年測図(大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-10-9 : シームレス地質図 v2
 図 2-10-10 : 下図(google satellite)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、農地利用(農林水産省 農地ピン)
 図 2-10-11 : 下図(google satellite)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、農地利用(農林水産省 農地ピン)
 図 2-11-1, 2 : 総務省実施の国勢調査統計データを編集して作成
 図 2-11-3 : 下図(google satellite)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、神社プロット(塚原が google map・(四国地方整備局, 2009-18)、各市町村史を基に作成)、仏像構造線(塚原がシームレス地質図 v2 を参考に作成)
 図 2-11-4 : (大日本帝国陸地測量部, 1907)
 図 2-11-5 : シームレス地質図 v2
 図 2-11-6 : 「[諸国漫遊@見聞ログ] (続) 写真する山旅人 20190526 山も畑も深緑カーペットにくるまれた〔那賀町牛輪地区〕 青葉眩しい茶処を散策ウオーク」(最終閲覧: 20230905)<https://blog.goo.ne.jp/okcorp38-2/e/56779f9a92ca07864d0524e8131a770b>
 図 2-11-7 : google street view より引用
 図 2-11-8 : (中谷礼仁研究室, 2021) より引用
 図 2-11-9 : 農地利用(農林水産省 農地ピン)、農業集落境界線(農林水産省, 2020)、河川ライン(国土数値情報)
 図 2-12-1/2/3
 下図: 国土地理院「基盤地図情報 数値標高モデル」標高データを朝日航洋株式会社「陰陽図メーカー」で編集
 建物・道: 国土交通省「国土交通省国土数値情報ダウンロードサイト」より引用
- | | |
|-------------------------------|--------------------------------------|
| 図 3-2-1-1 : 2023/9/9 塚原撮影 | 図 3-6-3-2 : 口石作成(右) |
| 図 3-2-1-2 : 2023/9/9 塚原撮影 | 図 3-6-4-1 : 2023/9/11 戸田撮影(右) |
| 図 3-2-1-3 : 2023/9/9 塚原撮影 | 図 3-6-4-2 : 2023/9/11 戸田撮影(左) |
| 図 3-2-2-1 : 2023/9/9 呉撮影 | 図 3-7-1-1 : 2023/9/10 張ドローン撮影 |
| 図 3-2-2-2 : 2023/9/9 呉撮影 | 図 3-7-1-2 : 2023/9/10 張ドローン撮影 |
| 図 3-2-2-3 : 2023/9/9 塚原撮影 | 図 3-7-2-1 : 2023/9/11 呉撮影(左) |
| 図 3-2-3-1 : 2023/9/9 口石撮影 | 図 3-7-2-2 : 2023/9/11 呉撮影(中) |
| 図 3-2-3-2 : 口石作成 | 図 3-7-2-3 : 2023/9/11 呉撮影(右) |
| 図 3-2-4-1 : 2023/9/10 塚原撮影(左) | 図 3-7-3-1 : 2023/9/10 口石撮影(左) |
| 図 3-2-4-2 : 2023/9/10 塚原撮影(右) | 図 3-7-3-2 : 口石作成(右) |
| 図 3-3-1-1 : 2023/9/10 呉撮影 | 図 3-7-4-1 : 2023/9/10 口石撮影(左) |
| 図 3-3-2-1 : 2023/9/10 塚原撮影(左) | 図 3-7-4-2 : 2023/9/10 口石撮影(右) |
| 図 3-3-2-2 : 2023/9/10 塚原撮影(右) | 図 3-8-2-1 : Google map より引用(2023年3月) |
| 図 3-4-1-1 : 2023/9/10 張撮影 | 図 3-8-2-2 : 2023/9/11 張撮影(左) |
| 図 3-4-1-2 : 2023/9/10 口石撮影 | 図 3-8-2-3 : 2023/9/11 呉撮影(右) |
| 図 3-4-1-3 : 2023/9/10 口石撮影 | 図 3-8-2-4 : 2023/9/11 塚原撮影(左) |
| 図 3-4-2- : 2023/9/10 戸田撮影(左) | 図 3-8-2-5 : 2023/9/11 張撮影(右) |
| 図 3-4-2-2 : 2023/9/10 戸田撮影(中) | 図 3-8-3-1 : 2023/9/10 口石撮影(左) |
| 図 3-4-2-1 : 2023/9/10 張撮影(右) | 図 3-8-3-2 : 口石作成(右) |
| 図 3-4-4-1 : 2023/9/10 二上撮影(左) | 図 3-9-1-1 : 2023/9/12 戸田撮影 |
| 図 3-4-4-2 : 2023/9/10 二上撮影(右) | 図 3-9-1-2 : 2023/9/12 呉撮影 |
| 図 3-4-4-3 : 2023/9/10 張撮影(左) | 図 3-9-2-4 : 2023/9/12 戸田撮影(左) |
| 図 3-4-4-4 : 2023/9/10 張撮影(中) | 図 3-9-2-5 : 2023/9/12 戸田撮影(右) |
| 図 3-4-4-5 : 2023/9/10 張撮影(右) | 図 3-9-3-1 : 2023/9/11 口石撮影(左) |
| 図 3-5-1-1 : 2023/9/11 戸田撮影 | 図 3-9-3-2 : 口石作成(右) |
| 図 3-5-1-2 : 2023/9/10 呉撮影 | 図 3-9-4-1 : 2023/9/11 戸田撮影 |
| 図 3-5-2-1 : 2023/9/11 戸田撮影 | 図 3-9-4-2 : 2023/9/11 戸田撮影 |
| 図 3-6-1-1 : 2023/9/11 戸田撮影 | 図 3-10-1-1 : 2023/9/11 呉撮影 |
| 図 3-6-1-2 : 2023/9/11 戸田撮影 | 図 3-10-1-2 : 2023/9/11 呉撮影 |
| 図 3-6-1-3 : 2023/9/11 戸田撮影 | 図 3-10-1-3 : 2023/9/11 戸田撮影 |
| 図 3-6-2-1 : 2023/9/11 戸田撮影(左) | 図 3-10-3-1 : 2023/9/11 口石撮影(左) |
| 図 3-6-2-2 : 2023/9/11 呉撮影(右) | 図 3-10-3-2 : 口石作成(右) |
| 図 3-6-3-1 : 2023/9/11 口石撮影(左) | 図 3-10-4-1 : 2023/9/12 戸田撮影 |

- 図 3-11-1-1 : 2023/9/12 戸田撮影
 図 3-11-1-2 : 2023/9/12 戸田撮影
 図 3-11-1-3 : 2023/9/8 塚原撮影
 図 3-11-1-4 : 2023/9/8 塚原撮影
 図 3-11-4-1 : 2023/9/11 戸田撮影 (左)
 図 3-11-4-2 : 2023/9/12 戸田撮影 (右)
 図 3-12-1-1 : 木頭杉一本乗り大会公式 Facebook、2023 年
 図 3-12-1-2 : 2023/9/11 張撮影 (右)
 図 3-12-2-1 : 2023/9/13 張撮影 (左上)
 図 3-12-2-2 : 2023/9/13 張撮影 (右上)
 図 3-12-2-3 : 2023/9/13 張撮影 (下左)
 図 3-12-2-4 : 2023/9/13 張撮影 (下右)
 図 3-12-2-5 : 2023/9/12 張撮影 (左)
 図 3-12-2-6 : 2023/9/12 張撮影 (右)
 図 3-12-2-6 : 2023/9/11 張撮影 (左)
 図 3-12-2-7 : 2023/9/11 現地にて獲得、張スキャン
 図 3-12-3-1 : 2023/9/11 口石撮影 (左)
 図 3-12-3-2 : 口石作成 (右)
 図 3-12-3-3 : 2023/9/11 口石撮影 (左)
 図 3-12-3-4 : 口石作成 (右)
 図 3-12-3-5 : 2023/9/11 口石撮影 (左)
 図 3-12-3-6 : 口石作成 (右)
 図 3-12-3-7 : 2023/9/11 口石撮影 (左上)
 図 3-12-3-8 : 2023/9/11 口石撮影 (右上)
 図 3-12-3-9 : 口石作成 (左下)
 図 3-12-3-10 : 2023/9/11 二上撮影 (左上)
 図 3-12-3-11 : 口石作成 (左下)
 図 3-12-3-12 : 2023/9/11 二上撮影 (左上)
 図 3-12-3-13 : 口石作成 (左下)
 図 3-12-3-14 : 2023/9/11 張撮影 (左上)
 図 3-12-3-15 : 口石作成 (左下)
 図 3-12-3-16 : 2023/9/11 二上撮影 (左上)
 図 3-12-3-17 : 口石作成 (左下)
 図 3-12-3-18 : 2023/9/11 張撮影 (左上)
 図 3-12-3-19 : 口石作成 (左下)
- 図 4-1-4-1 : 林野庁、『令和 4 年度森林・林業白書』、2022 年、p. 83 より
 表 4-1-4-1, 2 : 農林水産省「平成 30 年林業経営統計調査」(最終閲覧日 2023/12/6) <https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/rinkei/attach/pdf/index-1.pdf> の p. 1 より
 図 4-1-4-2 : 2023/9/10 戸田撮影
 図 4-1-4-3 : 2023/9/10 戸田撮影
 図 4-1-4-4 : 2023/9/10 戸田撮影
 図 4-1-4-5 : 2023/9/10 戸田撮影
 図 4-1-4-6 : 2023/9/10 戸田撮影
 図 4-1-4-7 : 2023/9/10 戸田撮影
 図 4-1-4-8 : 2023/9/10 戸田撮影
 図 4-2-2-1 :
 左図) 真田純子様提供
 右図) 国土地理院「空中写真 那賀郡那賀町 CS120191/C9/30/2019/09/26」より
 図 4-2-2-2 :
 左図) 2023/9/11 張撮影
 右図) 2023/9/11 張撮影
 図 4-2-2-3 : 2023/9/11 碓井撮影
 図 4-2-2-4 :
 間取り図)
 実測場所: 徳島県那賀郡那賀町小浜
 実測担当: 碓井・口石・呉・張・戸田
 実測日: 2023/9/10
 天候: 雨
 ファサード画像) 塚原撮影
 図 5-1-1 : (塚原、2024、p. 109) より引用
 図 5-1-2 : 木頭森林組合本所所蔵
 図 5-1-3 : 林野庁「那賀町(徳島県)からの報告」(最終閲覧: 20230904)
 図 5-1-4 : google earth に塚原加筆
 図 5-2-1 : 碓井作成

〈参考文献〉

〈文献資料〉

- ・ 四手井綱英・半田良一「木頭の林業発展と日野家の林業経営」(農林出版、1969)
- ・ 小原亨「阿波の川—水運と林業に生きた人たち—」(徳島教育印刷株式会社、1996)
- ・ 京都大学林業問題研究会「林業地帯」(高陽書院、1956)
- ・ 徳島県「那賀川流筏労働運動史」(徳島県労政課、1956)
- ・ 西田素康「相生町の用水路」阿波学会『阿波学会紀要第 N0. 47』(同、2001、p. 219-24)
- ・ 湯城豊勝「雨はどこで降るのか? 那賀川流域は雨が降りやすい地域であることを認識しよう!」『阿南商工会議所会報 ニュー阿南 vol. 273』、阿南商工議会、2015
- ・ 上那賀町「上那賀町誌」(上那賀町、1982)
- ・ 相生町誌編纂委員会「相生町誌」(相生町、1973)
- ・ 木頭村「木頭村誌」(木頭村、1961)
- ・ 十津川村史編さん委員会「十津川村史 地理・自然編」(十津川村、2021)
- ・ 角川日本地名大辞典編纂委員会「角川日本地名大辞典 36 (徳島県)」(角川書店、1986)
- ・ 日本建築学会「図説 集落 その空間と計画」日本建築学会(都市文化社、1989)
- ・ 稲垣栄三「住宅・都市史研究(山村居住の成立根拠)」(中央公論美術出版、2007)
- ・ 米家泰作「中・近世山村の景観と構造」(校倉書房、2002)
- ・ 米家泰作「日本・中近世山村の歴史地理学的研究」(京都大学学術情報リポジトリ、1998)
- ・ 藤田佳久「日本の山村」(地人書房、1993)
- ・ 福井勝義「焼畑のむら 昭和 45 年、四国山村の記録」(柘風社、2018)
- ・ 独立行政法人国立文化財機構/奈良文化財研究所「京都中川の北山林業景観調査報告書」(京都市、2019)
- ・ 児玉幸多「日本史小百科〈宿場〉」(東京堂出版、1999)

- ・半田良一「林業経営」(地球出版、1972)
- ・半田良一「日本の林業問題」(ミネルヴァ書房、1979)
- ・半田良一「資本制経済の発展と林業経営」林業経済学会『林業経済研究会報 1973 巻 81 号』(1973、p. 1-9)
- ・半田良一「林業経営と林業構造」林業経済学会『林業経済研究会報 1967 巻 Special 号』(1967、p. 18-20)
- ・林業経済学会「林業経済研究の論点—50 年の歩みから—」(日本林業調査会、2006)
- ・島田錦蔵「流筏林業盛衰史：吉野北山林業の技術と経済」(土井林学振興会、1974)
- ・赤堀楠雄「林ヲ営ム：木の価値を高める技術と経営」(農山漁村文化協会、2016)
- ・佐藤直子/興相克久/家中茂「林業新時代—自伐」がひらく農林家の未来」農山漁村文化協会『シリーズ地域の再生 第 18 巻』(同、2016)
- ・関岡東生「図解 知識ゼロからの林業入門」(家の光協会、2016)
- ・大橋慶三郎「大橋慶三郎 道づくりのすべて」(全国林業改良普及協会、2001)
- ・大橋慶三郎「大橋慶三郎 道づくりと経営」(全国林業改良普及協会、2008)
- ・農林水産省「平成 30 年林業経営統計調査」(同、2019)
- ・林野庁「令和 4 年度森林・林業白書」(同、2022)

- ・中谷礼仁、庄子幸佑、鈴木明世「〈千年村〉研究その 1：平安期文献『和名類聚抄』の記載郷名の比定地研究を用いた〈千年村〉候補地の抽出方法と立地特性に関する研究」日本建築学会『日本建築学会計画系論文集/87 巻 (2022) 791 号』(2022、p221-231)
- ・早稲田大学理工学術院創造理工学部建築学科建築史系中谷礼仁研究室千年村研究ゼミ「2021 年度千年村研究ゼミ阿仁川流域調査報告書」(同、2022)
- ・早稲田大学理工学術院創造理工学部建築学科建築史系中谷礼仁研究室「2021 年度高地・流域研究四国山地那賀川流域調査報告書」(同、2022)
- ・同上「2022 年度高地・流域研究中国山地高梁川・日野川流域調査報告書」(同、2022)
- ・塚原朋輝「日本の国内木材生産地域における産業空間とその広がりについて—那賀川流域における流域森林産業空間の実態分析—」(早稲田大学中谷研究室、2024)

〈WEB〉

- ・WEB 魚図書館『アマゴ』 (最終閲覧日：2023/11/2) <https://zukan.com/fish/internal664>
- ・木頭森林組合『林産販売事業』(最終閲覧日：2023/12/14) <http://www.kito-forest.jp/jigyou/>
- ・阿波の祭りと芸能「那賀町朴野・竜王神社祭礼(2) 句づくりの里」(最終閲覧日：2023/8/21) <http://vinoshin.blog21.fc2.com/blog-entry-253.html>
- ・那賀町「イイ那賀暮らし 那賀の農業」(最終閲覧 2024/2/19) <https://www.town.tokushima-naka.lg.jp/iju/work/agri.html>
- ・自伐型林業推進協会「橋本家「脱サラ・非皆伐が行き着いた自伐の道」(徳島県那賀町)」(最終閲覧：2023/09/04) <https://zibatsu.jp/person/hashimotofamily>
- ・農林水産省、『平成 30 年林業経営統計調査』、2019 年 (最終閲覧日 2023/12/6) <https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/rinkei/attach/pdf/index-1.pdf>
- ・気象庁「木頭(徳島県) 平年値(年・月ごとの値) 主な要素」(最終閲覧：2023/12/20) https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_amd_ym.php?prec_no=71&block_no=1352&year=&month=&day=&view=p1
- ・気象庁「木頭(徳島県) 年ごとの値 主な要素」(最終閲覧：2023/12/20) https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/annually_a.php?prec_no=71&block_no=1352&year=&month=&day=&view=p1
- ・気象庁「蒲生田(徳島県) 平年値(年・月ごとの値) 主な要素」(最終閲覧：2023/12/20) https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_amd_ym.php?prec_no=71&block_no=1242&year=&month=&day=&view=p1
- ・総務省「国勢調査 / 令和 2 年国勢調査 / 小地域集計 (主な内容：基本単位区別、町丁・字別人口など) 36：徳島県」(最終閲覧：2023/09/05) https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001136464&cycle=0&tclass1=000001136472&tclass2=000001159909&stat_infid=000032163620&cycle_facet=tclass1%3Acycle&tclass3val=0
- ・「政府統計の総合窓口(e-Stat)」、境界データダウンロード、小地域、国勢調査、2020、小地域(町丁・字等)(JGD2011)」(最終閲覧 2023/12/18) <https://www.e-stat.go.jp/gis/statmap-search?page=1&type=2&aggregateUnitForBoundary=A&toukeiCode=00200521&toukeiYear=2020&serveId=A002005212020&datum=2011>
- ・国土交通省「国土交通省国土数値情報ダウンロードサイト」(最終閲覧 2023/12/18) <https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/other/agreement.html>
- ・国土交通省「国土交通省国土数値情報ダウンロードサイト 河川」(最終閲覧：2023/09/05) <https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-W05.html>
- ・国土地理院「基盤地図情報 数値標高モデル」(最終閲覧 2023/12/18) <https://fgd.gsi.go.jp/download/menu.php>
- ・国土交通省河川局「那賀川水系河川整備基本方針 土砂管理等に関する資料(案)」(同、2006) (最終閲覧 2023/12/18)
- ・農林水産省「eMAFF 農地ナビ 農地ピン」(最終閲覧：2023/09/05) <https://map.maff.go.jp/>
- ・農林水産省「estat 2020 年農林業センサス農業集落境界データ」(最終閲覧：2023/09/05) <https://www.e-stat.go.jp/gis/statmap-search?page=1&type=2&aggregateUnitForBoundary=A&toukeiCode=00500209&toukeiYear=2020&serveId=A005002092007&prefCode=36&coordsys=2&format=shape&datum=2011>
- ・Google 社「Google マップ、Google Earth」(最終閲覧：2023/09/05) <https://www.google.com/maps>
- ・産総研地質調査総合センター「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2 (地質図更新日：2022 年 3 月 11 日)」(最終閲覧：2023/09/05) <https://gbank.gsj.jp/seamless>
- ・大日本帝国陸地測量部「五万分一地形図剣山十号(共十二面)桜谷 明治四十年測図」(最終閲覧：2023/09/05) https://anshin.pref.tokushima.jp/old_maps/map.html?map=MAP_DATA12

2024年3月18日 作成

2023年度千年村研究ゼミ 徳島県那賀川流域疾走調査報告書

執筆

修士2年 塚原朋輝 二上匠太郎
修士1年 口石直道 戸田剣 張沛齊
呉雄仁 碓井颯
学部4年 筏千丸 若佐歩

監修

中谷礼仁
